國民社會主義の基本問題

日獨文化協會譯

實業之日本社

序文

獨逸は歐洲に於て米英と戰を交へてゐると共に新秩序建設に邁進してゐる。我が國も亦東亞に於て平和のために米英を敵として戰を宣すると共に大東亞共榮圈確立のために國の總力を擧げて居る。戰争と建設こそは洋の東西を距てるとはいへ日獨兩國に與へられたる共同の運命であると共に世界平和の爲めの使命である。

斯如き同じ運命に置かれたる日獨兩國が政治、經濟、文化等汎ゆる方面に於いて愈々緊密なる關係を保つべきであることは何人も信じて疑はざるところである。

然乍ら日獨關係の緊密化は單なる辭禮の上の親善と外交的儀禮を以つてしてはなしとげ得べきものではない。殊に近代戰の特色とも云ふべき長期戰化を思ふ時、日獨兩國の提携は愈々密接なることを必要とするのであつて、之れが爲めには兩國の政治、經濟、文化等各部門の相互的理解こそ必も必要なるものである。

日獨文化協會が獨逸政治大學叢書を逐次刊行する所以も此の意圖に他ならない。

玆に飜譯し次を追ふて刊行せんとする獨逸政治大學叢書（Schriften der Deutschen Hochschule für Politik）は各權威者により獨逸の現狀を政治、經濟、文化各方面に就いて研究せられし結果を發表したるものである。而してその發表の對象たるものが專門學校大學程度の人々に存するが爲め、本叢書は叙述の平易と簡結を特徵とするものではあるが、各々その道の代表的人物によつて執筆せらるゝがため獨逸文化の硏究には最も推奬すべきものの一つたるを失はない。

當叢書の原本は數十册よりなるものであるが、本協會は先づ今日、我が國に於いて最も要なるものを選び漸次叢書の形に於いて世に送らんとするものである。

若し、本叢書にして現在の獨逸文化の理解の爲めに何分なりとも貢獻したならば當協會の企畫の目的は喜ばしくも達せられたるものといへる。

昭和十七年二月

荒木光太郎

目次

宣傳大臣ヨーゼフ・ゲッペルス

國民社會主義の本質と形態

只今から國民社會主義の輪廓を解明するのであるが、何分時間が限定されてゐるため、何から何迄解明する譯にはゆかない。何しろ國民社會主義はがつちりとドイツ人の公生活に喰ひ入つて來て、人間相互のあらゆる關係を根底から變化させたのだから、一から十迄これを考察することは難かしいのである。加之、國民社會主義は今日でさへ生成を完了したものではなく、目下生成中のものだから、間斷なく變化や變更を蒙つて居り、從つてその全體を定義することはできない。

我々は全體現象としての國民社會主義の考察は暫く措き、ナチス的思考の基本概念を闡明し、我々の世界觀の體系を荷ふ支柱となつてゐる思想に說明を加へ、その輪廓を描き、これらの基本概念からしてナチス實在の可能性のみならず、その必然性をも讀み取らうと思ふのである。

あらゆる偉大な世界觀の例に洩れず、國民社會主義も深遠な内面的の意義を持つ少數の基本概念を根底としてゐる。

過去十四年間に於けるドイツの政治の根本的な失敗は、我々ドイツ人が個人としても、乃至は組織としても黨としても、自己の運命問題を解決しなかつた點に、その禍根がひそむのである。成程概念に就いての論爭は試みられたが、我々の政治的思索について一致の見解をとるなどは、のつけから出來ない相談だつた。何故かといへば、個人が各自勝手にそれらの概念にすきな解釋を施してゐたからである。甲が「民主々義」だと思つてゐるものを、乙は「君主政體」だと見、甲が「黑―白―赤」だと云へば乙は「黑―赤―金（キン）」だと云ひ、甲が「權力國家」だと解釋すれば、乙は「議會制度」だと見る有様だつた。

我々はこれらの概念に就いて、頭から湯氣を立てながら激論したものである。十四年前に政治的論爭が初まつた時、若しこれらの政治上の概念を闡明し、個人個人が「民主々義」だとか「君主政體」だとか、「議會制度」とか「權力國家」などと解釋してゐるものは

體何であるのか、これを確認するだけの勞を拂つたら、ドイツ人は根本問題に就いては意見の一致を見てゐながらも、それに異つた名稱を與へてゐたのだといふことが判然としたであらう。

さて國民社會主義は、ドイツ民族の思考を單純化し、これを素朴な原始的方式に還元したのである。國民社會主義は政治、經濟生活のそれ自身複雜な現象を、最も簡單な方式に復歸させた。このことは多數民衆を政治生活に引き寄せようといふ、ごく無理のない熟考から發したものである。大衆に理解して貰ふために、我々は大衆と結び附いた宣傳を意識的に行つた。だから、普通ならば專門家やエキスパート達だけしか呑み込めないやうな事實を街頭に持ち出して、つまらぬ男の頭に叩き込んだのである。とびきり幼稚な頭の者でも得心がゆくやうに、何から何迄ごく簡單に説明した。晦澁な、味も素氣もない、曖昧模糊とした概念を弄することを斥けて、すべての概念にはつきりした輪廓のある意義を與へたのである。

我々が成功を博した秘訣は此處にひそんでゐたのだ。

無知なブルジョア政黨は我々の「素朴禮讃」を見下げて、いかにもインテリらしく傲然と上品に構へながら、我々を裁き、自分達こそ政治家だ、お前達は太鼓叩きなんだといふ、誤つた判決に到達した。お前達はせい〴〵ブルジョア的世界觀の使嗾者、つゆ拂ひ位のものだ、と見てゐたのである。けれども、がたついてゐる王座を我ものとした迄はよいが、擧句の果は氣前よく人樣にあけ渡す。なぞといふ任務には、我々は憚り乍ら就きはしなかつたのだ。

ドイツの情勢、ドイツの共同生活の根本原理を明察して、これを明示する能力が我々には具つてゐたから、大衆を動かして、新に洞觀した此の政治生活原理、原方式に就かせる力も我々は持ち合せてゐたのである。此の純粋なアジ現象は、權力政治の分野に於いて痛烈な結果を伴はないではゐなかつた。

此の成功は、ドイツ人が相互に政治的諒解を遂げ、全民族が打つて一丸となつて半ば民主的な、半ばファシスト的な半ばボルシエヴイキ的な、諸國と諒解がついた前提であると私は思ふ。概念の闡明といふ此の同じ處置を、若し我々があらゆる場合に採らなかつたとすれば、一致團結などは思ひも寄らぬ。苟くも政治的協調に達する第一の必須條件は、此の概念局限、原理解明である。この「定義」といふ段落から、容易に政治的實踐が豫見できること、これが重大なのである。

ひと度基本概念を明瞭に認識した者は、政治の實踐がそれらの概念から殆ど有機的に、自然に、判りきつたことのやうに結果して來るのを見て、驚嘆の舌を捲くのである。彼は又政治の必然的な進展の跡を悟り、從つて又ナチス革命の現出以來ドイツにくり擴げられた經過は、未だ完結したものとは見られず、ぜひ共繼續を要することを悟るのである。又ナチス的な物の考へ方が、ドイツ人の公私生活の全般を、根本的に改革して了ひ、それにナチス的内容を詰めこんだ曉になつて、事態の經過は初めて完結できるのだ、といふこと

も悟るのである。

今日のドイツでは「我々は革命をしたのだ」といふことが唱へられてゐる。然し此の革命の巨細な意味だとか、動的に、歴史的に、發展的に見た此の革命は何であるか、それを知つてゐるものは極めて少い。それどころか國民の中には、そも〳〵ドイツに革命が演じられたことを認めようとせぬ人々さへ存在するのである。

「革命」とは何であらうか？ ナチスの革新勃發以前には、革新といふ原義とは元來若干の直接關係しか持たぬ特徴が、革命なる概念と結合されるのが一般だつた。「革命」といふとすぐ想像されるのは、バリケードを結び廻し、何分かの權力手段を借りて既存の法律に反旗を飜す、さうした政治上の事件であつた。眼に見える現象、卽ち支配層を强引に驅逐することゝか、暴力を逞しくする新しい權力群の政權掌握とか、そんなものしか知られてゐなかつたのだ。然し乍ら人の眼に觸れずに革命を遂行することは、これと全く違つた意味を持つてゐる。それはバリケードなどといふ概念を絕對不可缺のものとして伴つて

はゐない。又此の概念が是非とも眞の革命の特徴たるを要す、などといふこともないのである。無血革命、合法的革命といふものもあり得るし、又或る權力群が格別革命も、もくろまずにバリケードに立てこもることも、これ又可能なことなのだ。革命とは獨自の法則性を具へた動的現象であつて、その動力性と法則性とを既存の反對特權として國家の法則性に移すことを目的とするものである。それがいかなる手段で行はれるかは全く問ふところではない。暴力とか合法性とか云つた手段は、革命の特徴を定める上に何分の役割をも果しはしない。その典型的な好例がドイツの革命である。何故かと云へばドイツの革命は、小心翼々と既存の法律を守り乍ら、合法的手段を踏んで遂行されたにも拘らず、世界史上未曾有の精神的、文化的、經濟的、社會的最大革新を惹起したからである。これは何のせゐかと云ふと、ドイツの革命は天下り式ではなく、下から行はれたといふ、此の特色のせいなのである。

革命にも上からのと下からのとがある。兩者はそれの征服する權力圏によつて區別され

るといふよりは、その權力圈を保持できる永續性によつて區別される。上からの革命は非有機的であり、歷史的意義の僅少なことが多いやうである。反之、下からの革命は有機的であつて、幾世紀も生き永らへるのだ。精神的な準備もないのに、或民族に對して天下り式な新しい法則を押しつけることは、全然不可能とは云はぬ迄にも、非常に困難なのである。だから上からの革命は、大抵壽命が短かい。

下からの革命はこれと反對だ。その法則は、雲の上の少數者が机上ででつち上げて、強制的に實施するものなどとは違ひ、民衆層でまづ體驗されたものが、上へ向つて生長を遂げるのである。民衆の革命準備が整つてゐなければ、よしや革新の一團が權力を奪取して最善の目標を眼前に眺めてゐても、折角の權力を長いこと掌握してゐる譯にはゆかない。上からの革命は、その大部分が極めて急速に演じ了へられて了ふ。十指にも滿たぬほどの將軍又は政治家が、盟約を結び、政權を顚覆したと思ふと、もう權力を掌握して了ふ。反之、下からの革命はどん底から盛り上つて來るのだ。民族のうちの、眼にも止らぬ位な原

細胞から展開して來る。十人ばかりの革命家が百名となり、千名が十萬となる。國家機關は漸次寄邊を失つて來る。これに反抗する動的な革命勢力の方が强大となれば、精神的には革命旣に成つたのである。それが政權を掌握し、國家機關と結び附けば、こゝに……

……我々が一九三三年一月三十日以後體驗したものが完成されるのだ。それはいはゆる「革命」そのものではなく、革命行爲の最後の部分なのである。革命の法則性、思考方式、動力性——それらは幾十年間にわたつて、民力の最も深い根柢から生長を遂げて來たものだ——が、眼に見えて國家に移されるのである。

ドイツは奇蹟を體驗した。六千萬民衆のあひだで、流血の慘もなく、バリケードも機關銃もなしに革命が完成したのだ。此の革命の獨自の動力性は、停止する境を知らず、絕對的の自明さを以てあらゆる分野を占領し、その法則はありとあらゆるものを支配した。過去數ケ月のあひだに、革命家達は變革のテンポを規定して了つた。その結果が卽ち新しき

國家なのである。

事實、こゝに完成を見たものは、革命法則の國家への移管に外ならなかつた。ナチスの權威者達は此の時からして國家の要人となり、革命の法則は國家の法則となつた。ナチスの思考法式は國民の手に渡つた。此の歴史的プロセスの合法的な進展から免れ得たものはドイツの國中何一つ存在しなかつたのだ。

若し此の革命が、一群の人々の掠奪的な意圖を基礎とし、且彼らの政權掌握が理念といふ内面的意義なしに完成したものだとすれば、この革命を最後迄貫徹することは絶對にできなかつたらう。此のナチスの革命にあつては、一つの世界觀が勃然として發現したのである。

世界觀なるものは――これが世界觀の一番大切な特色だ――知識とは毫末の關係もない。知識も碌々持ちあはせない哀れな勞働者が、世界觀を抱いてゐるのに、學問の蘊奥を極め、知識のあらゆる分野に絶對的支配を逞しうしてゐる大學教授が、必ずしも世界觀を

抱くとは限らないのである。それどころか、經驗の敎へるところに依れば、知識が大きくなればなる程、世界觀を擁護する勇氣は小さくなつて來るものだ。世界觀とは——讀んで字の如く——世界を觀る見方なのである。これに對する前提は、その觀方が常に同一不變の視角の下に行はれることである。世界觀の代表者である經濟も政治も、全く同一の尺度で律せられ、文化生活は社會と有機的に關聯し、外交は內政狀態と有機的な關係のあるものと見做される。世界觀とは、人間と、世界、國家、經濟、文化及び宗敎に對する人間の關係を、常に同一不變な視角の下に考察するといふ意味である。此の現象には、大がゝりな綱領などは全く不必要である。此の現象は大抵ごく手短かな命題で定義して了ふことができる。勿論、その命題の是非曲直が肝心になつて來る。それが正しければ、幾世紀又は幾十世紀にわたつて民族の救濟ともなるが、若し誤つてゐたら、その命題から生れた體制は、みる〳〵內に土崩瓦解するに相違ない。史上の大革命は悉く、此のやうな前ぶれから出發して行はれたのである。革命の發端に書物とか、署名入りの綱領なぞが掲げられたた

めしは絶對にない。いつもきまつてたつた一つの合言葉があり、それが公私の生活を洗ひざらひ光被してゐたものである。

例へばあの浩瀚なキリスト教の倫理にしろ、宗教にしろ、キリスト自身が確立したのではないのだ。キリストは隣人愛といふ根本概念を闡明しただけで、あとの一切は教會の長老達がつくり上げた仕業である。此の隣人愛なるものは、古代世界のあらゆる概念とは全く正反對の概念だつたから、此の兩極は融和するすべもなく、古代世界がキリスト教を排撃するか、又はキリスト教が古代世界を排撃するか、嫌でもその一つを擇ばねばならなかつたのである。

革命家達は、理論に膠着したきりになるといふ意圖なぞは持ちあはせない。彼らは理論から實踐へと進出して、その展開を明視するから、合言葉の實現に就いて彼是議論するなぞ全く無用となつて了ふ。ナチス革命の合言葉は、キリスト教やフランス革命の教義と全く同樣に實現されることだらう。

從前ドイツのブルジョア界は、「ナチスの綱領とは無綱領といふ意味だ」と稱して嘲罵した。反之我々ナチス黨員は、我々は教會の長老なぞじやない、我々の教義の勸誘者だ、鬪士なのだといふ自負を持つてゐた。我々の意圖は、我々の世界觀に學問的な根據を與へることではなく、その教義を實現することだつた。實踐を理念の認識客體と認めることなどは、これを後代に保留しておく積りだつたのだ。法律家の任務は、空理空論で民族の生活形式を規定することであつては絕對にならぬ。机上で作られる制度が、民族に憲法を與へることは絕對にないであらう。自然は科學をとび超えて、獨自の生活を形成するのだ。このことがナチスの革命にあつてもやはり實現したのである!

我々が政權を掌握する直前、學問は、いや此の革命現象は既存の法律と合致しないとか、いやあの革命現象が法律違反だとかいふことをしきりに證明しようと努め、國策上の論爭を最高法廷の手に委ねることをも辭さなかつたのである。當時我々はたゞ微笑してゐ

るだけだつた。何故かと云へば學問が力味返つて、こんな狀態は怪しからんと說き立てゝゐる中に、事態はとつくに完遂されてゐたからである。學問には、既存の狀態から新しい法則を讀み取るだけの權利しかないのだ。だからして我がナチスの革命法則を國家に移すことによつて生じた狀態が——これ卽ち法律なのである。

この狀態が民族の標準狀態なのだ。それは學問の批判を許さない。革命は現實となつたのだ。我々が現に形造つてゐるものを、せめて幾分でも取消せるなどゝ信じてゐる者は、狂氣じみた反動人種にすぎないのである。

國民社會主義は革命で作り出した新しいドイツの法律狀態を、徐々に安定させつゝある。これは古い法律とは根本的に趣を異にするものであり、舊體制時代に揮ふことのできた批判の可能性をも拒んでゐる。我々の抗爭時代に民主政治はデモクラチックな方法を認めてくれたが、民主々義の體制では必然さうあらねばならぬのだ。然し我々國民社會主義者は、我々はデモクラチックな見地の代表者だなぞと主張したことはたゞの一度もない。

それどころか、我々が民主々義的な手段を用ひたのは政權掌握のためにすぎない、一度び政權を掌握すれば、抗爭時代に是認されてゐたあらゆる手段なぞは、敵手達にはこれを容赦なく拒む旨を、公々然と宣言した位である。それにも拘らず、我々の統治は洗煉されたデモクラシーの法律に勝るとも劣らないと、我々は自讃することができるのである。

我々は押しも押されもせぬ批判の名人であつた。だから今日でも衆口一致的に、批判の權利を要求する立場に立つことができる。たゞ此處に一つ相違がある、といふのは、假にも批判の權利に何らかの意義を持たせ、民主々義的愚劣に陷らせぬ積りなら、必ず賢者に對して愚者の批判を許すだけに止め、絕對にその逆であつてはならぬことだ。かくしてのみ民族を稗益できるのだ。この民族の利益といふことこそ、政治上最高に位するものでなければならない。だからして、あとはたゞ我々が抗爭時代にいかにも賢者らしかつたといふことを證明しさへすれば足りる譯である。

敵手側は政權を握り、軍隊を、警察を、官吏機構を、金力を、政黨を、議會の多數を握

つてゐた。敵手側は輿論を支配し、新聞紙を、ラヂオを――要するに「權力」といふ一般概念で總括できるあらゆるものを支配してゐた。ところで、發足當時の同志は僅かに七名といふ微々たる一群が、批判を唯一の武器として、十四年を閲するあひだに、敵手から權利も權力も奪取することに成功した以上、賢者は誰かといふことに疑ひはないやうに思はれる。假に敵手側の方が賢者だつたとすれば、効果的手段がこれ程迄も不均等に配分されてゐる以上、適宜、方法なり可能性なりを發見して、我々にそれを奪取されることを妨げたに相違なかつたらう。ところがさう行かなかつたのだ。それどころか、敵手側は成程革命の有機的完遂を一時的に抑止することには成功したが、新しい法則は遂に凱歌を奏したのである。

ドイツの革命が一九三三年一月三十日に至つて人の眼に映る姿をとり、ナチス運動が政權と結び附くに及んで、何だか革命は此日になつて初めて勃發したのだといふ觀があつた。けれども本當を云へば、革命はずつと早く始まつてゐたのである。大戰の勃發、ヴェ

ルサイユ條約の批准と共にもう始まつてゐたと云へようか。歳月を重ねるうちにその威力は漸く現れ、心醉者を獲得し、革命に從ふ者達の協同生活を形成し、新しい權威者を創り、新しい生活形式や、新しい種類の見地や、新しい樣式を創造したのである。さうして此の新しい樣式が、政權掌握の日を期して、新しい國家に移されたのだ。

一九一四年の八月一日は、歴史的に眺めると新舊の交叉點である。苟くも歴史眼を具へた人間ならば當時既に「今此處で中斷したことは、大戰後これを再開始できないのだ」と痛感したのに相違ない。九百萬のドイツ男兒が、世にも恐るべき肉體的、精神的の苦患を嘗めたのだ。彼らは人間の苦痛、人間の諦念と沈欝との、ありとあらゆる地獄を、ありとあらゆる煉獄をくゞつて來た。四年の昔中絶したところから、新しく手を染めることなぞは、彼らには出來ない相談だつた。否――これらの人達は、一つの新しい思考方式を塹壕から携へて來たのである。恐るべき苦艱と危險とを嘗めてゐる中に、順境に於いては絶對に味はへぬ新しい結合を體得したのだ。彼らは死が絶對的に平等無差別なことを識り、結

局のところ、殘つて消えぬものは人格の價値だといふことを身に覺えたのである。戰野に出ては財産も、教養も、貴族の名も、全く問題ではない。どんな違ひがあつても彈道は曲つてくれないのだ。貴きも賤しきも、富めるも貧しきも、偉大も卑小も、一律一體平等無差別に薙ぎ拂はれたのである。人々の間で消えずに殘つた相違はたつた一つだけだつた。人格の價値即ちこれである。どんなに同じ軍服を着ても、一律にすることのできないのは、甲は勇敢なのに乙は卑怯だといふ事實である。甲はいかにも男の眞價を發揮して敢然と命を捨てたのに、乙は卑劣にもこそ〳〵と逃げようとしたといふ事實である。かうした新しい價値評價が前線から銃後へと移されたことも自明ならば、我家にじつとしてゐた舊式「政治家」共が、此の新しい心構へがつゆ程も悟れないで、これにおじ氣をふるつたこともこれ亦自明であつた。けれども力の法則に從つて、若き者が、剛健なる者が、勇者が、老者に對し怯者に對して勝利を博さずにはゐなかつた。それは單に時間の問題にすぎなかつた。

九百萬にも上る前線のドイツ勇士達は、政體の脆弱なことをよく心得てゐたが、然も國民のために、自分の生命を投げ出してこれを擁護したのである。彼らは、全世界がドイツ打倒のために立ち上つた事實を、身を以て體験した。彼らは、全力を傾け盡してのみ此の脅威を拂ふことができると認識したのだ。今迄國民は俺の所有物だ、なぞと夢にも思つたことのないやうな、最も慘めなドイツ人迄も、國民のためには身命を擲つた。これは誰が眼にも明瞭な事實となつた。このやうなドイツ人は、自分の國の文化的價値なぞは一向に御存知なかつたのだ。ヴァーリナクの名も知らず、ベートーヴェンの名も、モーツアルトの名も、ゲーテもカントもショーペンハッアーも識らないのだ。せい〴〵人から又聞きして知つてゐる程度なのである。「これから鑛山だの鑛坑だのを占領しようつて寸法なんだが、こちとらにや一向面白くもねえ。持主がフランス人だらうとドイツ人だらうと、使はれるこちとらにや痛くも痒くもねえんだからな」なぞとぼやく權利さへ、持たうと思へば

持てた手合なのだ。それにも拘らず、これらの人々はあらましの輪廓さへ知らぬ理想のために身命を投じたのである。それは我々の體驗した事實だ。が、やがて世にもきびしい負荷の試錬が見舞つて來た時、無知無氣力な幾百萬の人々は、又しても此の理想を捨て去つた。然し當時の國家は民族國家ではなかつたのである。何故かと云へば、民族國家とは試練を重ねて生長を遂げて行くものだから。苟くも民族といふ以上、國家を捨て去ることは絶對にないのである。

ナチス運動はこれと反對の展開を經驗して來た。黨員たちは危機に見舞はれても絶對に離反しなかつた。離反して行つたのはいつも取卷連や選擧民達にすぎなかつた。反之、黨員達は刀のこぼれをとぎ直さうとて、愈々益々猛り立ち、積極性を發揮したのである。民族國家を所有することの價値を明瞭に意識してゐる民族とても、やはり同じことをするであらう。かの戰野に身命を擲つた人々が、自己の防衞した國土の偉大さを、その價値を、その業蹟を理解してゐたとするなら、今こそ存亡の岐れ目といふ時に、政治ゴロやイカサ

マ師共が此の國土を素早く手中に收めたことなぞを、絶對に許しはしなかつたらう。熱狂的にいきり立つてそれを阻止したらう。前線の犠牲（にえ）と散つた非常な人柱が、僅々一日の空しき賭博の夢と消えることを、絶對に忍びはしなかつたらう。

以前のドイツ人は世界的民族ではなかつた。だからドイツ人は世界政策を行つてもゐなかつた。大戰勃發當時、國民をリードしてゐた人物はヘボ哲學者のヘボ政治家であつた。その後も此の男の無力ぶりを見ても一向眼が覺めず、ドイツの政治家達は若返るどころか愈々老いぼれて行つた。ところが敵國側では正にその反對のことが起つてゐた。敵國を牛耳つてゐたのは眞の男子に相應はしい人々で、微塵も感傷などに煩はされぬブルータルな權力萬能家だつた。彼らは國家の權力手段を利用し盡す段では情容赦もなかつたのだ。暴動を起した海員を銃殺して宜いかといふ件で、幾週間も議會に小田原評定をさせるやうな愚を踏まず、有罪者は銃殺するといふ心臓を持ち合はせてゐたのである。我々ドイツ人は軍事上では赫々たる戰勝を收めたのだが、政治の方面では全面的に完敗を喫したのである。

戰爭目標も持ち合せねば、世界政策も行つてはゐなかつた。曖昧模糊とした戰爭目標が、眼も廻りさうな渦を卷いてゐる。無產者よ、これのために身命を擲て、とかういふのである。だからして前線は浮足立ち、國民は瓦壞し去り、きびしい史的展開の齒車の前には民族國家といふ概念など齒も立たなかつたのである。だから英雄的な勇敢な戰ひを果した後には、恐るべき破局が襲つて來ずにはゐなかつた。あの暗澹とした十一月の幾週日のあひだ、實直な人々や、最優秀分子達や、實行力をもつたドイツの愛國者達は、自己の民族の運命に絕望した。その中には、絕望のあまり身を破つたものも多かつたのである。

今日の我々は、違つた眼で事態を見てゐる。我々は事態の展開の有機的結合性と合目的性とを認識し、「我々は革命の勝利を贏ち得んがために、戰爭に敗れざるを得なかつたのだ！」といふメラー・フアン・デン・ブルックの豫言を理解してゐるのだ。戰爭が既に革命の一部だつた――この革命の效果は、世態に現れたのではなくて、人間のうちに現れたのである――といふ見解から出發すれば、次のやうな結論に到達する。「我々が革命の第

一部で雖でも敗れねばならなかつたのは、第二、三、四幕に於いて我に返り、とにかく最後の勝利を占めるためだつたのである！」

戰爭の終結後、敵國側がドイツのために編み出した平和條約なるものは、實に老獪狡猾を極めてをり、その目指すところはドイツ國民を殲滅し、列强のリストからその名を決定的に抹殺することだつた。ワイマル體制の諸黨派は、此の事實をつゆさら認識してゐなかつた。ドイツのブルジョア新聞紙すら、つい數年前になつて、「貢賦」といふ言葉におじ氣をふるひ、ヴェルサイユの屈辱條約を口に上せたゞけでも、「友好に結ばれた諸國民」の關係を結構毒化できると說いたのである。我々國民社會主義者は多年にわたる工作によつて、敵手側の念の入つた奴隷化方策の實情を我が國民に明らかにして來た。今日のドイツでは三尺の兒童でさへも、ヴェルサイユ條約の恐るべき結果を知つて居り、此の貢賦條約の影響をはつきり理解してゐないドイツ人は、もはや一人もない。然しつい十五年昔には叛亂を煽るドイツ宰相が國民の前に現れ出て、「ドイツ國民は全面的の勝利を得たのであ

る！」などと唱へたものである。此の闘爭の十五年間に、何といふ變化が完遂されたことであらう。「民族とは常に同一不變のものではない。民族の身うちには善への素質も、惡への素質も悉くひそんでゐるのだ。國民が善への決意を固めるか、惡への決意を固めるかは、常に指導によつて左右されるのだ！」と、このやうなことが事實云へるのである。今日のドイツ民族は一九一八年の國民とは比べものにならない。同樣に一九一八年の大衆も一九一四年の國民とは比較にならないのである。心的狀態が根本的に異り、思考法式が異るのである。現在では新しい協同體の意義があり、今迄と異る內面的の結束があるのだ。

以上我々の政權掌握の方法を敍述し、ナチスの本質の根源を說明して來た。以下尙ほ若干の根本概念を闡明し、ナチスの思想界を理解する最後の鍵にしようと思ふ。

「國民社會主義は全體主義の國家を欲するのだ！」といふことばが、世上往々聞かれる。これは非常な誤解である。何となれば國民社會主義は國家の全體性を追究するのではな

く、理念の全體性を追究するものだからである。これは何を意味するかといへば、最近十年間我々の闘爭目標であつた見解、我々が勝利に迄導いた見解を遺憾なく貫徹することなのだ。此の見解は公共生活の全般に適用され、科學、文化又は宗教などの分野に對しても遠慮するものではない。ナチスの視角に適合せぬやうな關係は、ドイツにはもはや存在し得ないのである。

ナチス運動は權力を握つてをり、他のあらゆる黨派を撃滅して了つたから、現在では解消に瀕してゐる、といふ説を往々說く者がある。「今日では誰彼なしに國民社會主義を奉じてゐるから」――これが論者の說くところなのだ。これは見當違ひである！　成程全民族をうつて一丸として、軍人的な物の考へ方はできよう。けれども民族は、軍人的な態度の眞の育成所である國軍を放棄するものではない。國軍こそ軍人生活の傳統を、その組織を、その經驗を保持してゆくのだ。全民族を擧げて兵士となるのは例外の場合に限る。通例は兵士たることは、選ばれたる少數者の特權なのである。

別の例を引いてみよう。劇場の監督は、できる丈多數の人間が劇場を訪れることに大きな關心を繫いでゐる。けれども入場者といふ入場者が舞臺の上に出て行つて、俳優の代役を勤める譯にはゆかない。どんなにしげ〳〵と劇場に足を運ばうとも、此の特權を獲得することはできぬ。藝術家のさゝやかな特權の天地に入るのにも、苦しい修行を積まねばならないのである。

誰も彼もが英雄のマントを身に纏ふことはできないのだ。誰も彼もが――政治的に眺めての話だが――黨員章を身に帶びて、自分こそ正眞正銘の國民社會主義者だ、などといふことはできない。素人が芝居用の長上衣を身に纏つたところで、悲劇役者とはまるで別物だ。反對に偉い悲劇役者なら長上衣がなくてもそれと判るのである。素人は悲劇役者になる素質を持ちあはせてゐないからこそ、長い上衣をたら〳〵させるにすぎないのだ。だから、黨にしても必ずナチス指導者の特權の世界でなければならぬ。その少數者は不斷に、國家指導の特權を飽迄も主張せねばならない。又步武堂々と此の特權の世界に進出しよう

とするドイツの青少年に對しては必ず道を拓いてやらねばならぬのだ。それのみに止まらず、此の特權階級は特權よりも寧ろ特義務の方を多く持つてゐるのである！　此の階級は國家の指導に對する責任を負つて居り、民衆の手からは此の責任を嚴かに取り去るのだ。國民のために國家を指導し、萬民の利益をはかることが、此の階級の義務である。

ナチス運動の水準が、かつてのブルジョア政黨やマルキシズム政黨のそれと同じものだなぞと考へたら、此の誤謬の結果は實に重大なものがあらう。國民社會主義は、まだ芽を出したか出さないかといふ頃から、他のあらゆる政黨を撃滅して、人々にこびり附いてゐる影響を取りあげることを目標としてゐた。だからナチス運動の綱領的前提は、今日と雖もいさゝかの變更さへ加へられてはゐない。未來を望む眼光は炯々として曇らず、獨自な綱領の內容をきづき上げようとしてゐる。ナチス運動は不退轉の人々に支へられてゐるのだ。性格の力が變化したり、動搖する大衆を恃んでゐるのではない。

我々國民社會主義者に對して、こそ〳〵した注文が時折つけられたりする。ナチス綱領の術語を何や彼やと變更してみたらどうだ、といふのである。例へば、「社會主義」なぞと稱へるのはどういふ譯だね？　社會といへばそれでもう申分ないんだ！　何故つて結局我々全部が社會的なものだからね！　社會主義つて言葉は何だか鋭すぎて氣持が惡い、それをやめてくれたらそれこそ何から何迄しつくりしたものだよ」なぞと云ふ者がある。これは駄目だ――我々國民社會主義者にはそんなことはできない。何となれば「社會的」と「社會主義的」、「國家的」立場と「國家主義的」立場とでは、根本的に別ものであるからだ。「國民的」なる概念には「でもある」といふ概念が添ふてくることが多い――これが決定的な相違なのである。此處で二つの世界が袂を別つのだ。「國民的」な心構への特長だなぞと稱へられるものは、國民社會主義者からみたら完全に取るにも足らない。外面的な事物は、國民社會主義者には何らの價値もない。彼は血肉を擧げ、靈肉を傾け盡して、民族にその身を委ねてゐるのだ。「國事に斃れることは甘美な名譽である」なぞといふ空

言空語が、眞の國民主義者の口から洩れることは絶對にないだらう。彼はあまりにも誠實だから、そんなことは云へないのだ。身命を賭さうといふ不斷の覺悟をば、俗物の大向ふを相手にべら〱と喋り散らして、その品位を汚すことなど、彼には到底忍び難いのである。

社會主義といふ概念に對しても、全く同じことが妥當する。「俺は社會的だ！」とかういふのは、大抵銀行の頭取、法律顧問、工場主、乃至は高位高官の者である。彼らは貧民救濟のために病院だの感化院だのを設立しようといふのだ。どうも現狀の儘續けて行つてはいかん、何とか一寸變へないことにや、なぞと折れて出たりする。ところが社會主義者はそんなことには超然としてゐる。「我々全部がうつて一丸となり、一つの民族にならねばいかん。かうすれば國民も試錬を乘り切れるのだ」——此の見地に彼は立つてゐるのである。

此の民族となるためには、どのやうな犧牲も敢て厭ひはしない。民族が順境にあらうと

逆境にあらうと、私はその一員であり、民族と悲喜を分つのである。階級などは私の眼中にはない。私は一にも二にも、國民に對する義務を痛感してゐるのだ。

國民社會主義は、ドイツ民族の水平化なぞといふことは夢にも考へてゐない。立派な業績を立てゝ、數多の同時代者のあひだから、嶄然と頭角を抽でる者があれば、必ず稱讃を惜しまないのだ。然し乍ら死や、危險や、試錬の前に出れば、我々は結局のところ平等である。だから互ひに肝膽相照す時には、此の平等を表現して、お互ひのあひだにぱつくりと溝が開かれることなどは、絶對に許容したくないものだ。何故かといへば、いつかは必ず危急の秋が訪れて、我民族が内面の團結にたよる時があるからだ。

例の喧しい論爭の種となつてゐるユダヤ人問題も、此の觀點から眺めねばならぬ。此の場合でもやはり區々たる犧牲は問題でない。一にも二にも國民の福祉が問題なのである。

我々國民社會主義者が權力の地位に就いてから、既に一ヶ年半となつた。我々が政權を

掌握した時、ドイツ民族に對して我々は四ケ年の建設期間を留保した。此の期間は既に四分の一以上過ぎ去つたが、無爲の裡に流れ去つたなぞと主張できる者は、唯の一人もないであらう。勿論惡意を以て詭辯を弄するならば、未成のものがまだ〳〵澤山あると云つて我々を責めつけることもできよう。然し乍ら我々の國家では、凡そ人間として能ふ限りのことは爲し遂げたのだ。このことは誇らしくも確言できるのである。我々は奇蹟を豫言したのではない。だからして、何人とも雖も奇蹟を期待することは許されなかつたのだ。我々は遠慮も會釋もなく、時代の百弊を匡正し、その進展を阻止しようと力めて來た。我々國民社會主義者は、從來解決不能視されてゐたドイツの問題を解決したのである。國家改造の問題、階級新秩序の問題、黨派不統一の問題、政治的、精神的、世界觀的方面に於ける民族統一體創設の問題等が卽ちそれである。失業打倒に對する我々の政府の鬪爭も今正に酬であるが、こんなことは舊體制の時代には絕對に見られなかつたのだ。我々の政府は前代未聞の勇氣を揮つて、冬季の窮乏を攻め立てた。又將來に於いても、恐るべき時代病

たる失業打倒の闘争を、物の怪にでも憑かれたやうに繼續してゆくであらう。

ドイツ民族は客年中、國民社會主義に就いての上々無類な實物教育を與へられた譯である。以前には敵意を含み懷疑の念を以て我々に抗つた者も、我々が最も困難な問題の解決に誠心誠意手を染めて、堂々たる成果をあげたことを、今日では確く信じてゐるのである。これから爲すべき仕事はまだ山のやうに殘つてゐる！　我々は青春の力をこめて堂々の歩武を進めるのだ。ドイツの民族はよしや苦難や困窮があらうとも、絶望する根據は絶對にない。何となればドイツ民族は既に今又自力更生してゐるからだ。

「我々を投げとばした苦難よりも、一段と強力にならうといふ勇氣さへ持てば、ドイツの國が滅亡することはないであらう！」

ミュンヘン大學教授　オットー・ケルロイター

ドイツの民族及び國家形成の基本問題

一

私は一九三二年の十二月にも本大學の招きに應じて「憲法の危機に際しての民族と國家」といふ論題で講演したことがある。當時此の論題を選定した意義は、自由主義的權力國家の、有力な過渡的制度に對する反抗的な立場を表明することであつた。當時の憲法理論は、今日では歴史的の興味しかない、かのワイマル憲法に解釋を施して、舊來の制度に憲法理論的な基礎固めを試みるものが大部分であつたのである。ところが前述の私の講演は、「民族と國家の本質から出發して、民族と國家の政治的結合を提示すること」(註一)が、現代の國家學の課題であると說いたのであつた。苟くも當時に於ける政治上の現實を眺めた程の者ならば、この課題を明察した筈である。蓋しワイマル體制は當時既に瓦壞しつゝあ

り、ドイツ民族はナチス運動の旗幟の下に新しいドイツ國家を編成しようとしてゐたからである。古き體制は故フォン・ヒンデンブルク大統領の偉大な人格に縋らうとして空しく足掻いて居つた。古き體制は故大統領の權威にしがみ附かうと努めたのであるが、此の權威は崩壞し行く體制とは全く無關係なもので、プロシヤ傳來の義務心や軍人精神といふ最上の傳統に由來するものであつた。ワイマル體制そのものが、獨自な生氣横溢する國家理念の擔當者だといふ實を擧げたことは、絶えてなかつたのである。民族があらゆる眞の政治的生起の政治的基本價値であるといふ、此の深遠なドイツ人の國家思想は、國民社會主義の理念となつて、ヒットラー總統により始めて形を與へられたのである。

私は今日本大學總長のお求めに應じて「我國の民族及び國家形成の基本問題」を論ずることになつたのであるが、今回もやはり三年半以前と同樣にあらゆる民族的、政治的形成の根本問題である政治的結合の問題、從つて民族と國家との關係を形成する問題に言及するのである。

何分短かい講演のことであるから、ドイツの民族生活、國家生活の根本問題のあらゆる側面を仔細に吟味することは不可能である。ほんのヒントを與へることさへもできない。けれども、國民社會主義國家の政治學を動かすあらゆる問題——その僅々若干の例を選び出してみれば、新しき民族概念作成の問題、これと聯關する問題であるが、國家に於ける民族的人格の占める地位の問題、國家觀の明澄化、法治國の問題、黨と國家との關係等であるが——は、要するに民族國家といふ此の政治上の根本的大問題の局部問題にすぎないのである。

ところで此の根本問題に對し、從つて又上述の局部問題に對して、いかなる態度をとるかといふことは、國民社會主義科學內部の精神的、政治的心構への問題である。苟くも科學者たる以上は、自己の精神的根本の心構へを闡明する義務があると私は考へる。此の點に就いては、私は、イエーナの學生團體に對する一九三二年の講演(註二)中で、民族及び國家に對して自然に生じた拘束を常に必ず忘れないことが、あらゆる學的な心構への基礎

であり、科學としての力は此の基底以外からは決して來らないことを强調したのである。

從つてあらゆる民族的科學が必ず有機的に生長した科學である爲には、民族的科學は必ず歴史的理解を根柢とせねばならず、單なる概念科學として甘んじてゐることはできない。民族的科學の本質上さうなつて來るのである。ところが純粹な概念法學の典型的な一つの特徴は理論と實踐とが分裂する場合、理論が概念を時代遲れの死んだものと唱へる場合、立法者がこの概念を再三再四意識的に利用することである。例へば、現在では自由主義的な思考から出發して權利を作ることは不可能であるから、自由主義的な意味での公法上の權利はもはや存在できない。これは自明なことである（註三）。けれども私は、我々の民族生活と國家生活内部に於ける民族的な人格權利の現時と範圍とを追求する方が、はるかに重要だと考へる。それはこれが眞の實際問題だからである。さうして實際問題のみが結局のところ效果の多い理論問題でもある。

說明のためにザクセン上級行政裁判所の判決を二件引用する。此の裁判所は一九三五年

一月十八日の判決(註四)中で、建築に關する權利の最高原則を次のやうに示した。「建築ハ民族協同體ヲ害スルヲ得ザルモノトス。民族協同體ハ專ラ人間ノ平和的共同生活ヲ基底トスルガ故ニ、著シク個人ヲ侵害シ、共同體ノ平和ガソノタメニ攪亂セラル、ガ如キ建築ハコレヲ認可スルコトヲ得ズ。」といふのである。此の原理を實地に適用する場合には、建築者の利害は協同體の代表者たる隣人の利害の下位におくべきことを考へてゐるのは明白である。さて此の同じ裁判所が一九三五年十月十八日に一つの判決を下し、次のやうに論じた。「建築者ハ隣人(註五)ノ利害ヲ第一ニ考慮スルノ必要ナク、自己ノ願望ヲ隣人ノ願望ニ隷屬セシムルノ要ナシ。ノミナラズ通例ノ場合ニアリテハ建築者ハ自己ノ建築用地ヲ所與ノ建築規則ノ範圍內ニテ適宜建築的ニ利用シ得ベク、隣人ハ通例ノ場合ニハ此ノタメ生ズル不利益ハ――殆ド凡ユル建築ニ於イテ、多少ノ相違ハアルモ常ニ生ズベキモノハ――コレヲ甘受セザルベカラズ。」

以上の二判決は、その時々の具體的な狀況に照して正當なものであり、これらの問題は

生活形成を出發點として解決する必要のあることを示して居る。而して概念法學の如きは斯かる問題を解決するには適しないのである。

民族的思惟はその本質上あらゆる分野にあつて歴史的の思惟でなければならない。前行時代の時局を理解し、此の時代に活躍した偉人傑士を識る者だけが、現代に對する彼等の意義を判斷することができる。今日我々はフリードリッヒ大王、フオン・シユタイン男爵、ビスマルク等はドイツ民族の偉大な政治的指導者だと見て居り、彼らの活躍は今日の政治形態の礎石として沒却することができないのである。科學に於いてもその通りである。本年四月、オーストタリーの偉大な史學者リッター・フォン・ズルビクにモーツアルト賞が授與された時、彼は晴れの式上に於いて感謝の辭を述べ、自分はレーオポルト・フォン・ランケの精神を信奉するものであると明言したのである（註五のイ）。ドイツの民族的國家學も法學も、これと同じ意味でオットー・フォン・ギールケに傾倒して居る。私はかつて他の論文中ギールケを評して「ドイツ現時の民族的國家構造の創始者（註六）と云つたことが

ある。

ドイツ民族の政治的、精神的の指導者たるこれらの人々が、彼等の時代の子であつたこと、現代とは異つた政治的、精神的現實の中で活躍したこと、これは自明のことである。又其の結果としてヘーゲルやオットー・フォン・ギールケの如き、國家學上極めて重要な思想家でも、概念の構成に當つては所與の現實に發足點を求めたのである。勿論此の人々が自分達の時代の精神から出發して創造した概念は、我々の眼からみればもはや絶對の規範力をもつものではない。何となれば苟くも精神的、革命的革新と名の附くものならば、新しい政治的の價値を生まねばならぬからである。さういふものゝ、今日の政治的實體は、過去の政治的價値のうち今日に適するものをも含んで居るので、過去の思想家達の積極的な精神上の偉業に對しては、理會と畏敬の念を示し、彼らとの折合をよくせねばならない。これは敬遠してはならない認識である。何となれば精神的偉大の特徴は、その時代を超えた影響力をもつ點にその本質があるからである。

故に國民社會主義の民族觀、國家觀、法律觀に適合する概念は、從來の概念界と結び附け、これと協調を保ちつゝ徐々に展開することができるのである。我々は過去の概念界の中で、どれが今日の概念にも適合するか、どれが適合しないかを精密に吟味せねばならない。前者には現代の新しい精神的政治的な世界の感覺を盛つて、これを引き受けることができ、後者は除去し排斥せねばならない。これが今日のナチス立法のゆき方である。今日の國家理論、法律理論も、このやうなゆき方をせねばならない。新しい概念法學の邪道に迷はないつもりならば、無から單なる概念や構想を創ることはできない筈である。政治上の概念を新造する際には、如何に愼重でなければならぬかを痛烈に示してゐるのは、かの所謂「全體主義國家」(註七)といふ概念である。これはラテン系の思惟から承け繼いだ概念であつて、種々面白くない影響を生んだのであつた。

二

此の見解から出發してドイツの民族形成、國家形成の基本問題を考察するならば、ドイツ人の民族生活、國家生活の政治的な基本價値である新しい政治的民族觀の問題が、最も重要な問題であることは疑ひのないところである。此の事實に基づき、今日では民族的國家觀なるものを云々することができるのである。此の新しい民族本質觀がヨーロッパの精神界の承認を受けんとして、今尙惡戰苦鬪せねばならない事實から明らかにされることは、此の「民族的」といふ言葉の意義が自由主義的精神界では理解されない、部分的には又理解されようともしないといふ點である。

フランス革命の際の精神界には旣に民族の概念、國民の概念があつたことは疑ひない。此の時代の精神界そのものが斯樣なものを創始したのであつた。けれどもこれらの概念もやはり當時の個人主義的思惟の影響を受けて、自由主義的な平等、自由主義的な自由の如き政治的理念に支配されてゐたのである。從つて民族とは自由平等な個人が、政治的國法的形式に移されたものゝ總和なのである。此の民族概念の考へてゐる「集合主義的」なる

ものは、たかゞ歴史的文化的な側面の强調であつた。卽ち民族は歴史的な運命的協同體又は文化國民であると見たのである。けれども、いづれの民族にせよ苟くも人間たる以上は、自然の協同體によつて始めて獨特の特質を與へられる事實や、又共通の歴史的文化的體驗が加はつて形成を試みるのは二次的に過ぎないと云ふ事實等は、此の自由主義的な思惟にあつては全く忘られてゐたのである。從つて國民社會主義は再び「血統と土地」とを決定的な民族基本價値と認め、これに民族建設、國家建設の發足點を求めてゐるのである。此處に今日の人種立法の政治的な意義があり、わけてもニュルンベルク法の國政的意義が潛んでゐるのである。

國民社會主義の此の新しい有機的民族概念から、新しい憲法概念が必然的に生れて來る。ナチス國家の憲法は國民會議――合理主義的な思惟から出發して、まとまつた政治的國法的形式を與へ得ると信ずる國民會議――などが作りあげたものでは、最早ないのである。ナチスの憲法建設は、指導者の意思に從つて、民族體の要望から有機的に成長を遂げ

るものなのである。

ニュルンベルク憲法のうちでも特に民族的な色彩を帶びてゐるのは、血統保護法とドイツ國公民法の兩法である。その本質的な内容を爲して居るのは、公民たる民族的人格を政治的に色上げすることである。

フランス革命の理念界もやはり公民といふ概念を創始して、これに公民權（droits politiques）を附與した。けれども、此の政治的自由主義に於ける公民とは何人であつたかといふならば、一定の年齢に達した國民で、刑事上精神上完全な缺格者でない者はすべて公民であつたのである。

ナチス國家に於ては、公民といふ概念には全く異つた意義と、異つた意味とが與へられて居る。近頃ドイツ國公民は卽ちドイツ國であると説いたものがあるが（註八）、これは誤りであつて、公民の總體が「民族に政治的な形體と形式とを與へたもの」であることは、シュトゥッカルトが論破した通りである（註九）。同じ意味に於いて私は公民權の内容を解

釋して、「公民の總體が總統の政治的從者である」としたのである(註一〇)。

民族的國家に於いては公民の地位がこのやうに從前と比べて徹底的に異るのであるが、此の相違は公民法によつて公民たる身分の取得に結び附けられてゐる前提條件に特に示されてゐるのである。何となれば同法によれば公民は必ず、(一)血統上のドイツ人又はこれと同種の者、(二)ドイツの國籍を有する者、(三)民族的人格を有する者でなければならない。民族的人格を有する者とは、同法の表現に依ると「忠誠ヲ以テ獨逸民族及ビ國家ニ奉仕スル意思ト適性トヲ有スルコトヲ行爲ニヨリ證明スル」者であつて、必ずこれを證明せねばならないのである。

公民たる人格に加へられる此の三つの要求のうちでは、第一の要求が最も根本的のものであり、國民社會主義に於ける民族觀の變化を最も明瞭に示して居るのである。私の論題は廣汎であつて、ドイツ血統といふ概念とか、その反對概念の外國血統——これはドイツの民族體では殆ど專らユダヤ人に代表されて居る(註一一)——とかを仔細に考察すること

は、斷念せざるを得ない。その代りに私はシュトゥッカルト書記官のニュルンベルク法義解の序文を推奬しておく者である。これは堂々の筆陣を張つて概念を明かにし、概念の基礎を明確に說いて居て、此の問題に關するナチスの文獻のうちでも、最も優秀なものゝ一つだと考へるのである（註一二）。

ところで人種とは政治上の概念ではなくして、自然科學上の概念であることを此處に指摘することが大切だと私は思ふのである。けれども人種といふ概念は、個人の民族的人格存立の生物學的前提條件、從つて又民族的人格全體の存立、民族の存立の前提條件を示す故、このために政治的な意義を持つやうになるのである。素より今日のヨーロッパ諸民族は種々の人種的構成分子を擁して居り、ドイツ民族とても其の例に洩れず、ドイツ民族はあつてもドイツ人種なるものはないのである。けれども國民社會主義の見解に依ると、民族の血統的構成が不斷絕の場合、卽ち此の意味に於いて血統が等しい場合に限つて、民族は政治的統一體として存立し發展することができるのである。ところが外國の血統卽ち異

種の血統が民族體に入つて來て外國化が起り、殊に此の血統上の外國化が國民中でも政治的の指導權を要求する層に現れて來るならば、血統の同一性は必然的に失はれて了ふのである。であるから一國の政治的指導、行政的指導に携はるすべての人々に對して、血統の純潔を高度に要求することは格別重要な任務なのである。指導の三手段の所屬員は血統の純潔を要求され、公民法附屬命令第一號の第六條は此の要求を强化して居るが、これは上記の事實から說明されることなのである。ナチス黨及び黨組織の構成員はイの一番にこれを要求されるのである。蓋し黨こそは政治的指導の手段であり、從つて一九三三年十二月一日の法律に從へば「ドイツ國家思想の擔當者」であるからである。けれども官吏階級、國防軍、進んでは更に公的な任務を果す職業に從ふ者——例へば醫師、辯護士、新聞雜誌の主筆等——など廣汎な要求を加へてゐる四十一種の法令も（註一三）、やはり依然として效力を保つてゐるのである。といふのは、指導の諸手段を民族的國家の要求に應じた不斷の良いコンデシヨンにおくことは、此の方法によつてのみ可能だからである。此のためいろ

いろと苛烈な結果が生れるのであるが、いまは全憲法を作り上げるほんの初期の過渡期に當る時であるから、ぜひともこれを辛抱して貰はねばならない。

さてドイツ國籍を有する者のみが公民たり得るといふ第二の前提であるが、これとても矢張り重要なものである。此の際問題となることは、國籍を公民權と對比させ、これと聯關して用ひられるのかどうかといふことである。けれども、此の問題の政治的、國法的な側面を規定する公民法が――他方これと緊密な聯關のある血統保護法は、ドイツ血統の者とユダヤ人との性的結合を禁止して、生物學的前提の保全に任じてゐるのである――その第一條に於いて國籍を論じ、ドイツ國民を法律的に定義してゐることは、決して偶然ではないのである。ドイツ國籍を有する者とは、ドイツ國といふ防護團體に所屬し、これに對して特に義務を負ふ者をいふ、と右の定義に申して居るが、これは卽ちドイツ國籍といふ概念をナチスの國家觀、法律觀に編入しようとするものなのである。何故かと申すならば、從來の自由主義的な見解に依れば、國籍とは國家に對する個人の個人主義的な法律上

の地位を意味するものであり、國家に所屬する個人には此の地位からして一定の權利と義務とが生ずるとされたからなのである。ところが公民法の見解によれば、國籍を有する者は構成員として政治上の統一體——卽ちドイツ國といふ防護團體——の中に編入され、そのことからして種々の義務を課せられるのであるが、尙又外政的內政的に國家の保護を保證され、此の事實から流露する法律上の地位を與へられるのである。國籍といふ概念は大きな外政的の意義を持つて居る故、それだけの理由からでも、ナチス立法によつて捨て去られる筈はないのである。國際法の規定を受ける國際的生活にあつては、國籍といふ概念又自國籍の者を、他國籍及び無國籍の人間に對し法律的に區別をつけること等は、極めて重要な役割を演ずるのである。國際法の理論も實際も、國籍の取得及び喪失に對し、各國につき一致する規定を設けようと再三再四努力して來たことは——勿論水泡に歸したのではあるが——周く人の知る通りである。これは殊に多國籍、無國籍等の可能性から生ずる無數の交叉や衝突を除くためなのである。であるから、シュトゥッカルトが正當に强調し

てゐる通り、「民族的生活秩序と民族秩序の建設、及び此の兩者に基く指導者國家の建設は、外國人及び無國籍者に對する外的區分としての國籍と、國民たる義務及び權利を行使する資格としての內政的公民權とを分離すること」（二五頁）を要求してゐるのである。外ならぬ此の問題になれば、政治的形成の課題を統一的に眺め、苟くも內政的形成と外政的形成とは必ず切離さねばならぬといふ必要が、再び現れて來るのである。ヨーロッパ諸國民の使命を一面的な內政的使命であると唱へ、「最近の大政治家の名は內政と結び附けられてゐる。アードルフ・ヒットラー然り、ムッソリーニ然り、レーニンもスターリンも又然り」（註一四）などと主張するのは、誤りであつて、これはかの禍なる「全體主義國家」觀に出るものである。政治上の現實はその反對を證明して居り、只今論じた問題も我が國の民族形成、國家形成の構造は等しく內政的、外政的に制約されてゐることを證明して居る。であるから國籍の概念も、國籍の取得と喪失の前提を法律的に規定して國籍者の範圍を局限することも、今日尙大きな意義を持つてゐるのである。國民社會主義の立法は、

國籍所有者の範圍を公民の範圍よりも意識的に廣くとつてあり、從來國籍を所有して居つたユダヤ人も、やはり依然としてドイツの國籍を有して居るのであるが、ドイツの公民とはなれないのである。

ドイツ公民法の第二條第一項は、從來の國籍法の規定を保存して居るが、これは何も同法が多くの點で時代遲れといふことがない故、國策の要求に適合させる必要はない、といふ意味ではない。このやうな適合は旣に實施されて居る。卽ち、今日のドイツ內務大臣は民族的、國策的見地に從つて統一的な歸化國策を行ひ得る地位にあるのである。又此の可能性を保證するために、一九三三年五月十五日の國籍法改正法はもはや歸化請求權を與へてゐないのである。けれども外國の國籍法などは遙かに國策の必要に順應して居る。例へば妻の地位といふ點にそれが見られるのであるが、此の點などは一九一三年のドイツ國籍法の場合（註一五）よりもずつと徹底してゐる。

最後に、公民法は公民權取得の第三前提として高度の民族的、國家的義務の履行を要求

して居るが、公民權の內政的意義は此の點に於いて特に明瞭に現れてゐるのである。今迄のところ、立法者が此の要求に解釋を試みたことはない。然し青少年に對しては勞働奉仕と兵役義務の履行とが、公民權取得の絕對的前提であることは、疑ふ餘地のないところであらう。公民權といふ觀念が何はさておき將來を指示してゐることは、正しく此の點に示されるのである。何故かと云ふならば、未來を荷ふ青少年が、總統に對する服從の精髓ともいふべき、渾然とまとまつた新公民權の基礎となるからである。國家民族の青少年たる彼等は、青少年組織に身をおいてゐる內に、早くも此の新しい精神を體得する。さうして彼等としては公民證書の取得——公民權の取得は證書の取得に結び附けられて居る——こそ、一生の中でも最も重要な文書を取得することなのである。ドイツ青年はこれによつて、政治的に完全な資格を具へた國民の一員として、總統の從者の列に入るのである。

今日の狀態は過渡の狀態である故、立法者が公民法附屬命令第一號の第一條で創始した公民權の概念が、傳統的な規定に結びついた一時的のものであつたことは是非もない。こ

れによればさしあたり公民の政治的權利を有すると認められるものは、ドイツ血統又はこれと同種の國民、及び一九三六年三月七日の國會議員選擧法により前記附屬令の規定が延長されたゝめ、三月二十九日に於いて國會議員選擧權を有してゐた第一及び第二親等のユダヤ系混血兒たるドイツ國民である。

國籍法に依れば公民のみが法律に應じた政治的權利を完全に所有するのであり、公民のみが政治上の事件に就いて投票權を行使することができ、公職に就くことができるのである。然し公民が指導の三手段の一員とならうとする時には、血統の純潔に對する既述の要求が適用される。此の要求は極めて廣汎なもので、今尙效力を失はないでゐる。

三

以上新しい民族概念と、我が民族に於ける人格の位置の大要を概觀したのであるが、然らば民族對國家、民族概念對國家概念の關係はどうかといふ問題が更に持ち上つて來る。

此の問題は又法律形成の、從つて又法治國の問題とも切り離すことができない。

此の觀點から出發して、ナチス世界像に於ける國家の概念的地位を確定しようと試みるならば、政治的の概念こそは常に政治的展開の流れの中にあり、この流れによつて形作られ、變化を受けて來た事實をば、何はおいても忘れてはならないのである。其故を以つて普遍妥當的な國家概念の問題を論ずることのできるのは、國家哲學であらうか。國家學はその時々の政治的現實を科學的に把握する――卽ち體系的にその法則を把握する――使命を持つが、その使命が限られてゐるといふ、此の理由のみにても右の問題を論ずることは出來得ないのである。國家とは政治的秩序といふ意味での狀態であると、あらゆる時代を通じて解されて來た。然し此の政治的秩序の內容と、此の秩序を支配する政治的價値とは常に變化を重ね、これと共に國家理念も變化を重ねたのである。何故かと言ふと、政治上の革新があれば新しい政治上の價値目錄が持ち出され、これによつて政治法律秩序の內容が、その本質上根本的な變更を受ける――これが實に政治上の革新の本質であるからであ

る。國家と法律とは過去に於いて常に存在してゐたものであり、史上に國家が存在する限りは、國家形成と法律形成相互の間に必然的な關係が存在するのである。此の意味に於いて、國家と法律とが極めて特定な相互關係に置かれてゐる法治國の實現は、國家學上、法律學上一つの永久的な問題なのである。

國家と法律及び兩者の相互關係は、時代の政治主潮が異るのに應じて內容を變じ、過去に於ける國家概念と法律概念は、常に內容を異にして居つた。從つて、或るまとまつた精神的、政治的特色を帶びた政治上の時代は、必ず新しい國家概念と法律概念とを生むのである。例へば中世の階級國家、專制國家、自由主義國家、それらの過渡現象や、結合現象はみなその通りである。然し乍ら、このやうな國家概念と法律概念とを、空々漠々とした空間に打ち建てゝみても、その概念は絕對に新しくなるものではない。新しい政治上の價値が、果してどの程度迄國家及び法律といふ秩序概念をば、新しい政治內容で充すかを忘れぬ場合に限つて、それは新しくなるのである。國家理論家、法律理論家の使命は此處に

ひそむものと私は思ふ。例へば專制國家と自由主義國家とが、國民社會主義の法治國とは政治內容を異にしてゐたといふ事實は、判りきつたことであり、理論家はこんなことをくどくど縷說する必要はない。寧ろ、兩者の相違は那邊にあるか、その相違から如何なる政治的法律的結論を抽き出さねばならぬか、これをできるだけ明確に確定せねばならない。此の場合、國家形成や法律形成と必然的に關聯する概念を叩き殺して了ふことは、思惟が非歷史的であることを證明するばかりでなくして、思惟が非政治的であることを證明するのである。蓋しそれは國家、或は法律、法治國などゝいふ如き概念が必然的にもつ外政的意義を看却してゐるからである。ナチス政治學の課題は、新しい國家形成と法律形成の政治內容を、極めて鋭く、極めて明晰に闡明することであると私は愚考するものである。然しこれらの問題を民族間的に、卽ち國際的に討究するための概念を放擲することなどは、その課題ではないと考へる。殊にその代りになる如き、一層優れた明白なる概念を示し得ぬ時に於ては以ての外である。殊に政治的現實や實踐と矛盾に陷つてはならない。實踐の

方面は法人であるとか、公法上の法律的保護などと云ふ概念を手がけてゆかねばならないのである。さもなくばドイツの民族の形成、國家の形成は國家生活、法律生活の外に阻却されて了ふのである（註一六）。

今日國家を一義的に概念規定することがどうして困難かと言ふならば、政治上精神史上つい先頃迄二重の國家概念を取扱つてゐたからである。國家とはあらゆる時代を通じて政治的統一體の形成を意味する。それがギリシヤの都市國家であらうと、ルネツサンス時代の專制的君主國家であらうと、現代の强國、平面的國家であらうと、全く異るところはないのである。此の國家概念を今日有意義に適用して惡からう筈はない。此の際その普遍的な概念規定が、時代を異にするに應じて、國家の決定的な政治實體のために、特種の相貌を帶びるのである。ギリシヤの都市國家（Polis）であるとか、專制主義の君主國家であるとか、ドイツの民族國家であるとかいふやうなる名稱が、此のことを極めて明瞭に表現してゐるのである。故に此の意味に於けるナチスの民族國家は、ドイツ民族の政治的生活形

式なのである。

自由主義的な個人主義は、自由主義的な意味で自由な個人を國家と對立させ、殊に有機的な政治上の民族概念を持ちあはさなかつたのであり、その論じる國家概念も又異るものであつた。個人主義は、國家とは權力の機關、秩序の機關にすぎないと見てゐた。個人に對してできる丈け自由の天地を保證するところが卽ち秩序の機關であり、勢力範圍を帝國主義的に擴大することによつて、就中個人の經濟的權力慾に應へるところが卽ち權力の機關なのである。卽ち、此の秩序機關、權力機關的國家觀は、自由主義的思惟の必然の流露であり、我々の國家觀にはもはや利用できないのである。實に此の自由主義的な國家觀から、國家の過重評價が起つたのである。蓋し無拘束な自由な個人——斯くの如きものは政治上の現實には存在しないのであるが——然し、苦しまぎれや、自己の權力慾を滿足させるために、再三再四國家に縋り附いたからなのである。當時最大の政治思想家ヘーゲルは、民族を無視した此の權力國家思想を古典的に表現して居るが、この思想に就いてはローゼン

ベルクの「二十世紀の神話」が根本的な詳論を試みて居る（註一七）。このことを敢て只今指摘致す所以である。であるから國家といふ言葉を國家機關といふ意味に局限することは、ナチスの國家觀には相應しくないと私は考へるのである。又、例へば國防軍の如き指導の手段をば、「國家機關の部分」と唱へることも正しくないと私は信ずるのである。これに對してナチスの立法者は、國防軍とは「ドイツ民族のための武装者であり、武士的敎育を施す學校」であると見てゐる。

今日の國家理論家の中には、今日の國家は機關にすぎないなどゝ唱へ、從つて勿論國家概念を現代には價値のない無用の長物と化してゐる者もある。その内面的な動機が何であるかを探つてみるならば、これらの人々はこのやうな立場を發足點としてのみ、黨と國家との關係を概念的に闡明できると信じてゐることが、明瞭である樣に思はれる。勿論、黨と國家との關係を闡明し形成する第一の前提は、互ひの關係を規定せんとする黨と國家との本質に就いて、明晰確實な觀念を持つことでこれは成程正しいのである。

此の點に就いて理論上に於いても頗る重大なのは、今日の政治問題、憲法問題は黨――國家の關係にひそんでゐることを認める點である。私見に依るならば、右の事實から生じて來る結果は、カール・シュミットの「國家、ナチス運動、民族」といふ氣の利いた三分類說(註一九)は、此の問題を說明するための氣のつちりしたる基礎をば提供できない、といふことである。私は此處で、今更自說の反覆を試みたくはない。それは、私が若干の著作に於いて、このやうな見解や、殊に「民族とは政治的決戰の蔭に掩護されて生長を遂げる非政治的な側面」だとする見解に對しては、反對の立場を表明して來てゐるからである(註二〇)。黨と國家とが、決定的な政治上の實體である民族からのみ、政治的意義を取得するならば、國家とナチス運動と民族とは、同一の順位に列べることができるのであつて、かくの如き順番を附けることは、非常によくないのである(註二一)。その樣なことをなすに於ては、民族國家の本質に對して、正鵠を失すると愚考するのである。從つて、カール・シュミットが、民族の自治に委ねられた分野を許して、「職業階級的經濟秩序及び社

會秩序並びに（地方的相隣關係に基く）市町村的自治を抱括するゐ」と說いてゐるのは、政治的形成にも適合せず、國法上、行政法上の形成にも適合して居ない。憲法及び行政法の構成に一瞥を投ずるならば、その正しくないことが判明し、これらの分野に於いては黨と國家といふ二つの組織力の合作が、顯著に現れてゐることが判るのである。私はドイツ市町村令の國民社會主義勞働黨委員のこと〻、ドイツ經濟相がドイツ勞働戰線の長官と協定した申し合せのことだけを指摘して、注意を促すにとゞめておく。新しいドイツ社會秩序の基礎は、此の申し合せにより完成をみたのである（註二二）。有機體としての民族は、今日の政治的價値體系に於ける決定的な政治要素ではあるが、それは黨や國家のやうな組織の要素ではないのである。

此處において次の問題が更に起つて來る。卽ち第三帝國といふ具體的な現實の姿を現はしてゐる、ドイツ民族の政治的生活形式を國政だとみる見解をも、黨と國家との關係の規定に利用できるか？　といふ問である。ドイツ國大臣ドクター・フリックは、「第三帝國

の新建設」といふ講演中、此の問に對し次の如き解答を與へて居る。「黨を國家に編入してから後は、國家は單なる官廳組織以上のものになつて居る。といふより、ナチス運動の全部が、これ又國家の一部なのである」。これは卽ち國家を單なる官廳的權力機關と見る如き、自由主義的國家觀は抛棄せられねばならぬ、といふ意味である。一九三三年十二月一日の法律には「黨及び國家の統一保全法」といふ異色ある名稱を附してあるが、これは實にドイツ民族の政治的生活形式である國家の形成が、黨によつて憲法的な表現をも與へられてゐる、といふ意味なのである。であるから公法團體としての國民社會主義勞働黨をめぐる論爭は、槪念法學の產物であると私は思ふのである。何故と言ふならば、此の槪念規定は、法律生活の上だけでナチス運動――自由主義の時代には、ナチス運動は私人の結社といふ法律形式をとらねばならなかつた――の政治的本質を考慮したものにすぎないからである。ナチスの立法は一九三三年十二月一日の法律の第一條第二項に於いて、堂々たる公法上の團體といふ法律名稱を用ひたのである。

政治運動としての黨は總統の政治的手段である。總統は既にワイマル體制崩壞の時代に、此の政治手段を用ひて、ドイツ民族の新しき生活形式であるドイツ國家を、建設したのである。總統は、黨自由大會の席上での結びの演說中、此の見解を、次のやうに表現して居る。「黨は政治的見解と、政治的良心と、政治的意思とを代表する」と。此の無二の政治的指導手段といふ使命を遂行するためには、黨は是非其の組織の要素でなければならぬ。總統の定義のやうに黨は「その組織上、指導者を選拔し、訓練し、匡正して、指導の安定を來す前提を創らねばならぬ。すべてのドイツ人は世界觀教育を施されて國民社會主義者とされ、最も優秀な國民社會主義者がナチス黨員となり、最も優秀な黨員が國家の指導に任ずるのである。黨は又此の原則をも代表せねばならない」のである。此處にいふ指導とは、權力機關、秩序機關たる國家の指導ではない。ナチスの世界觀によつて、民族に結ばれた指導といふ深義にのみ卽應しつゝ、ドイツ民族の政治的生活形式たる國家を形成し、これを維持しようといふのである。であるから總統は絕對に黨から切り離すことができ

きず、總統もナチス運動も絶對に民族から切り離されない。

君主制時代のドイツの國家は、當時の國家の本質から發した、二つの國家的指導手段を發達させて居た。その二つながらナチスの國家組織にとり入れられ、それ〴〵の任務を負うて、國家擔當の一役を買つて居るのである、ドイツの本職官吏制度と、ドイツ國防軍とが卽ちこれである。專制主義の君主國家時代にあつては、兩者共に、君主の一身に拘束されたものであつた。無理解な民主々義のイデオロギーは、當時の本職官吏は君主の廷臣であり、國軍は元首の個人的な權力の具である。などゝいふ不當な非難を唱へて居る。ドイツの本職官吏、就中士官階級が、當時の國家觀に支配され支持されてゐたことは自明である。けれども其の當時と雖も、勿論今日の國家觀とは別物であるが、兎角國家觀を持ち合せてゐた。ところが破壞的なワイマルの政黨國家の大特徵は、もはや獨自の國家觀の持ち合せが全然なく、そのために缺點のないドイツ本職官吏の精神や心構へを進んで解體させたことであつた。之に對して國防軍は、大統領の指揮下にあつた故、それのみにても既に

此の危機を打開して、本職官吏よりも遙かに著しくその面目を保つことができたのである(註二三)。

此の二つの國家的指導手段の積極的評價が、ナチスの政權掌握直後何處に現れたかといふならば、本職官吏制度再建法ができて、本職官吏制度の人種上政治上面白からぬ要素を一掃し、此の制度を、民族と結ばれた指導手段として、ナチス國家に編入したのである。總統は、ドイツ國防軍のためにも、これと同じ民族との結合性を創始され、ドイツ民族のための武裝者といふ使命を授けたのである。此の民族との結びつきから個人個人の忠誠義務が、そのまゝ無雜作に生じて來る。此の義務によつて兩指導手段の所屬員は總統に結び附けられるのである。

以上により、今日の政治機構、憲法機構に於ける國と國家との關係の問題は、明瞭なものであると私は考へるのであるが、實際上の形成問題としては、組織としての黨と國家行政及び國防軍といふ他の組織に對する黨の任務管掌との關係は、一々の規整を必要とす

る。第三帝國の積極的憲法構成及び行政的構成上の、最も重要な基本問題が此處にひそむことは、疑ひを容れない所である。

此の間明晰且つ的確に規定できるのはまづ黨組織と國防軍との關係である。國防法の第二條に依れば、國防軍とは「ドイツ民族のための武裝者であり、武士的教育を施す學校」である。此の武人たる使命の領域は、明晰的確に規定できるのである。このことから、黨――國防軍といふ關係に於いては、双方の權限の限定とか遵守とかいふ問題は存在しない、といふ結果が出て來る。ところが又他面、黨と國防軍とは、武人的といふ根本的な心構へに於いて、極めて、强力な接觸點を持つてゐるのである。それ故に、黨と國防軍とは、ドイツの民族國家の兩大黑柱であると唱へられて來た。此の名稱は兩者の政治機能、行政機能に於ける共通的な性格に照して、これを是認できるのである。兩者に共通なるものはその政治的使命の動力性である。而して黨は內政的指導手段であり、黨とひとしく民族の支持を受けてゐる國防軍は、民族協同體の生存を擁護する最後の外政的手段なのであ

る。このやうに黨と國防軍とは、既に本質上からいつても極めて緊密に結合されてゐるのである。その任務の範圍が分離されて居る故、兩者がからみ合ひ、又人的融合が起る必要は全くないのである。

黨行政と國家行政との關係の問題になると、いさゝか趣を異にして居る。そもそも黨――國家といふ問題が、第三帝國に於ける國家的行政の統一的實施に對して具體的な影響を及ぼし、頓に尖銳化してゐるのである。

統治と行政とを區分する問題は、自由主義的な國家學や行政學にも、既に再三再四現はた問題である。いまはたゞ、從來の如き統治と行政との區分は、それが協同體とは緣のない自由主義態勢から由來する限り、民族的國家に於いてはその意義を喪失して了つたことを、確認するに止めておく。今日では、政治的指導と國家の行政は、政治的形態としての民族に共通の基礎を持つ、といふ點から出發せねばならぬ。孤立した指導などゝいふものは存在せず、總統は被指導者とのみ合せ考へ、不斷に被指導者との結合を保つてゐねばな

らぬと同様、生活、或は民族と云ふことより離れた行政活動も存在することはできない。私見に依るならば、政治の本質は協同體に依つて定向されてのみ闡明せられるものである故、政治上の指導も國家の行政も、政治生活上統一體を形作り、相融合するのである。此の場合指導とは最高の政治上の目的設定と形成とを意味する。これに對して行政の本質は一般的な政治上の目的設定を基礎とし、且つその範圍内で、特定の行政目的を企畫しこれを遂行する點にひそむのである。

ところで指導と行政との區分は、同時に又極めて密接な結合でもあり、これが黨行政と國家行政とをも支配してゐるのである。政治上の指導手段たる黨は、常にその政治的課題の動力性を忘れてはならぬ。即ち黨行政は政治上の課題を直接的に遂行するのであるが、これに對して國家行政の課題は、世上誤つて信じられてゐた純技術的性質のものではなくして、どちらかといへば靜的な性質を帶びて居るのである。國家の行政官吏の使命は、政治上の形成に直接協力することではなく、ナチスの立法によつて形作られた民族體の秩序

を維持し、これを保全することとなのである。

此の靜的な特性から、國家の行政は必然的に官僚的な特色を帶びるといふ結果が出て來る。卽ち行政の處理は概ね極めて一定した形式に從つて經過せざるを得ない。斯くの如き官僚臭は現代の國家に於いては必然的であるといふことが判明して居るのである。それは通例の行政活動にあつては一定の形式を踏むことが、行政處置の均一を保證し、從つて必須な法律の安全感を國民に保證するからである。けれどもあらゆる官僚政治に再三再四發生する危險は、形式や常套語が自己的と化し、そのために行政形成の本來の意義が忘却されることである。であるから、民力の獨創的な進展に興亡安危を賭けた民族國家にあつては、官僚政治が唯我獨尊をきめることは許されない。能動的な政治力を揮ひ、屢次反覆、國民の中に潑剌とせる向上心を絕やさぬようにせねばならないのである。民族の本質に相應はしい政治的課題としての民族協同の直接的實現は、官僚政治によつて支持され得ても、それのみによつて完遂されることは絕對にない。こゝに政治的指導手段たる黨に課

せられた使命があるのである。

總統はニュルンベルクでの結びの演說中、「黨と國家の任務範圍の明確な決定」を次のやうに解釋した。

「國家の任務は、法律の埒内に於ける、法律に依る國家組織管理の續行である。この管理は歷史的に生成發達し來つたものである。黨の任務は、(一)ナチス敎義の安定細胞——この細胞は永遠に維特され繼續される——製造のために、黨の內部組織を建設すること、(二)此の理念の趣旨に添うて、全民族を敎育すること、(三)敎育を受けた者を國家に交附して、指導者とし、及び被指導者とすること、これである。因みに國家、黨双方の權限を尊重し嚴守する原則も行はれるのである」。

總統は右の如く敎育を受けた者を國家に交附して、指導の地位、服從の地位に着けると述べて居るが、これを見ても總統が此處で云ふ國家とは、政治的生活形式としての國家であり、單なる國家機關でないことは明かであると私は思ふ。國家機關は官廳とこそ意のまゝ

に得られるが、被指導者を意のまゝには得られないのである。總統は此の演說中で更に、最も優秀な黨員が、國家の指導を双肩に負ふべきであると言つて居るが、これをみても上述のことは明かである。

政治的指導と、國家行政の遂行とは、必ず統一的のものである。從つて總統の意思に從へば黨と國家、從つて又黨行政と國家行政との關係の特色は、相反的ではなく、黨と國家との有機的結合である。此の結合によつて我民族の政治的生活形式の永續性と堅實性とが確立せられるのである。

この故に、黨行政と國家行政との結合は、殊に、國家行政の分野に於いて、總統が、闡明した「双方の權限を尊重し嚴守する」原則をば、斷乎として確立しつゝ、大に展開を見せて來た。これは凝つてはナチスの立法ともなつて居る。參考のために、實例を擧げるならば、議會に於いて、總統を代表する無任所大臣の地位がそれである。無任所大臣は總統の命を受けて、黨――國家の關係に觸れる限りの、あらゆる立法の起草に關與し、官

吏の任命に與るのである。今日の分野に於いては、指令權が總統の代理者と、權限ある主務大臣（例へば内務大臣又は司法大臣）とによつて、ひろく共通的に行使されてゐることを、私は指摘しておく。行政機構そのものに於いては、行政上最高の地位に關し、此の結合が黨の公職と國家官職との人的融合によつて、ひろく確立されてゐることは周知の通りである。例へば大管區指導官は同時に國家官職、行政官職の最高地位を占めてゐるのである。これと關聯して私が最後に指摘しておくのは、ドイツ市町村條例による國民社會主義勞働黨委員の地位である。國民社會主義勞働黨委員は市町村の機關ではなく、自治任務を直接に擔當するものではない。委員はドイツ市町村條例第六條によつて、「市町村行政ト黨トノ調和ヲ確保スルタメ一定ノ案件ニツキ協力ス」るのである。卽ち委員は市町村條例の細則に從つて、市町村機關の召集に對し重大な勢力を揮ひ、市町村行政實施の目的設定に決定的な關與をすることによつて、ナチス的自治行政の精神を確保するのである。

政治的指導と國家行政の實施は此のやうに統一され、その職責の範圍内で指導手段によつて實行されるのであるが、そのため此の分野での直接的な法律形成に如何なる結果が生ずるかといふならば、指導手段を結合する組織的、法的要素が今日では、もはや官吏の概念ではなく、公職擔當者といふ概念になることである。何故ならば、國家指導、國家行政、國防軍といふ從來の一般的手段と黨とは異るのであり、黨は、國家權力から由來するものではなく、民族の政治的生活形式としての國家内部で、獨立の政治的指導要素を爲してゐるからである。故に、黨職を占める者も、國家の官職や、國防軍の職を占める者とひとしく、公の職を司るのである。此のやうに三指導手段の内部で公職を擔當することが、第三帝國に於ける統一的國家行政施行の法律的表現なのである。何となれば、これらの公職は國家の、卽ち直接的協同體の圈内にあるものであり、これらの職を行ふことは悉く服務の義務となるからである。從つて、總統の政治的服從者の一員たる公民のみが、公職を擔當することができるのである。このやうな公職の擔當者は、職務の遂行につき、民族に

結ばれた指導者に對しひとしく責任を負ひ、職責の毀損に對しては服務紀律による懲罰を課せられるのである。

四

最後に私はドイツの民族及び國家形成の最重要問題として、人格そのもの及び人格圏の意義を示す問題に輕く觸れたいと思ふのである。人格とか人格圏などゝいふものは最早存在しない、さういふものは悉く協同體では解消された、といふ說は從來も唱へられたところである。人格から獨立した、人格と無關係な協同體の存在を信ずるなどと云ふことは甚だロマンチックであるといふことを、私は「憲法」といふ小著の中で詳論しておいた。それは、あらゆる協同體價値は人格によつて初めて政治的現實となる事實を、此の信念は否認してゐるからである。（拙著、二三頁）

宗教と、尙又科學をも民族的國家に正しく織込むための必須な出發點は、此處にあると

私は思ふ。と申すのは宗教も科學も、人格價値としてのみ考へられ、人格價値としてのみ效果が多いからである。であるから兩者共に命令されたり、官の力で統制されたりすることはあり得ないのである。

最近親衞隊の機關紙に載つた一論文(註二四)は、宗教問題に對する態度を明白にし、宗教は私事であるといふドイツ人の世界像の原則を闡明して居る。これは、宗教と科學とは個人の人格圏に所屬し、其處から出發してこれを形成する場合に限つて效果が多いといふ、たゞ今私が代辯した見解と照應するものである。此の見解は宗教圈のために、一九三三年十月十日の總統代理の指令中に、明瞭に表現されて居て、個人の信仰は、全く私の問題であり、自己の良心に對してのみその責任を負ふべきである、といふのである。私は純粹の形式上のことではあるが、宗教は私事であるといふ此の定義は繼承したくない。何故かと云ふならば、此の定義は周知の如く、自由主義的、マルクス主義的理念界から、從つて又無拘束な政治的理念界から由來するものであるからである。此の見解との相違點は何處

にあるかと云ふならば、民族的人格は宗教的、科學的價値を自ら作り出す際にその民族性に結ばれ、國民性に結ばれ、國民性から全く離れることができないといふ點である。であるから政治圈と宗教圈とは本質的に相違するにも拘らず、兩者は民族性に於いて相合するのである。民族性は民族的人格に負はれる故、宗教的、文化的、科學的價値の眞の擔當者なのである（註二五）。從つて、宗教上、科學上の問題をめぐる精神的苦闘は、我々の民族生活や國家生活の政治的統一を危くし得ない形式をとつて、演ぜられねばならぬことは勿論である。此の限りに於いて、政治的民族的生活形式の形成者である國家指導は、必要な場合にはこれらの分野にも統制的な干渉を試みる權利を要求しなければならない。但しこれは此の限りに於いてのみの話である。

ともかく此の事からして、次のやうな動かすことのできぬ結論が更に生じて來る。卽ち黨の官製宗教、黨の官製科學などといふものはあり得ない、宗教の形成も科學の形成も、若しこれを黨の威力で「組織」しようとするならば、民族生活のために貴重な創造力を必

然的に喪失する、といふ結論である。これは昔國家の官製宗教や、半官的科學が、常に影響力を持たないことが證明されたのと全く同じである。

ナチスの史學者ヴァルター・フランクは「宮廷說教師アードルフ・シュテッカー」といふ貴重な論文中（註二六）、此の確信を表現して次のやうに說いて居る。「黨の官製に係る科學とか藝術などが存在し得るなどと、筆者は夢にも信じたことがない」と。彼は更に進んで、彼の論文は國民社會主義勞働黨とは無關係に、自己の良心の內面的な命令に對してのみ責任を感ずる科學者の、自由な決心から生れたのであると詳說してゐるのである。此の人物は美しくも「戰ふ科學」といふ新語を造つたのであるが、彼の所說が、何等かの誤解を招くことはまづ〳〵あるまい。ところで、史學について妥當することが、國家學、法學に關しても妥當するのは自明の理である。政治學全般、更に進んでは、そも〳〵ドイツの科學は、その民族性に結ばれてのみ、學的硏究を形成して常にゆたかな效果をあげることが出來るであらう。今日の緊急事は、鬪爭的な人間としてナチスの世界像を現實に移

す政治的なタイプを創造することであるが、これは科學に對しても妥當するのである。眞の自由は常に一つのタイプを借りてのみ可能であるといふ、アルフレッド・ローゼンベルクの言葉（註二七）は、科學に對しても妥當する。けれども此のタイプや、タイプを形成することが、組織活動、乃至は官製活動の結果であると云ふが如きは、絕對にあり得ない。此のタイプは民族的人格、その人格的業績といふ淵源からのみ生じ得るのである。これが科學の分野に於ける業績の原理の意義であると私は思ふのである。我がドイツの科學は、他民族の科學力と角逐する場合にも、ぜひとも眞價を發揮せねばならないが、上述の如き意味合で何らかの業績を果し、何らかの能力を示した時にのみ、科學は自己を主張することが出來るであらう。此のやうな場合に限つて、我々は我が民族と、民族の政治的形成に奉仕することができ、我々の政治的建設の實現に協力することができるのである。此の建設の目標は、常に必ず次のやうなものでなければならないのである。

一民族、一國家、一總統！

註

（一）拙著「憲法の危機に際しての民族と國家」一一頁。

（二）「イエーナ學生團體」誌、第三號――一九三二年七月一日發行――中の「大學と國民運動。」

（三）これに就いては拙著ドイツ行政法一一頁以下參照、公法上の權利の問題に就いては「ドイツ法學」誌、第一册參照。

（四）ドイツ行政時報一九三五年版一一七頁以下。

（五）ドイツ行政時報一九三五年版九三八頁以下。尙拙著「ドイツ行政法」一一四頁及び一三〇頁參照。

（五のイ）ズルビクの挨拶は「ダス・インネレ・ライヒ」誌一九三六年六月號二五七頁以下に揭載

（六）公法論集二六卷一二七頁。

（七）全體主義國家といふ概念及びその危險に就いてはアルフレット・ローゼンベルク著「全體主義國家なりや！」（「理念の形成」一九三六年中の二〇頁以下）を參照。此の問題の國法上、行政法上の意義に就いては拙著「憲法の危機に際しての民族と國家」二五頁參照。尙「ドイツ憲法」第二版六五頁、「ドイツ行政法」四一頁參照。

（八）ラインハルト・ヘーン、「國民と公民」。ドイツ法一九三六年版二三頁。

（九）シユトウツカルト、ドイツ人種立法義解序、第一卷二三頁一〇頁。

（一〇）拙著ドイツ憲法、一九三六年第二版、八四頁。

（一一）すべての民族の人種的立法の形態を定めるものはその民族體の政治的條件である。例へばアメリカの人種立法がドイツのそれとは異つた傾向を持つてゐることは、此の點から說明されるのである。「合衆國に於ける人種法」に就いては筆者の門弟に當るハインリッヒ・クリューガーの同名の著書を參照のこと。此の書は近時公刊されたものでなか〳〵示唆に富んでゐる。

（一二）尙拙稿ドイツの公民參照のこと。（「國家と國土」誌、一九三六年　五—六號揭載）

（一三）シュトウッカルト＝グロープケ著、ドイツ人種立法義解第一卷二六〇頁以下に一々列擧してある。——公法論集二七卷二三七頁以降揭載の拙稿（右の義解の論評）を參照せよ。

（一四）フォルストホフ著、全體主義國家（一九三三）一八頁。

（一五）拙著行政法七八頁以下參照。

（一六）ネーセ「法人概念をめぐる論爭」參照。一九三六年五月十九日ドイツ行政時報、三九三頁以下。

（一七）尙このことに就いては拙著「國民社會主義の世界觀に於ける民族と國家」（一九三五）參照。

（一八）例へば、ヘーン「黨と國家」ドイツ法、一九三五年版、四七七頁。彼は今日の憲法理論に於ける國家機關說の主唱者の一人である。尙拙稿參照（公法論集、二七卷、二三八頁。）

（一九）カール・シュミット著「國家、ナチス運動、民族」一九三三年刊行。

（二〇）拙著「ドイツ憲法」一九三六年第二版、六五頁註二。及び同所に引用の文獻參照。

（二一） ネーセ著「黨と國家」一九三六年、二〇頁以降もおよそ類似の見解を洩らしてゐる。著者はその外にも此の問題全般に對し貴重な説を提出してゐる。

（二二） 拙著「ドイツ憲法」一八九頁、及び「ドイツ行政法」第一四節參照。

（二三） 拙著「憲法」第三三、三四節參照。

（二四） 「ドイツ人の信仰の現狀。」一九三六年四月二十三日「黒衣の部隊」紙に掲載。

（二五） 拙著、「ドイツの民族國家に於ける民族及び國家生活の基本問題」、（一九三五年）參照。特に一一一頁以下。尙憲法四一條參照。

（二六） ヴアルター・フランク「宮廷説敎師、アードルフ・シユテツカー」校訂第二版（一九三五）一〇頁。

（二七） アルフレツト・ローゼンベルク、「自由と科學」（「形成と理念」所載）二一一頁。

ドイツ政治大學
研究部長　アルフレッド・クレムト

民族と國家

――玆にある講演は一九三六年七月十八日ドイツ政治大學に於ける外國人の爲の休暇期講習に於て行はれたものである――

民族と國家とに就て諸君に話すに當つて、私は先づ最初に、私の取扱ふテーマがその一環をなしてゐる全連鎖を述べなければならぬ。この全連鎖は、その包括的名稱を國家學若くは――もしもその際原則的なものに重きを置くとすれば――民族社會主義の國家哲學と呼ぶところの、かの思想の總體に外ならない。この名稱は今や、實際廣い範圍にわたつてゐるものであるから、私が今日諸君の前で、考究し得るのは、これに屬してゐる澤山の題材中の一小斷片にしか過ぎない。

扨先づ最初に國民社會主義の國家思想の特徴を標語風に云ひ表はそうとするならば、直ちに三つの要點に行き當る。それによつて各人は相對的に自主的な問題の範圍を云ひ表は

すのである。卽ち國民社會主義の國家は第一に民族的卽種族的國家であり、第二に身分的編成を有する國家であり、第三に指導者若くは權威的國家である。民族的種族國家、身分的編成の國家、政治的指導者國家——これが卽ち國民社會主義の國家觀を標語風に特色づけてゐる三つの名稱である。けれどもこの際次のことを確定するのは決定的に重要である。卽ち、國民社會主義的國家觀の特質を完全に描寫する爲には、三つの特徵の一つ〳〵がそれだけで孤立してゐるのでは不充分であつて、三つの見地の全部を綜合することによつて初めて我々の國家思想の全貌を表現することができるのである。民族的國家から離れ、身分的國家から離れ、指導者國家から離れて語らんとすれば、この全貌はそもそもの初めから誤解されるか又は不充分にしか把握されないのである。勿論三つの總ては我々が常にそれを「有機的」原理と云ひ表はしてゐるまさしくそのものの適用であつて、それは三種類の形式の中に展開されて我々の全國家機構の基礎構造をなしてゐる。

この點をなほ一層强調するならば、「身分國家」を云々することは正しく誤であらう。

何故なれば、身分とは我々にとつて國家の眞の擔ひ手を意味するものでもなければ又特殊な政治的構造原理を物語るものでもない。然り、國民社會主義の政治的形式概念は、もしそれを身分と相互に關聯させようとするならば、根本的に誤解されるに相違ない。我々は身分相互の支配秩序なるものを斷乎として否認する。我々は身分的思想を反動的、復古的なものと解せずして、却つて時勢に適合せる又史上初めて實現せられたる形式（それに基いて總ての職分團は同權的に相並列して居り、その有機的全發展の中に於て創造的ドイツ民族の全體的勞働國家がつくり上げられる）その中に政治的支配秩序を直接包含してゐない。この様な形式の中に於て理解する。政治的秩序と權力の行使とは、本質的に新たなるものとして職分團機構に附加せられ、專ら國民社會主義ドイツ勞働者黨が之を擔當し、執行する。一切の職分團の完全な同權と云ふ原理の中には、然し新たなるドイツ社會主義の眞に革命的なるものが存在して居り、そのドイツ社會主義はこの原理の中に於てまことの國民社會主義たることが證明せられて居り、共通の大なる全體とのあらゆる連結によつて

古代ゲルマンの自由の感情が奥深く之を貫いてゐる。

自由――それは又國民社會主義の一つの標語であつて、ドイツ人たる我々は斷じてそれを斷念することはできないであらう。然し我々はかの古代ゲルマン的見解の意味に自由を理解するが、それによれば自由は我が民族のあつたまゝの姿（Dasein und Sosein）の束縛とはゞかる所なき献身を排斥するものでは無く、却つて本質的にそれらを包含するものである。かくして我々が神政＝中世的身分國家やその歴史的使丁、君主政的專制政治を徹底的に拒否するものであることはこれ以上說明を要せずして明かである。我々は又一七八九年のフランス革命によつて古き身分的思想は一掃されたものと考へる。私はこの樣な次第で、黨の基礎的綱領の最後から二番目の章を參照して、國民社會主義はイギリス、アメリカ若くはフランスの革命の後に退かんとするものではなく、新時代の精神と思想財とを根本的に身につけた新しい時代に進み入らんとするものであることを、明瞭に且つ解り易

く表現せねばならぬ。

それ故に我々はかくの如きものとしてデモクラシーの原理を承認する。アドルフ・ヒットラーは繰返し彼の演説の中で、ドイツも又一種のデモクラシー憲法を有つてゐることを確認して居り、そして幾度も最近には數日前ワイマルに於て第一回黨大會の十週年紀念日の折に、彼は政治的指導の民族に對する責任の原理を確認した。それ故にもしもドイツの國民社會主義によつて導入せられた政治的秩序を獨裁制若くは專制政治の名を以て呼ぶならば、それは全くの誤解である。我々はむしろそれが、君主制の形をとつて居らうと敎會政治の形であらうと若くは、過去に於てしばしばあつた樣に、兩者並び存して居らうとも、一切の老衰せる專制政治の斷乎たる敵對者である。我々は古い生氣を失つた、無理なそして不自然な生活形式をそれにふさはしいまどろみから呼び醒そうとするのではなく、唯自然的國家並に社會概念を新しい具體的、實體的な形式に發展せしめんとするものである。それらの形式は生活に直接ふれて居り又最大可能の範圍まで豐富な、個有の生活の合

法則性の要求をかなへんとするものである。

更に一言するならば、身分的思想は我が國家新機構の一基礎概念に過ぎないのであつて決して最後的に決定的のものではない。他方に於てもし政治的指導者國家についてのみ語るとすれば、それは又勿論不充分であらう。この場合には又もや身分的秩序一般の契機のみならず國家の眞の擔ひ手——既に百五十年以上も前に、傳統的ドイツ國家思想は、西歐的啓蒙主義に對して民族を言葉の有機的意味に於てかく呼んだ——その眞の擔ひ手が又把握されずに殘る。かくて民族的原理、身分的原理及び指導者原理は、自然的不同と生ける具體的な編成に向けられた、全く同一の思想の溢出せるものであるから、國民社會主義の國家思想をその全き姿に於て、その全體の充實の中に於てそしてその包括的形成力の中に於て認識せんとするものは、かの諸原理をそれら相互の關聯性に於て、然り、それら相互のほどき難い交織の中に於て完全な組織として把握せねばならぬ。

國民社會主義の國家並に社會思想の完全な組織を、かくの如きものとして、諸君の前に

展開せしめることは勿論私の任ではない。この講演の範圍内に於て私の自由に使ひ得る僅かの時間では、それは餘りに散慢なものに了るに相違ない。それ故に私は國民社會主義の國家思想の特色をあらはしてゐる三つの要點の中から、たゞ基本的重要性を有するもの及びドイツ國家並に社會思想を――それがかくの如きものとして發展形式の中に存する限り――古來より特徴づけてきたものを抜き出す道を擇んだ。それは卽ち國民社會主義が今日全く新しい深さに於て、そして今日まで全く存在しなかつた徹底さを以て又それから流れ出る一切の實踐的歸結を以て發展せしめたところの民族と國家との關係である。然し種族的なものに深く突き進むことは實際は有機的民族及び國家思想が認容し得るところの、考へ得べき最も透徹せる形式であり、從つて同時に一切の傳統的ドイツ國家理論及び社會學の完成である。民族的人種的思想の基本的意義を不斷の發展を續けてゐる進歩的な國民社會主義國家機構の爲に明かにすること――かくてこれが今こゝに私がそれに向はんとする課題なのである。

私は最前、中世の專制政治若くは君主專制政治の國家及び社會觀程我々にとつて緣遠いものはないと云つた。私は今次のことを强調する、卽ち我々は勿論又自由主義及び國際社會主義卽ち、この二つの刻印を有するものとも對立するのであつて、原則上啓蒙的な種類の思想はこれらの刻印に相應するもので、兩者は啓蒙から又歷史的に實行に移されてゐるのである。人間性の構造の自由主義及び社會主義に對する我々の立場を不取敢全く表面的に云ひ表はすならば、我々は或點で兩極端の中間に立つことを私は確認する。なんとなれば兩者の立場は原則的には相互に共通性を有するにも係はらず、國家及び政治的なるものに對する見解と評價とに於ては正反對であるからである。

自由主義は元來國家を敵視し、國家の存在とその權力とを最も極限された範圍內に限らうとする傾向を有する。然り、それは社會を以て國家に置き換へ、最大限まで國立制度を廢止し、全ての人間的現存から政治的なものを除き私的なものに取換へんとするのを理想

として説いてゐる。それはニーチェが自由主義に關して云つた樣に「出來る限り僅かの國家」である。國際社會主義の說く所は之に反して——その際それを徹底的につきつめて考へるが——この點に於ては正反對である。それは國家と社會との同一性の思想を代表してゐる。それは個人の一切の自由と同樣經濟、法律、科學、藝術及び宗教の如き個々の生活並に文化領域の自由をも破壞する脅嚇手段や極度の强制による獨裁國家に左袒する。それはニーチェが亦豫言者のまなざしを以て、自由主義に對する避け難い反動としてその到來するのを見たところの、ボルシエヴイキー的な「出來る限り多くの國家」凌駕し難き（non plus ultra）國家であつて、ニーチェはそれに對して彼の北歐ゲルマン的自由愛の熱情のすべてをあげて突き當つたのであつた。

若干の略圖を畫いて見れば、それはその基底に全く異なつた心理的前提が橫はつてゐる啓蒙的世界觀の二つの可能な完成である。卽ち自由主義の場合には人間——それはこゝでは結構急進的なものと考へられる——その人間の天性に關して、最早それ以上高く評價し

得ない程の樂觀主義が、國際社會主義の場合には底知れぬ悲觀論が。後者によれば人間は全くの惡人であり、自然狀態に於ては相互に獰猛な狼として對立し合つて居り、萬人の萬人に對する不斷の鬪爭が行はれる。

處ろが、國際社會主義國家の原型は既に政治的及び世界觀的自由主義の成立に先立つて存在して居り、即ちジョン・ロック並に彼の一六九〇年の政府に關する二つの論文及び一六八九年の勘忍令に關する最初の書簡に先立つて、既に彼と同國人のトーマス・ホッブスによつて、就中一六四二年の市民に就ての著作及び一六五一年のレヴィアタンに於て展開されてゐる。ホッブスはロックとは反對に、國家を離れての根源的な自由權、國家以前のそして國家の外に於ける所有權を一切認めない。なんとなれば萬人が萬人に對して權利を主張する狀態は完全なる無權利狀態と同一に歸着するからである。彼はロックとは異なり――と は云へ自然法的契約說並にデモクラシーの原理を基礎とすることは同樣であるが――國家と敎會、政治と宗敎の統一をも含めての國家の無制限の統一、全能及び全體性並に權力の不

可分性、約言すれば徹底的國際社會主義思想が不斷にそれに流入せねばならぬあの貪食のレヴィァタンを說く。

それに從へば、人間と社會生活とが出來る限り國家の束縛から解き放されて自由となるか、若くは威嚇と暴力とによつて斯くの如き一切の自由が破壞される——此の二つの思想をもし眼の前に置くならば、國民社會主義は兩極端の正しく中間に位置するものであつて、その合言葉は卽ち餘りに多くない又餘りに少くない國家である。我々は無制限の自由と同樣無制限の强制にも反對するものである。國家一般の肯定と、社會主義なるものは如何なる種類のものであれ凡そ自由放任の自由主義の原則に從つて自らを形成することはなく、唯一の制度——それがこゝでは問題であるが——卽ち國家の枠內に於て組織されねばならぬとの見解に於ては、我々は徹底的國際社會主義と見る所を同じくしてゐる。然し我々は國家の獨裁とその結果惹起する個人及び個々の生活並に文化領域の自由の破壞を容認し得ない。國家は我々にとつて直接の主體であるよりもむしろ間接の主體であるのに、どうして

經濟、法律、科學、藝術及び宗敎の唯一の主體たり得ようか。それ故にかくの如き自由を承認することに於ては我々は再び自由主義に與する。然し我々は無制限の自由を否認する。なんとなれば、それは我々の考へでは、自然必然的に混亂をひき起すものと思はれ、それはワイマル體制のドイツに於てのみならず其の他歐洲及び世界の各地に於て屢々起つたのである。かくして國民社會主義はその問題の點においては兩極端の中間に位することが明かとなる。そして確信を以て次の如く云ふことができる。卽ち正しくこの中道、この二つの等しく一面的にして薄弱な立場の回避は旣に健全なる人間悟性によつて理解されて居り、それは兩極端の長所を自己のものとし、短所を回避する充分の能力があるのであらう。

然し乍ら、二つの卽物的な、又歷史的に新しい歐洲に起つた極端思想の間の中道として、全的に國民社會主義を觀ることは、直ちに不當ではないとしても甚しく淺薄であり外面的である。それ故に我々は多樣性の中に、自由若くは國家の多少に關する段階的な或は量的な相違を見るのみならず、又人間の共同生活一般の社會學的原理に關する實體的な本

質的な相違を見る――斯くの如き考察を行つて前記の見解を補ひ且つ深めなければならぬ。こゝに於て初めて我々は國民社會主義國家觀の眞の本質に突進する。こゝでは實際に本質と機構との根本的な相違が問題なのである。啓蒙的西歐的見解並に國民社會主義的見解に基いて二つの全く異なる社會學的原理が相互に對立してゐる。卽ち自由主義と同樣國際社會主義の根柢をもなしてゐるところの社會の原理と、古來ドイツ國家並に社會哲學の原理をなして來た協同體の原理とである。この大なる對立に比すれば、自由主義と國際社會主義との相違すらも、それが個別的には常に如何に興味があり且又重要なるものであるとしても、我々にとつて窮極の目的からすれば重大なるものではない。

それは一體如何なることであらうか？　一方に於ける社會と他方に於ける協同體とは？　我々は二つの概念を正しく二つの質的に相違する社會學的構造原理として嚴密に把握せねばならぬ。そして私はこの機會に次のことを注意して置きたい。卽ち英佛兩國語には前者に對しては精確に規定せられた言葉卽ち Society 及び Société があるが、後者卽ち協同體

については然らず――眞のドイツ語たるこの言葉に對しては如何にしても英語若くは佛語の適譯語を見出し得ない、Community 及び Communauté と云ふ語は私には Society 及び Société と本質的に異なるものとは考へられないのである。因にこの様な飜譯の不可能なことは又「民族」或は「民族的」と云ふドイツ語についてもあてはまるであらう。――これは概念的意味と感覺的言語現象とが相互に相關聯して如何に解き難いものであるか、そして結局一民族の最も深い存在と本質の奧底から生み出されるものであると云ふことに對する一つの證差である。

私は先づ最初に二、三の原則的なものを述べて社會と協同體の概念の差異を明かにしたい。

社會――それは我々にとつては、眞の意味に於ての自然に對する關係、從つて又一切の自然の現象の本質的條件としての時間及び空間に對する關係を失つたところの、浮動する、根こぎにされた群集である。社會は空間の中で定着せず又根をおろしてもゐない、そして

經過するに急がしい、時間の瞬間の上に立つて居り、それは正に文字通り空間と時間とを離れてゐる。それ故に社會は又言葉のより深い意味に於ての歷史と云ふものを知らない。協同體は之に反して、空間につかまへられて居り、時間につながれてゐる。それは神から與へられた空間の一切の力と汁液とによつて自分を育て、生活し、無限の世代の連續の中に暗い過去から直接に未來へ向つて動いて行く。それは時間と歷史との現在の生々とした脈搏の中に於ける過去と未來との統一である。約言すれば協同體は血と土とから生まれて、永く存續する。然り、それは我々にとつては地球上に於ける永遠性の現實的な生々とした象徵である。

更に別に之を表現するならば、社會はその理想的な場合に於ては、地球上の須臾の時間と場所に於て、秩序なしに又非組織的にまきちらされた全體の人間であり、すべての同質と見做される個々の原子の機械的外面的總計としての種族である。之に反して、協同體は——そして協同體の原理の上に構成せられた國家は——ドイツ浪漫主義の國家理論家が見

事に表現した様に、典型的には擴大された家族であり云はゞ同一の肉體と魂と精神とを有し、血液、言語、風習、感覺、思想、感情及び信仰の共通性に貫かれ、交織せられ、そして何よりも先づ共同の歴史の基礎の上で熔接せられた大なる家族である。

この點からしてドイツ浪漫主義は基礎身分相互の關係を美しい譬喩によつて表現しようと試みた。浪漫主義は一方に於て貴族卽ち農民と、他方に於ける市民との間の結婚について語つてゐる。その際堅忍な、むしろ受働的な、自然に直接接して居り、大地を信仰する農民によつて女性の原理を代表せしめ、活動的な、常に新しいものを求めて、企業と冒險とを好む市民を以て男性の原理を代表せしめてゐる。恐らくこの比較は單なる譬喩以上のものであらう。何となれば原始時代に於ては園藝や農業は家事の延長として主として女性の分野であつて、男性は第一線で獵師、戰士又は商人として働いて居つたのであらう。事情は同じであるが、總統も亦嘗てシーメンス工場に於て新國家を擔ふ二つの階層について語つた際にかゝるものとして、時代の變遷に應じて、農民及び勞働者の名をあげた。彼は又

この際兩基本階層相互の結婚と夫婦關係の譬喩を利用して、最も重大なる身分關係に關する有機的國民社會主義的協同體思想の特質を、都市と農村とを分裂させたマルクス主義に對して明かならしむることが出來たであらう。

これらの總てから既に國家に關する我々の根本的本質規定が生ずる。國家は我々にとつて一民族の包括的生活形態である。なんとなれば、民族は生ける協同體一般の決定的な形態であると我々には考へられる。民族はそれ自身婚姻と家族、血族と種族との協同體の圈内から生長するが故に、同時に國家に對する觀念と、その表現の中にそれ自身本質的に際立つてゐる明確な人種的性格を包藏してゐる。一度活動を始めた協同體思想はまことに完全且つ徹底的な發展をとげるものであつて、それ以前に、反協同體思想によつて代位されて中絶するものではなく、このことはこの際確に決定的な意味をもつてゐる。數ケ月前になくなつた新ドイツ社會學の長老フェルディナンド・テンニースの協同體哲學の弱點の主なるものは次の點に存した。卽ち彼の云ふ協同體とは常に全く狹小にして親密な、懇意なそ

して内密な、殆んど專ら私的なものを意味する。彼の協同體思想は家族の中に固着してと ゞまつて居り、家族はかくして彼の協同體哲學の中心に入り込んで居る。

他方彼は國家一般をたゞ鄉土をもたない、根を失つた、啓蒙主義的機械的社會と結びつけ得たのみで、彼の初期の述作一八八七年の「協同社會と利益社會」に於てはなほ自由主義と社會主義との間を無定見に動搖して居り、之に反してその晩年の著作一九三一年の「社會學入門」に於てはトーマス・ホッブスの學んだ道をさまよふて居り、勿論未だホッブスの嚴格にして偉大な徹底さに到達してはゐない。之に對して國民社會主義の見地からすれば、諸々の弱點と不徹底との爲に協同體思想が家族のところでとゞめられ、更にそれが社會思想によつて代位され、破壞されるのであることが全く決定的に確認される。こゝに眞實に、抗す可からざる權力と徑間の論理が存して居り、それを任意に中止したり取換へたりすることはできない。その論理の基礎を一旦肯定した以上永くそれに忠實であらねばならない。總ての協同體哲學の基礎は、家族と並んで兩性相互間の正しく理解された關係に

存する。然し總ての眞の協同體哲學の中心は、種族的な明確さと特性を備へた民族唯一つにあるのである。

それは決して狹隘な、未成熟の、近親的、私的なものでは無くて、地球上に於て現實に生成發展してゐる社會的存在形態一般に存する最も公的な又最も强大なものである。それ故に中心的協同體形式としての民族のみが國家の決定的な擔ひ手たり得る。それにもかゝはらず、フェルディナンド・テンニースの總括的批判については、次の事が忘れられない。卽ち、彼は「協同體」が「社會」に取つて代はられ漸次に解消して行くのを免れ難い運命と信じて、しばしばいたましい諦觀をもつて見なければならなかつたとは云へ、彼は人間の社會生活の起源的原理としての協同體一般の社會的原理にはいつも執着して居つたのである。彼が人間の社會生活の協同體的基礎を終局に於て放棄し難いものとして擁護した限りに於ては——彼の晩年の著作特にホッブスについての批判にたまたまそれが見られるが——彼の中にドイツ精神の遺產が目ざめて居り、彼の血の聲が語つたのであつた。

家族、民族及び人種——かくしてそれは民族社會主義の觀念によれば、ごく一般的に云つて、國家の有機的な基礎力であり、その中から現實の家族、民族及び人種政策と同樣國民の生ける概念も自ら生ずるのであつて、その概念は我々の綱領の第四條中に次の如く述べられてゐる。「國民同胞タル者ノミ、國家公民タルコトヲ得。國民同胞タリ得ル者ハ、獨逸的血統者タル者ニ限ル。但シ信仰ノ如何ヲ問ハズ。從ツテ、猶太人ハ國民同胞タルコトヲ得ズ。」國民社會主義が政權を握つて以來發布せられた法律の全系列は、すべて結婚、家族、民族及び國家についての我々の見解の實現と、就中我が民族の人種的本質の保持に奉仕するものである。

私は特に適切なものとして一九三三年七月十四日の遺傳病發生防止に關する法律と、更に二つのニユールンベルグの法律卽ち國民同胞法と一九三五年九月十五日のドイツ人血統及びドイツ人の名譽保護に關する法律、並びに一九三五年十月一日の結婚保護法を、それら總ての施行規則とともにあげて置く。これらの基礎法の內容と效果とを個々に說明せん

とするのは、この講演の範圍を餘りに逸脱するものであらうから、私は單に次のことを强調するにとゞめたい。卽ち國籍を有する者とドイツ公民との相違は今や國法によつて確定して居る樣に、全く基本的な、そして特殊的には國民社會主義的な相違であり、その相違はそれぞれの刻印を打たれた啓蒙的思想について見られるが、國家の觀念において我々の國で行はれた開墾の深さを他の何者よりも特色づけてゐる。

その相違は次の如くである。卽ちドイツ公民權の取得についてはーードイツ國籍の所有及び取得以上にーードイツに於ては爾今その該當者は第一にドイツ若くは之に類似の血液の者であり、第二にドイツ民族と國とに對して忠誠をつくすことを志し且つそれに適することをその行爲を以て實證することを條件とする。單に同一若くは類似の血液であるのみでは勿論充分ではなく、將來ドイツ公民證は、勞働奉仕及び兵役義務の民族的國家的な光榮ある義務を果した際にのみ賦與されることゝならう。かくして初めて選擧權及び公職に就任し得る權利の如き完全なる政治的並に公民權的權利は取得されるのである。此の權利は

ドイツに於てはユダヤ人は最早取り得ないものである。何となればユダヤ人はドイツ公民たり得ないからである。ドイツの運命はドイツ人の手から完全にもぎ取られてあつたが、其の手に歸つた。國民社會主義黨綱領の最も決定的な點の一つが、ドイツ國法によつて具體化された。且又このドイツの人種立法から壓倒的に明確に次の事が生じてくる。それは卽ちユダヤ人問題に關する我々の立場は徹頭徹尾世界觀的に限定せられた原則的なものであると云ふことである。

自然のすべての根深い基底から人間を解放せんとする啓蒙主義とは反對に、この世界觀は自然の、永遠の、動かし難い合法則性への復歸である。この自然の合法則性は勿論超自然的思想によつて、相反する見地からではあるが、甚しく輕蔑され且つ誤れる尊重よりもむしろ權勢慾によつて恣いまゝに退けられたものである。然し我々は人間が永遠なる宇宙の秩序に背いて、永く罪を免れてゐることはできぬことを知つてゐる。我々にとつて民族と種族とはその最も深い根柢に於て神の意志であり、そして可及的に血の純潔を保持し、

自らに忠實に本質を發展せしむる道德的義務は、我々にとつて最後の目的たる――ドイツ的宗教心より流れ出づるのである。

ドイツ民族主義とドイツ的意味における民族國家の概念は、かくして明確に特徴づけられた。我々は國民と云ふ言葉の原意を再び光榮ある地位に登せたが、それによればNasciとは「產まれたもの」の意であつて、それ故に血のつながりを實在的に含んでゐる。この生命の最深の奧底から湧き出る協同體の團欒に較べれば、個人と社會とは、我々にはともに人爲的な抽象としか見えない。我々は孤立した個々の原子としての人間が存在して居り、或は更にこの樣な人間があらはれると云ふことに、そして又普遍的人間なるものが存在して居り、或は一般に存在し得ると云ふことに異論を唱へる。とは云へ我々は一般概念に關して決して名目論者であるのではない。たとへ限られた範圍ではあらうとも、民族と國家も亦一般概念的觀念であるのだから、我々は全く名目論者たり得ない。そこで我々は又現實的存在關係の內に、實際に個體と人間とが存在してゐることを毛頭否定しはしな

い。然し我々の見解では、それらは個體が同時に有機的生活關係と具體的主體的協同體に結びつけられたその限りに於て存在するものであり、かゝる生活關係と協同體とが初めて又人間社會にその眞の內的形式と構成と、その無限に多彩の富と價値內容とを賦與するものである。

その際私は、今こゝに活動してゐる有機的論理が、旣に疾風怒濤の時代、浪漫主義及び思辨的理想主義の時代に於てドイツ精神を驅つて、一般的には啓蒙主義、特殊的には一七八九年のフランス革命の世界像に對して、自然、精神、歷史及び更に之等に先んじて國家、法律、經濟並に人間社會の本質に關する新な有機的像を對立せしめたことを强調するのを怠つてはならない。初めて全體的、民族的な觀念論が展開されたのはヘルデル及びゲーテ、ヤーン、アルント、シェリング、アダム・ミューラー及びヘーゲルの時代であつて、その世界像は爾來ドイツ人の生活及び我民族文化の眞の基礎となつて殘つてゐる。扨世界大戰及び大戰後より今日に到るまでの時代を完全に理解するためには、我々は、西歐諸民族卽ちフラン

ス、英國及びアメリカの生活様式が啓蒙主義の時代に於て決定的にその特質を賦與され、他方ドイツの世界觀及び人生觀は、啓蒙主義思想の凡ゆる影響を受けたにも拘はらず、結局疾風怒濤の時代、浪漫主義及び思辨的理想主義の時代に於て――この時代に同時に自由戰爭が終つた――その規範的なそして固有の形をとつてゐたことを忘却してはならない。此の洞察は正しく、國家及び社會觀に於ける基本的な相違に關しても亦最も重要な意味を有つ。

既にアダム・ミューラーは例をあげて、一八〇九年の「國家學の諸要素」の中で國家について次の様に述べてゐる。「國家は單なる工場、農園、保險事業所若くは商業組合ではない。それは一國民全體の物質的並に精神的欲求と、全體の物質的並に精神的富と、全體の內的及び外的生活とを、大なる、精力的な、無限に活動して止まない生々とした全體に內的に結びつけたものである」と。同様のことをアドルフ・ヒットラーは既に一九二四年三月廿七日ミュンヘンの民衆裁判所の法廷に於ける、彼の最後の演說に於て次の如く述べてゐる。「國家は經濟的組織に非ずして、一箇の民族的有機體である」と。若くは又、その

追憶日がオリムピック準備デーに近接してゐる、フリードリッヒ・ルードゥイヒ・ヤーンを想起してもよい。

彼は一八一〇年の著作「ドイツ民族性」の中で次の如く述べてゐる。「民族を缺いて國家は無い。それは魂の入つてゐない藝術である。國家無くしては民族も無い。それは肉體の無い、空中に浮んだ幻影である。現世を逃避したチゴイネルとユダヤ人との樣に、國家と民族とが一體となつて初めて帝國を形成するのであつて、それを維持する力は民族性に存する」。

なほ最後にヘーゲルを擧げよう。彼は一八二一年の法律哲學の中に於て、自由國家を全く外的且つ抽象的な困窮＝悟性國家となし、そして明確に論斷してゐる。「もしも國家が市民的社會と取り違へられ、そしてその使命が財産と個人的自由の安全と擁護とに置かれるならば、かくの如き個人の利益が、それを目ざして彼等が集合したところの最後の目的となり、そしてこのことからして同樣に、國家の構成員たることは任意となるのである。然

し國家は個人に對してこれと全く異なる關係を持つてゐる。卽ち國家は客觀的精神なるが故に、個人自身はその國家の一員たる限り、正しく客觀性であり眞理であり道德である。」客觀的精神とはヘーゲルにあつては民族精神の異なれる表現に外ならない。かくしてヘーゲルが又國家の中に於て、全く民族精神の存在形式として示したところのものは民族的國家觀である。

我々は今又民族精神の槪念をヘーゲルが嘗てなしたよりも遙かに徹底的に把握せんとし、且又我々は何よりも此の思想家の體系の中に於て國家に附着してゐた一切の專制主義的な過重評價を取り除かうとするものであるが、然し我々がそれを今日一層發展せしめ、その最深の根元まで追究してその中から初めて忌憚なき結論を引き出すものは、原理的には依然として古來の偉大なる傳統的ドイツ國家哲學であり、且つそれにとゞまつてゐる。然し我々の今日の國家觀は文書として總統の著書「我が鬪爭」の中に吐露せられて居り、その中の國家に於ての章には「國家は目的を達成する爲の手段である。國家の目的は物質的

にも精神的にも同質の生活者の協同體の維持並に推進に存する……國家の最高の目的は、文化を施與するものとしてより高度の人類の、美と價値とを創造するかの種族的原基を、維持することに努めるにある」と述べてある。我々アーリア人はかくして國家についてはその民族の生ける有機體のみを考へ得る。それはこの民族を保全するのみならず、更に又その精神的並に觀念的の能力を陶冶して、最高の自由にまで導いて行く。

かくて我々の國家觀の民族的人種的性格は徹底的に明かにされた。その性格は多くの共通點を有するにも拘はらず、基本的な方法に於てまた我々をイタリーのファシズムから引き離す。そのことはなほ强調されねばならない。ファシズム思想はこれをつきつめると、意志的に意識された、精神文化的な民族の特殊形態としての國家を出發點としてゐる。かくてファシズム思想は、國家を自律的形式要素の全體と見てゐるのであるが、それは同じくローマ法、ローマの經濟及び宗教觀を特徴づけてゐるものであつて、ローマ古典藝術については特にこれが目立つてゐる。從つてその藝術の合法則性は北歐ゲルマン藝術のそれ

とは全く異なつて居り、後者は獨特の個別的な本質相を有つた具體的な所與のものから出發して居り、從つてこゝでは對象が形式と內容との引き裂き難い自然的な統一と見られるのに、他方古典的南歐ローマ藝術の對象は、云はゞ外部から、人工的な普遍的な、それ自身の中に存する類型的合法則性によつて規範的に構成される。

我々は藝術、哲學、宗教、國家、法律及び社會を考へる際には內容から出發し、そしてその內容がそれに本來固有の形式の中に存在してゐるのを見る。ローマ思想は之に反して、それ自ら內容を律して之を特徵づけるところの形式を以て初まる。內容はこゝでは結局、その意義と目的とを自分自身の中に持たされてゐる超越的な又絕對的な形成原理に對して單なる素材となつてしまふのである。民族とは只單に國家の規律の下に於ける秩序を表現せるものに外ならない。——このことを卓越せるファシズムの理論家グイド・ボルトロットは民族と國家との關係について適切に云ひ表はしてゐる。

彼はこの際一九三二年のファシスト綱領に於て、民族が國家を造るのではなくして、國

家が民族をつくるのであると明確に宣言したムッソリーニと完全に見解を同じくしてゐる。そしてムッソリーニは繰返し〳〵して、民族は先づ以て血液によつて規定されたものでは無く、又土に繫縛せられたものでも無い。意志的に、精神的に、意識的に、人爲的に、國家の中に於てそして又國家によつて、國民にまで形成されたものである。ファシズムの基點は國家であり、二十世紀はファシズムの世紀であり、そしてそれ故に國家の世紀であると述べてゐる。ファシズムの指導者達の演說や著作の響きは正しくその樣に解せられるのであつて、彼等は、時折彼等の間に胎動するヘーゲルの民族精神思想及び窮局に於ては民族的有機體としての彼の國家觀を以て何を爲すこともできない。このことは特に國家と敎會、政治と宗敎との問題に於て明白となつてゐる。我々は之に反して今日何はさておき、ヘーゲル哲學の最も深い企圖を成就しようとしてゐるのであつて、浪漫主義一般についても少くともそれらが健全にして創造力を有してゐた限りに於ては、同樣のことが云はれる。

そして我々にとつては二十世紀は民族と種族との世紀であり、それらの民族と種族とによ

つて決定的に確定せられた國家力並に政治力の世紀である。

最後にこゝに要約すれば、國家は我々にとつて必要な最小限の惡ではなく、外的機構若くは魂無き權力裝置でもない。それはその內部に於て我が民族の肉體、魂並に精神がそれに全く固有の本質に從つて最善の又最も豊かな發展をとげるところの包括的な生活形態である。然し他方に於て國家は我々にとつて自律的な意志形像ではなく、目的それ自體でもなく、目的を達成する手段たるに過ぎず、單なる形式であり、その中に於てドイツの生活並に文化の實體が新しい强さと大さとに達すべき容器である。我々の見解によれば更に民族と種族とは懷妊せる母なる大地を形成するもので、眞の文化は常にその中からのみ生れ出づる。そして我々は國家を創造的文化價値の爲に肯定するものであり、その文化價値は國家の中で發展するものであるから、民族と國家とは我々にとつて又自然必然的に唯一の

可能な國家の擔ひ手となるものである。そしてその中から同時に福祉を惠む政治と世界觀との調和が生れて、それは力强い和諧音の如く國民社會主義の總ての信條書並に第三帝國に於ける全建設工作を貫いてゐる。調和、それは今全ドイツ民族を衷心より奮起せしめ、そして生と死とを托する唯一の運命協同體に、ドイツの歷史上未だ嘗てその例を見ざる程鞏固に——かく我々は希望し且つ信ずるが——結合せしめる。

宣傳大臣　ヨーゼフ・ゲツペルス

ファシズムと其の實踐的成果

ムッソリーニが時々引用したハインリヒ・フォン・トライチュケのことばを私の説明のライトモティーフにえらびたいと思ふ。すなはち「人々が歴史を造る」といふ言葉である。人は民族生活の政治的ならびに歴史的形態化に對しては、自分だけで、自分ひとりで決定をあたへるものである――といふ意味にとらうとするならば理解がまちがつてゐるであらう。これは次の様に理解されるべきである。すなはち――人々は素材たる民衆を形成してゐる。素材たる民衆自身には政治的な形態化を指導し指揮する使命はない。指導し指揮するには創造的な單一人格の、整理する手を必要とする――と。政治家は藝術家である。政治家にとつては素材たる民衆はいつでもたゞ形づくり得べき素材であるにすぎない。素材たる民衆としての人間から民族を形造り、そしてこの民族を國民政治的な重要性にまで高めることは、おそらく一つの政治的な仕事のもつ最大の成果であらう。

ファシズムと近代イタリーとをムッソリーニ無しに理解することはできない。ムッソリーニは我々がファシズムと呼んでゐる政治的發展の出發點にあり終點にある。ファシズムはムッソリーニと共に始めて現象の世界に入つて來た一つの現象である。ファシズムはムッソリーニから理念ばかりでなく又形式をも形態をも組織をも受け入れた。この様にして近代イタリーはそれのすべての生活表現に於てまぎれもない、深く刻み込まれた、この無類の人格の刻印をつけてゐる。

ムッソリーニ自身が意志と理念との現象である。まさにその故にこそムッソリーニは政治的現象の一世界の眞只中にあつて斯くも桁はづれな、斯くも理解しがたい活動をしたのであつた。こんな政治的現象の世界はもはや人格のなす仕事ではなくて、集團の、黨派の、又組織のなす作品であつた。ムッソリーニはあの互に罵りあふ民主主義者たち、サンディカリストたち、勞働組合書記たちの群集の中へ始めて典型として、單一人として、人として、入り込んで來た。ムッソリーニに於てこそ始めて、政治的な問題を決して物質的、機

械論的な立場から見ずに、政治的な立場から見ようと試みる一つの著しい政治的人格が示されてゐた。それ故にこそムッソリーニは近代イタリーの先驅者となつたのであつた。

ムッソリーニは自由主義の、唯物主義の、そして議會主義の世界の中で、始めて、人間を一つの新しい有機的な形式に集結せんとする、又人間に一つの新しい社會的な國民的な理想をあたへんとする試みをやつた。ムッソリーニがこの様な政治的發展の經過の中で始めて、マルキシズムそれ自身の腰をむりやりに碎からうとする試みを世界に誇示したといふこと、そのことは彼の最大の歴史的功績である。かゝることはその時までは嘗て試みられたことがなかつた。殊にこの様な課題は解決できぬもの、不可能なものと考へられてゐたから尙更試みられたことがなかつた。困難に困難が積み重なつてムッソリーニに反對した。それにも拘はらず、ムッソリーニは始めて政治的現象としてのマルキシズムを事實の世界から追ひ出してしまひ、又勞働運動としてのマルキシズムが反動的な動機からでなくて、社會的な動機から克服され得るといふ古典的證明に始めて近づいた。

ファシズムこそは自由主義――すなはち一七八九年にバスティーユ襲撃を以て始まり重苦しい革命的痙攣のうちに一國又一國と征服し、終に諸民族をマルキシズム、民主主義、無政府主義、階級妄想のなかにおちいらせてしまつたあの精神的な觀念世界――に向つてのはじめての實力政策的な告訴であつた。此等のものゝ代りにムッソリーニは、始めて國民的共同心をおきかへた。この共同心が新しい壇の上に立つて諸階級を、諸身分を、諸宗派を、諸職業を一つにして、あたらしい國民的な運命共同體とした。

これは本質からいつて一つの革命である。何故ならば、ムッソリーニは自由主義者や民主主義者の世界とのかけひきによつてはこの様な目的が決して達成されることのできないものであつたことを、はじめから明かに知つてゐたからである。互に正反對に對立し合つてゐた二つの精神的原理の間に媾和を結ばうとする試みを、何とかして企てることが問題なのでもなかつた。一つの精神的態度を排除して、そのかはりに別の精神的態度を置きかへ

ることが問題であつた。

それは青年への突入であつた。世界大戰の地獄火を通り拔けて來て確に政治的な事物については、一般に自由主義・民主主義の世界から可能と考へられる見方とは別な見方に達した、あの青年への突入であつた。從つてファシズムがその始まりに於て、イタリーの年老いた世代から理解されることがなく、又どうしても理解されることもできなかつたといふのは全く當然である。何となればムッソリーニが當時、現象の世界へ持ち込んだものは非常に新しく非常に近代的で非常に「未曾有」であつたから、世界はそれをつかむことができなかつたのである。しかしこゝでも又、かのショーペンハウエルの言葉が眞理となる。卽ち、今日の逆說が明日の平凡となるであらうといふことばである。今日我々がイタリーでは「ファシズム」の名をあて、ドイツでは「國民社會主義」の名をあてるのを常としてゐるあの政治的方向が次第〳〵に全ヨーロッパに行きわたるであらうといふこと、その方向に對しては何の阻止も何の障碍も、もはやあり得ぬこと、又一般に我がヨーロッパ大陸の

未來は此の政治現象の突入の如何にかゝはつてゐることを私は確信してゐる。

我々が向つて努力してゐるのはヨーロッパの形式である。ムッソリーニはその形式を最初の人として自分の國でイタリー民族により實現せしめるといふ大きな幸運をもつた。革命それ自身は決して國際的なものではない。バスティーユ襲擊は典型的にフランス的な事件であつた。しかし革命といふものは國際的にひろがつてゆく。革命は一つの政治的體系に向ひ、一つの氣分、一つの精神的態度に向つて進むが、かういふものは明かに國家が異なるにつれて種類を異にしてゐる。しかしどの革命の終りにも常に一つの新しく組織された大陸がある。

たとへば、あの一七八九年にバスティーユ襲擊に向つた人々が、數十年後に一つの新しいヨーロッパの旗手となつてしまふことは妨げようもなかつた。これが時々數年續くこともあり屢々數十年續くこともある。しかしこんなことはこのやうな歷史過程の內部力學の範圍內のことであつて、これらの歷史過程の演じられるのを常とする避くべからざる論理

に對しては何ら變化を加へるものではない。

ローマへの進軍についても同樣である。ローマ進軍は一つの合圖であつた。自由主義的民主主義にとつて、暴風の信號であつた。ローマ進軍は自由主義・民主主義の精神世界を打碎いて、そのかはりに新しい種類の共同體的な組合的な考へを置かうとする最初の試みである。「ファシズムは決して輸出品ではない」といふムッソリーニの言葉は、又かゝる意味に理解されるべきである。

これはファシズムが一回張りのイタリー的事件であつて、他の諸國はいつまでも全然それに觸れないでゐるといふ意味であつてはならず――さうあつてはならぬことはムッソリーニが私に確認してくれたが――、その反對にファシズムはこの新しい態度の典型的にイタリー的な形式なのであり――恰も國家社會主義が典型的にドイツ的な形式である樣に、――そしてこの新しい態度は他の諸國にあつては――イギリスで、フランスで、或はロシ

ヤ又はオーストリーでと言はう――、又別の形式をとる様になるであらうといふ意味でければならぬ。しかしこの突入の終りには、國際的に結び付き合ふのでなく、あくまでも國民的な地盤の上に立つ一つのヨーロッパがあるであらう。國家に從ひ、民族に從ひ、人間の性格に從ひ、それぞれ個々の諸國民の中にそれの種類に應じた形式を求めるヨーロッパ。しかしそれらの諸形式は全體としては同じ精神的根抵から出發してゐる。そしてこの精神的態度に克服されてしまふ姿とは別の姿を、恐らく十年、二十年、或は三十年後に、全體としてのヨーロッパは示すことであらう。

私はファシズムをそれの本來の世界觀的根抵を目指して探究する試みを企てたいと思ふ。ドイツに於けるこれと竝行の諸現象と對照してみることは、めい〳〵御自身におまかせしておく。

ファシズムはその本質からいつて反自由主義的であり、しかもたゞに活動に於てばかりでなく精神的原理に於ても反自由主義的である。人間が人間としてだけ、數としてだけ量

られてゐたが決して人格として量られることのなかつたあの自由主義世界をファシズムは實踐的に克服した。ファシズムは始めてありきたりの途方もない民衆妄想のかはりに國家の、經濟の、產業の或る新しい人格指導の原理を置いた。こんなにはつきり人格理念を强調するならばそれに相當するものが民族に對しても創り出されねばならぬことは明らかである。民族は組合のファシスト的體系のうちに有機的に形態化される。一方には、はつきりと際立つた、最後の歸結まで考へ拔かれた人格思想、他方には一切の創造する人間を一つの國民的な運命共同體の中にとり圍む、あの組合理念。

ファシズムは、しかし、たゞに反自由主義的であるばかりでなくて、又反平和主義的でもある。そしてこゝに我々はファシズムは反平和主義的であるがしかも平和を護るといふことに於てファシズムの第一の謎を經驗する。これはどうして說明されるか。平和主義なるものはその本性からいつて急進的、民主主義的な理念である。平和主義は實踐に於ても又遂行されるがしかしそれは、いつもたゞ自由主義的民主主義の代表者たち、黨首たち、

多くは利益集團の代表者たち、勞働組合書記たち、サンディカリストたち、しばしば辯護士及び代理人たちによつてである。かういふ人々が自分ら自身の職業の方法及び手段を政治の事實世界に轉用しようとする試みをやりたいと思はなくてもやるとすればこれは當然のことである。そもそもこの點にこそ自由主義世界の腐敗の焦點がある。

何となれば自由主義世界の諸黨派はたしかに利益集團以外の何物でもないのであつて、それ故にこそ又これら諸黨派は自分の利害にふさはしい性格に應じてあの國民的政治の問題をおのれにあたへられる利益の視角でのみ觀察しなければならなかつたからである。辯護士はあまりにも法廷の方法を議會の演壇にかつぎ上げようと唆かされがちである。こゝには何ら公明な憎しみもあり得ぬし公明な愛もあり得ぬまでに、今や全く事態は甚だしい。なるほど大衆の眼の前で互に爭ひはするがしかし後繼者爭ひが演ぜられるばかりである。鬪爭だがもはや鬪爭ではなかつた。そして世界觀を戰場に繰出した。これら世界觀は語られた通りの意味では全くなかつた。爭ひあふのは、樂屋でもう問題にならぬ様な問題

についてであつた。そしておもての控室では再び手に手をとつてすゝみ、心も一つ、魂も一つであつた。この種類の人間が屈辱と畏敬との尺度について何ら感受力を持たないことは明かである。この尺度は本當に民族の間から登つて來た人間なら自分の民族に對していだかざるを得ないものである。かれらは民族をも利益共同體にすぎぬと考へ、それ故に民族をも、自分の利害に關係する他の諸現象をいつも評價するのと同じ樣にして評價する。

ヨーロッパは辯護士たちが政治をやつてゐたあの時代ほど多くの體驗をし、多くの見聞をしたことがなかつた。特に又、この辯護士たちは戰爭に參加することがなくいつでも戰爭を悧巧に他人にやらせるから尙更である。こんな恥づべき手仕事を、あざむかれてゐる民族の前につゝみかくしておくために發明されたのが我々の平和主義とよんでゐるものであつた。サロンでは人道の贅を盡してゐるが、ほかでは、ムッソリーニが嘗て云つたとうり、フロックコートとシルクハットをつけた獰猛な狼なのであつた。こういふものに對してファシズムは戰爭を開始した。ファシズムは事物の名を呼ぶのに容赦のない慘酷さを以て

した。ファシズムは戰爭それ自身を決して卻けるものではない。しかしファシズムが戰爭を敢てするのはただ戰爭が自分の民族の存立を保證する最後の手段であり、本當の最後の手段である時だけにすぎない。

ヨーロッパが國民的に組織されたならばこの自由主義精神のヨーロッパにくらべて、はるかによく平和を守ることができると私は信じてゐる。國民主義者たちはいつでも自由主義的民主主義者たちよりも互に相手を理解しやすい。國民主義者たちは同じ世界觀的地盤の上に立つてゐる。國民主義者たちはただに自分自身の民族の名譽を守り鬪ふばかりでなく又他の民族の名譽をも代表する。かうしてムッソリーニの反平和主義それ自身の中にすでに大きな大膽不敵な平和愛が含まれてあつたに違ひなかつた。そしてこの平和愛が又ムッソリーニをかり立てゝいまださうすることが非近代的で不人氣であつた時代に於て、ドイツの權利を世界の前に代表させ且擁護させせるに至つたのである。

ファシズムが守り鬪つた第三の原理は匿名に對する鬪爭である。自由主義的民主主義者は自分の事柄に對して決して自分の名前をあらはさない。最も好んで彼はいつまでも知られぬまゝでゐたがる。彼の實際の代任者達も又むろん公共生活のぎらぎらした脚光を受けることがなく、大抵は樂屋にゐるのを常とする。かれらは今日は民主主義黨であると思へば明日は國權黨であり、明後日はもはや表面ではおよそ存在しなくなつてゐる。この種の政治はイタリーではフリー・メーソン組織に於て決定的な形をとつてゐた。だからこそファシズムが反自由主義的、反平和主義的立場からしてフリー・メーソンに向つてそれを打ち亡すまでの戰鬪を布告せざるを得なかつたのは事の道理であつた。何故なればフライマウエライはマルキシズムの精神的中心と同義語であつたからである。

社會民主主義、マルキシズム、フリー・メーソンの互に異なるところは、ただ色どりと方法ばかりである。その考へ方と行ひ方とに於ては原則に於て同類である。これらの見解の代りにムッソリーニは完全責任性といふ原理をおきかへた。

ムッソリーニは自分と自分の黨派とに權力を握るようになつたが、これは決して責任を全うすることからのがれるためではなくて責任を公然と自國民ならびに全世界の眼の前で立派に自分の双肩に擔ふためであつた。これがあの間違つた種類の人道を敵とする闘爭の條件となる。我々は皆自由主義的民主主義の精神世界ではこの間違つた人道を十分知りぬいてゐる。弱者に對して人道的であり、又すべての病的な物に對しても人道的であり從つて强者やすべての健康に對しては非人道的になる。個々の人に對して人道的であるがその結果國民に對しては非人道的になる。まちがつた、僞善的な人間性を說敎し、いつはりの立場から生じた對社會態度を說敎するが、しかしその際に誤ちを自身に於ても克服しようとする樣な人道は持たない。

ところがムッソリーニはこれをやつた。容赦なく、烈しく自分の時代の弊害に肉迫した。多年にわたる犧牲の多い闘爭に於て彼は時代の弊害を根絕した。自由主義的民主主義のまちがつた人道理念を根こそぎやつゝけ、これに代へて男らしい英雄主義を置きかへ

た。この英雄主義はただに個々の範圍の、政治を行ふ人々を包むばかりでなく、今日ではすでに民族全體を含んでゐる。しかしこの英雄主義の特に最もよい部分はファシスト青年である。こんな青年を又と知ることはないであらう。こんなに誇らしげな、こんなに不屈な、そしてこんなに自ら安んじてゐる、こんなに大膽不敵な何ものかが今まで南方諸國の人々の顔に見られたことは一度もなかつた。これこそはムッソリーニの仕事である。大きい、勇ましい、意氣高い英雄主義。そして好んで押かけて國民のための犧牲になり、民族への奉仕を人の最も高い又最も努力の甲斐のあるものと考へ、それ故に又物質的な利益を斷念するだけの力と勇氣とを持つてゐる英雄主義。

この青年が今日若いイタリーの政治的な顔をも示してゐるのは全く當然である、國民が老人によつて統治されて居たこと、國民の先頭に立つてゐたのが若い人々でなくて、戰爭が始まれば戰爭をやらねばならぬのが自分らの世代ではないことを知つてゐた樣な人々で

あつたと云ふこと、このことは恐らく一九一四年のヨーロッパの最大の悪運であつたらう。この老年であることは戰爭のあとまで尾を引いた。自分があとにしてきた淨罪火にもかゝはらず、自分らの民族の政治的形態化においては何物も變らなかつたなどといふことは塹壕から歸郷した青年にとつては最も殘念であり最も腹の立つことであつた。ムッソリーニの思想が民族の中に火をつけたといふこと、ファシスト運動の始まりが前線の鬪士のしたことであつたこと、それがこの前線精神を引合に出しても居ること、その精神をそれの若い運動の宣傳的パトスとしたこと、これについては何人も怪んではならない。

ファシズムは青年を前線につれて行くがこの前線に就いては、ファシズムは青年が統治の熟練や技術に缺けたところをもつとも速かな道筋で學び加へるのであるといふことを知つてゐた。しかし青年が何を持つて來るかといふことは學び知ることができない。何かを敢てし、事をすつかりやり、政治を廣い視野で行ひ、成果を、もはやみづから體驗することができないであらうかといふ不安に苦しめられない。さういふ勇氣。青年が人生をうし

ろにせず前にしてゐること、青年が死への畏敬を再び得るために死への恐れを忘れるといふこと、青年が事物を感傷性や、あやまつたパトスや、生活から遠ざかつたロマンティークを以ては見ずありのまゝに見ること、これも又この青年的な國政の最も價値のある點である。

青年はこれらすべての物の代りに新しい種類の思考、或る種類の、はがねの、鐵の、男らしい、英雄的な、ロマンティークをおきかへる。このロマンティークはこの世紀をみたすべきものである。この青年ファシスト・イタリーは、はちきれるばかり創造力に滿ちてゐる。ファシスト・イタリーは問題を捕へる勇氣、たとへ問題が解決できない様に思はれる時でさへも、解決できさうにないにもかゝはらず、いやまさに解決できさうにないからこそその問題を手にうけとるといふ勇氣を今も尙もつてゐる。この青年ファシスト・イタリーは又何物かを敢てしても差つかへない。何となればその國家の先頭に立つてゐるのは實に國民の花だからである。

この花は歴史を造らうとする名譽心にとりつかれてゐる。そしてほんとに權力を黨派集團や利害集團に妨げられずに用ひることができる樣に、權力を手におさめてゐる。ファシズムは一人の人の理念であり、その人の一回ぎりの人格の天才的な頭から生じた。しかしこの理念は火をつけた。この理念は語られずに空氣中にあつた。ムッソリーニは稀な人間に屬する。そういふ人についてゲーテは嘗て「そして人間が苦惱の中にあつて沈默してゐる時神は我にすゝめて我が苦しむところを語らしめた」と云つてゐる。

ムッソリーニは此の空中にある氣分を、此の概略の形ですでに暗示されてゐた新しい英雄的な男らしい態度を、ことばに鑄込み、行爲に形造ることができた。ムッソリーニは無意識や下意識から出て意識の明かな光の中へ突き進む力をもつてゐた。ファシズムは一人の單一人の理念から一つの黨の信念となつた。そして此の黨の信念は、明らかに滿足できる一民族の世界觀となり、全國民の未來への希望となつた。此の壯大な仕事を完成した人が特別の資質をもつ人間であることは何ら證明を要しない。度々そしてさまざまの側か

らムッソリーニといふ現象に適切な解釋をあたへようと努められてきた。ユダヤ人の側からなされたし又そのやり方に從ひマルキストの側や反動の側からも試みられた。私はすべてこんな努力は的の中心に當つてゐないといふ印象を持つ。ムッソリーニはシーザー以上であり一黨首以上である。

彼の中には青春と意志との二つが一緒にかさなつてゐる。彼が權力を握りそして彼から威力をうばふことのできる力や人が無いとすれば、この二つだけで政治的な形態化には充分であるだらう。しかし民族の中から上つて來た人、この民族の信任と服從をうけてゐる人としてはこのほか更に第三のものを必要とする。民族との直接の接觸であり、民族の人氣者とよばれる人々をいつもとりまいてゐるあの神祕的な魅力と液體である。何か定義のできぬもの、言ひあらはせぬもの、或る種の善さと男らしさ、ものわかりのよい謙遜、しかし又自覺した偉大さと支配的な力、——さういふものをムッソリーニは持つてゐる。これが彼をしてイタリー民族の心臟に向つての、道を歩ませたのである。正に本能の人、指

先の感覺を持つ人である。

ムッソリーニとのはじめての會談の時十分間で我々は一致した。黨、革命、組合制度、黨を國家に融け込ますこと、國家自身の姿ならびに國家內容の姿——これらすべての問題を彼は本能的に感じ取つた。ほんとうの國家社會主義者がその人を相手にするといはばまるでリボンでつながれてゐるかの樣に會話することのできる人々があるものだが、ムッソリーニもさういふ人々の一人である。問題をすつかり話す必要は少しもない。問題は暗示の形でもう全く明かになり要領がつかまれてゐる。

ムッソリーニは他の誰よりもすぐれてイタリー民衆の心を持つてゐる。そしてイタリーの「獨裁者」に就いて語るあのマルキストの三文辯士たちは、皮が泳いで逃げてしまつたあの有名な鞣革師と比較されるばかりである。これは事物をほんとうに知つてゐる人にとつては滑稽な子供つぽい素朴な作用をする。イタリーの民族とイタリーの發展とはとつく

にこんな事物をとびこえて日程に入つてゐる。マルキシズムといふ言葉はもはや全く存在しない。そしてボルシェヴイズムといふ言葉はわづかに辭書の中に殘つてあらはれるにすぎず、もはや生活のきびしい實踐の中には存在しない。あの「ドゥーチュは何時でも正しい」といふ言葉は我々にとつては恐らく全く理解のできぬ言葉であらうけれどイタリーの概念にとつては、その人に對する斯かる信賴に最後に王冠を戴かせる言葉なのである。

此の言葉はただ壓倒的な多數が盲目的に「ドゥーチュは正しい」といふことを確信してゐる樣な民族に於てだけ刻みつけられることができる。もしそんな民族でなければ、こんな言葉は滑稽な、馬鹿げた作用をするであらう。その言葉は適切であることができないであらう。「ドゥーチュはいつでも正しい」——これは信賴とそして獻身の覺悟との巨大な額を示してゐる。そして同時にこのことは以て實踐的な現實政策を行ひ得べき全く明白な國民的資本であるからそもそもこれについて、ことばをこれ以上費す必要は全く無い。

ムッソリーニはイタリー青年の理想である。バリラ青年は誰でもムッソリーニの像を胸

につけて居り、イタリーの市民は誰でもムッソリーニの像を懐に入れてゐる。ムッソリーニは勞働者たちの人であり、農民たちの人であつて民族を理解しそれ故にもつとも好んで民族の中に居る。又彼は大切なことは民族と共に權力を支配することばかりでなくて、權力を民族の中にしつかと据えることである――この方がもつとはるかに意義の深いことである――といふことを知つてゐる。

我々はプロシヤ・ドイツで二つの種類の軍人タイプを經驗した。一つはいくらか肥つたがつちりした、ずんぐりしたタイプであり、他は瘦せた、すらりとしたタイプである。ヘルムート・フォン・モルトケ（註一）を私は後者のタイプの理想的な姿であると考へたい。彼は劍ばかりでなくペンをもあやつることができる將軍であり、彼の書いたトルコの手紙では生れながらの藝術家であるかの樣なスタイルを示してゐる。私はあの孤獨のフリードリッヒをこのタイプと見たい（註二）。彼はことばと笛とを操ることができた。偉大な軍人

素質の此の様なタイプがその時に歴史的な性向に專念するために、藝術的な性向を自分のうちにおさへつけてゐるといふことは一種の男らしい英雄主義である。

ムッソリーニに於ても又同じ様なことが認められると私は信じてゐる。彼は軍人であると同時に藝術家であり、本能を以て事物をさとり問題を指先で感じ取り、それ故にそもそも全くあやまちをやることができない人である。彼は成程第二義的なことに於てはまちがひをやり得るけれども、原理に於ては夢遊病者が歩く様に確實に歩くであらう。大膽なことばを使つてよいならば、私はムッソリーニこそはプロシヤ的なローマ人である！　とまで殆んど言ひたい位である。プロシヤ的な規律を持ち、プロシヤ的な働く喜びを持ち、プロシヤ的な英雄主義を持つた一ローマ人。此の一回限りに於てまさにローマの地盤の上にだけ成長することのできた一タイプ。ムッソリーニの仕事はファシスト黨であつて、彼はこのファシスト・イタリーの中心點である。

そしてムッソリーニが上からでなく下から着手したといふことは又事物に對する彼の本

能的に確實な觀察を證明してゐる。彼はむしろヒットラー以上に、上から着手する可能性を持つてゐた。といふのは彼はたしかに上に立つて、大きな黨の先頭にゐたからである。しかし彼は下から始め、梢からでなく根から仕事を始めた。それは彼が、自分は根から梢へ突き登ることができるが、梢から根へは決して突き下り得ないといふことを知つてゐたからである。これこそ本質的なことであつた。

（註一）　元帥モルトケにはトルコ在勤中に書いた「Briefe über Zustände und Begebenheiten in der Türkei 1835 dis 1839」といふ著書がある。

（註二）　プロシヤの大王フリードリツヒ二世は自分で詩作や作曲の筆をとり、又横笛をよくしたといふ。

これほど英雄的な自明性を持つた人は、あらかじめ次の様な立場に立つてゐたにちがひなかつた。――即ち、もし此の組織が勝利を得れば、それの勝利は又一〇〇パーセント此の組織のものであるとする立場。この組織の作り出される目的は他の諸黨派と協調したり

又他の神々を自分の周りに尙許しておいたりするためである筈がない。此の黨派はすべてを賭してゐる。もし失ふならばその時はすべてを失ふか、もし得るならばその時はすべてを得るか、そのどちらかである。それ故にムッソリーニは、はげしい、且つ何度もくりかへされる打擊によつて他の諸黨派を地面にたゝきつけたのである。

今日イタリーでは、もはや嘗て他の諸黨派が――社會民主主義者や無政府主義者や共産主義者や人民黨が――存在したとは全く考へてみることすらできない。それらはすべて、とつくに過去のものになつてゐる。しかし同時にファシズムは又民族の政治的組織ともなつた。民族は支へる足場を必要とする。民族に骨組をあたへなければならぬ。骨組は、たしかにさまざまであり得る。骨組は一結社や一軍隊や又は一組織の形で現はれることができる。又一黨派であつてもよい。しかし民族の中には、方向を指して示す少數がいつでもゐなければならぬ。此の少數は古代ローマでは貴族であつた。プロシヤでは軍隊であつた。ファシスト・イタリーではファシスト黨であり、國民社會主義ドイツでは國民社會主

義運動である。

しかし骨組は國家の傍らにあつてはならず、國家の中に存するものであらねばならぬ。國家はこの骨組のぐるりを圍んで組み立てられねばならぬ。何となれば、もし國家が一度び骨組を失へば國家は内側へ崩れ落ちるからである。それ故にファシスト的生成の大問題は、ファシズムを機能として國家の中に組み入れるといふことである。この政治組織は國家の傍らや國家のうしろにあつてはならない。此の政治組織は國家と融け合はねばならず、そもそもこの組織こそ國家なのだといふ確信をみづからに植え付けなければならぬ。多數は一般性に特徴をつけるものかも知れぬがしかし少數こそ歴史を造るものである。

ほんのしばらくすると、もうムッソリーニは自分の黨の書記長を内閣に呼び入れて、彼に現職の大臣としての地位をあたへた。このやうな國家への組み入れは勿論下へ向つて續けられたから十年の發展を經た今日ではファシズムと國家とは本來同じものであるといふことを安心していへる程になつてゐる。同時に又民族との結び付きも創り出された。全責

任を引受けながら、ただおのれの權力の手段の中にのみ民族との結び付きを見出す様な政府には禍あれ！　官僚主義と自分の警察以外の何物をも賴りにすることのない様な政府には禍あれ！　自分の後楯を民族それ自身のうちに見出す場合にだけ統治は存立し得るであらう。そして統治が民族の中に後楯を見出すことのできるのは、統治がまさに民族の政策を行ふ時だけである。

その意味するところは、ファシズムは國民社會主義と同樣に少數のもつ誇らかな特權であるといふことである。しかしこの少數は決して首都に坐して一國の運命を決定する樣な稀薄な上層を表はしてゐるのではなくて、階層をなして全民族の中に編み込まれてゐるものである。

第一等の者が先頭をなす。先頭は下に向つて掘り下げ、イタリーの國家及び國民組織のあらゆる內面的な骨組となる。この黨は革命の擔當者であつた。自分の權利と自分の要求とによりファシスト國家の擔當者でもある。國家の最高首領はファシスト黨の最高首領で

ある。この首領はファシスト的欲望とファシスト的思考とファシスト的行爲との彫塑的な表現形式である。今日ファシズムなしにはもはやイタリーを考へることはできない。ファシズムはイタリー民族の身體の節々にまでしみとほつてゐる。ファシズムは完全に青年をわがものにしてゐる。そして青年はファシズム以外の何物をも知ることなしに國家の中へ生えこむ。若いファシストは目下ドイツで同樣な過程が行はれてゐることを漠然と感じてゐる。この若いファシストたちの感じ取るものはほんとに心からのものであるから、一般政策上の平行する利害一致からは説明がつかない。むしろ共鳴した。即ち、「我々は主義が同じである。君達がドイツのために欲してゐることは我々がイタリーのために努力してゐることゝ本來同じものである」といふ感情が共鳴したのである。この感情が我々の中に新しい世界を切り開いてくれる。

革命と暴動とは一つのものでない。我々が一九一八年に經驗したものは暴動であつた。

我々が今日經驗してゐるものは革命である。イタリーがファシズムの政權獲得よりも前にじつと受けてゐたのは暴動であつた。ムッソリーニがやつたもの、そして彼が今日も尙行つてゐるものはファシスト革命である。革命といふものはいつまでも傳統にしばられて居り保守的な性格を持ち、何物をも破壞のために破壞することはない。革命が破壞するのはただ新しい物が生きる場所を持たうとするには、どうしても無くしてしまはなければならぬ様なものだけである。ファシズムにしてもムッソリーニにしても、本來直接ファシズムの本質に屬してゐなかつたものを澤山存續させて來た。

この若い黨は全く保守的な黨派でさへこれ以上ではあり得ない程に傳統に縛られて居り又固有の歷史的過去に對する畏敬に滿ちてゐる。この若い黨が自分自身の歷史的過去からすでに自分の傳統をつくり上げてゐることは偉大なことである。ファシストは誰でも自分の黨の歷史はイタリーの歷史であるといふ確信を持つてゐるがこれは當つてゐる。ファシスト運動の死者は國民の聖者として尊敬せられ民族の眼の前に輝かしい模範として扱はれ

てゐる。死せるファシスト達は我々の歌の文句の通り精神に於て生者の列に入つて一緒に行進してゐる。

かうして黨自身がファシスト民族を、ねりあげる機械となつた――とまで殆んど言ひたい――。この機械を素材が通り抜ける。するとそこからは形づけられた民衆が出て來る。この民衆は國家政策的に、繰入れることができる。この民衆を以て機動を行つて差支へない。この民衆は今や形態をもつた姿として、偉大な政治的藝術家の手から出て來るのである。

統治は警察なし、權力手段なしでさへも守られ得る。民族の力はファシスト統治の守りでもある。實際この分派が民衆へ、そして民衆から民族へ、民族から國民へと登つて行き、かくて今日、イタリーといへばファシズムとそれの指導者の大人格とも意味する場合に限られてゐる程である。ヨーロッパの西部ではしばしばイタリーの知識階級はファシスト統治に敵意を以て、又は少くとも保留を以て對するといふ見解がひろまつてゐる。――西部

の精神製造家が純粹の不安から發明した馬鹿げた噂である。そんなことは全くいさゝかたりとも問題になり得ない。

何となればファシズムの外側の知識階級に闘することは、とつくの昔にひからびてしまつてゐるからである。もはやそんなものと折れ合はうとする必要はない。だん〳〵くだらなくなり始めてゐる。――そしてこれこそ主知主義に生ずる限りの、もつともわるいことである。人はもはやそんなものを氣にかけてはゐない。そしてその間に、騷がしい生活はおのれの行程をどんどんすゝむ。その間に若い運動は、社會的新秩序の諸形式を魔法の力で地面から呼びだす。國民全體が形をかへられ、ちがつた組織になる。廣い民衆とそれの指揮者とは、束縛のできぬ創造欲に滿たされて居り、又みづから問題と戰ひ抜かうとする意志を吹き込まれてゐる。ファシズムが勝利の疾走を開始したその道を二、三のとりつかれた主知主義者たちが、今日でもまだ泣いたりわめいたりしながらさへぎつてゐるとしても何程のことがあらう。

ファシストの映畫は今日ではまだ漸く新しい創造の始まりにある。この映畫はまだ小さいけれども意義を持つ様になり始めてゐる。我々自身はドイツでファシスト映畫の作品の一連を眼のあたり見た。我々の方では、なるほど技術に於ては先んじてゐるけれども、民族の大きな運命の問題を形態化しようとする意志に於ては、まだ今日では我々の方がイタリーにおくれてゐる。私の意見によればこれこそ本質的なことである。その他のことならすべて學ぶことができる。熟練とか技術とかいふものは、健全な人間知性をものにした人なら誰でも自分のものにすることができるものである。學び知ることのできぬもの、それは事柄を充たしてゐる精神であり、事柄の上に立つてゐる衝動である。

ファシズムは映畫を國家の直接の役に立てようとする試みを始めて行つた。私はこの試みが成功してゐるかどうかに就いては今すぐには何も束縛的な判斷を下すことができないし、又それをドイツで模倣すべきかどうかといふことも私にはわからないであらう。私がす

でに始めに強調した通り、それぞれの民族は固有の國民主義を持つてゐるのであつて、もしも盲目的に無判斷に他民族の國民主義を移し取らうと試みようとするならば、災難なことであらう。運命はそんなに我々に都合よくはゆかない。我々はみづから新しい國家の合法性をドイツ民族の固有性と協調させようと試みることを、すでに自分で考へなければならないのである。

この青年イタリーで堂々としてゐることは建築をやる思ひ切つた勇氣である。我々がドイツで現在やはり建築から始めるのは、何もファシズムから見てとつてきたのでなくて、これが我々の確信だからである。民族が、又人が永遠のものとなり得るのは決して日常生活のあれこれの領域での諸改革に於てではなくて、いつでもただこはすことのできぬ石においてのみである。永遠の石を民族全體の紀念碑として國民の眼の前に掲げる才能を持たなければならぬ。イタリーではその通りであつた。

古代ローマ全體を改築し家屋のならびをとゝのへ、そとでは端の方に巨大な大理石のフォーラムを立てた。くらべものゝ無い手固さと長さと幅とそして安定さとを備へた道路を建設した。イタリー民族はかういふ事柄に何等内的な關心を持たぬと想像されるかも知れないし、又貧乏人が「フォールム・ロマーヌムがもはや自分に何の關係があらう」といつてゐると想像されるかも知れぬ。といふのはこの道路の上を疾走するのは、なるほど金持の自動車だけだから——しかしこれはまさに正反對である。イタリー人は誰でも、これが自分のフォーラムであるといふこと、そしてこれは他の全世界が熱病の危機にふるへ上つてゐる時に不滅のイタリーの創造精神が創造した道路であるといふことを確信してゐる。

我々はドイツでもそれをやりとげなければならぬ。石によつて永遠のものにならうとする意志は、もはや個々の人々の特權であつてはならない。この意志は全民族の誇りとならなければならない。全民族がこの意志に充たされてゐなければならない。二千年たつてもなほ、我々の創造と我々の生活との遺跡が、殘存する紀念碑に於て認められなければなら

ない。

イタリーの新聞は新しい法律によつて規定されてゐる。我々も又ドイツで近い將來にドイツの新聞の權利と義務とを一定する必要があらう。イタリーの新聞制度の中には我々に適用のできないものが二、三あるし、又ドイツ民族の特性に合はぬものが澤山ある。しかし或る一つのことだけは確かである。——すなはち我々がドイツの新聞を國家の責任の中に一緒にとり入れなければならぬことである。といふのは新聞を書く權利はお上に對する義務であるから。もし醫者が國家に認可されねばならぬといふことを國家が要求するのなら、それと同樣に國家は又言論人に對しても認可の權利を持つてゐるわけである。——彼等言論人は民族階級全體を毒し又そゝのかすことがあり得る。——これは全く與論の均一化といふ意味であつてはならぬ。しかし一國民の大きな原則的な問題には民族內に一つの意見が支配しなければならぬといふ意味であるべきである。甲が「財產とは盜みである」と

いひ、乙が「財産は高い文化である」といふ、又甲が、宗教はすべての人間的あこがれの實現であると考へ、乙がそれに反して、宗教は民族にとつて阿片であると考へる――そんな事ではいけない。人は甲或は乙どちらかを奉ずる事を公言せねばならぬ。第二義的なことについては、形式の色どりに於て、意見が樣々であつて差つかへないかも知れぬが、しかし、原則はいつでも同一でなければならぬ。原則が同一でない時は國家或は民族に屬する人々は、たとへさうすると甲或は乙の個性に害になる場合でもこの樣な劃一化をやりとげなければならない。我々が國家の先頭に立つのは個性を大切にするためではなく民族の生活權を鬪ひ取るためなのである。

ファシスト・イタリー全體は力と自覺とに、はちきれるほど一杯になつてゐる。イタリーについて驚嘆すべきことは、誰も仕事が濟んだとは考へてゐないことである。いつでもあらたに始められ、いつでも別の側から問題がとらへられ、たえざる經過の中に事物が發

展する。くりかへしくりかへし障害に向つてひるまず進む。民族は自分が實際最上のものであり自分が實際に知識と良心とによつて、統治されてゐるといふ感じを持つてゐる。このことは又この民族の顔からもよみとられる。道のどの人もみなファシスト的理念の看板をかついでゐる人となつた、とまで殆んど言ひたい位である。國境を越えて、最初の國民兵を見るともうこのことに氣がつく。ヨーロッパでこれ程ローマ的な偉大さと力とそして男らしい自覺とをそなへた物を見ることはできない。誰でもみな「私は此のファシスト・イタリーの子供である。私は誇らしいローマ人の子孫である」といふことを自分の態度によつてあらはしてゐる。

私はリットリアを訪問した時このことが一番くつきりと意識に上つた。あの沼澤地域を國民にとりもどすことが終局的に成功するだらうか否かについては今日ではまだ論爭があるかも知れぬ。八萬人をこゝに定住させることが成功するだらうかどうかは全く議題にも上つてゐないが、それは第二次の問題である。こういふことをやる勇氣を持つて居り、こう

いふことを着手するのにためらはぬこと、そこにこそ價値がある。しかし一人の人が平和の眞只中でこんな郡縣を民族にとりもどさうとする決心をすること、そして今やこの征服を全民族の仕事にまでする力を出すことは決定的なことである。すべてのイタリー人にとつてリットリアは寶石箱である。われらの町、われらの郡縣、われらの仕事、ファシズムの仕事である。

諸君はそのことをポンティニアの沼澤地にゐるどの勞働者にも認めるであらう。イタリー人は決して贅澤に暮して居らず、たしかに食道藥の生活は、すべくもないが、しかし、かれらはみんなファシストである、みんなが！　この天才的な創造意志によつて灼熱せられてゐる。たとへ彼等にあつては、その創造意志がほんの素朴に「我々は一郡縣を征服する。二千年間不可能であつたものを我々がもたらしてゐる。我々ファシストたちが、前線からかへつた我々が、我々のムッソリーニがそれをやつてゐる」といひあらはされてゐるにしろ、この國民的信任における資本がいかばかり大きいかといふことは全く測られぬ程

である。まるでファシズムを通じてイタリー國民はデーモンに魅入られた狀態から勤勞にまで充實されたかのように思はれる。すべての物が創造してゐる。すべての物がいそいでゐる。すべての物がテムポと姿勢とを持つてゐる。すべての物が勤勞してゐる。すべての物が勤勞したいと欲してゐる。すべての人々がただ「我々には失ふべき時間がない。我々は怠けることができる程老いてはゐない」とだけしか考へてゐない樣な感じがする。

トラクターは、いはばシムボルである。トラクターが沼地を切り開くのを見る時——上には座席に二人のほとんど眞黑に焦けた若いファシストが機關のうなりにつれて歌つてゐる——驚嘆の感じが人をおそふ。この民族から何が造られたか、そして諸民族は實際的な人々によつて指導されるとき、何を行ふことができるかといふことについての驚嘆である！ 又この國土を縱に橫にはしりぬいてゐる驚嘆すべき道路を驅ける時もこんな感じがある。

なほ又、こんな感じは外國人の訪問者にとつてはファシスト・イタリーの有力な宣傳で

である。壯大な設計。澤山の金がかゝり、大へんな勞力がかゝつた。しかしながらこの設計はイタリー民族の誇りである。諸君はイタリーではもはや疲勞をみない。まるでこの民族はウィルヘルム一世の「我々は疲れるための時間を持たぬ」といふ言葉を格言にえらんだかの樣である。

ムッソリーニは勤勞の時ばかりでなく勤勞の後にも民族のために心をくばる。ファシスト黨は數百萬人の巨大組織を設立した。その組織の中に總括されてゐるのは――民族劇場民族競技、スポーツ、旅行、遠足、唱歌であつて、そのすべてが國家から補助をうけてゐる。ヴェローナでのことであつたが私は廣場で移動劇團があり、舞臺が設けられてゐるのを見た。彼等は芝居を演じてゐた。それから私はテニスコート、蹴球場、病院を見た。又産院や、民族がたのしむ大きな庭園が空想ゆたかに大膽に設計されてあるのを見た。ローマの眞中の一番模範的な社會施設。私は巨大な競技場、フォーラム・ムッソリーニがオペラ・ナチオナーレの若々しい生命に充ちてゐるのをみた。

これが道路からの人にどんなに、はたらきかけるにちがひないであらうか！　彼は決して自分だけでとり殘されることがないであらう。國家はその人を手にとりあげて、その人を指導する。もつとも安い値段で彼は映畫や劇場に行きコンサートにでかけられる。彼は決してひとりぼつちでない。國家は彼にとつては最後に身をよせる所である。彼は國家を決して税金收得者と考へず、自分の逃げ場所、堂々とした性格と巨大な擴がりとをそなへた社會的な作品であると考へる。

その場合、決して生きてゐる者にとつてばかりでなく、來らんとする世代にとつてもそうである。ムッソリーニは子供の友である。ムッソリーニは子澤山の度を高めることのできるあらゆる社會的可能性を造り出す。ムッソリーニは産院を非常に清潔に建築し非常に衛生的に、非常に近代的に設計する。私はファシズムを裁きにかけるすべての國々に於て果してこんなにも社會的な心くばりが命じられてゐるものかどうか知らない。マルキシズムがもし權力をにぎつてゐたとすれば果して同樣なことをなしとげてゐることであらうか

どうかは私には分らない。ともかくドイツでマルキシズムが殘した遺跡はそんなことを示してゐない。ファシズムが金持の事柄であるなどといふのは子供つぽい。

その反對にファシズムは民族の仕事である！　ムッソリーニ自身ほど勞働者及び農民について暖く且心の奥底から語る人間を私は今までに見たことがない。國民の力は廣い民衆のうちに存することを、民衆なくしては政策を行ふことができないことを、統治はただ民族によつてのみ永遠のものとされることを、運命が彼に委ねたものはただこの民衆を形づくり、この民衆を國家政治的に成熟させるといふ大きな課題だけであることを――ムッソリーニは知つてゐる。

去り行く世代のうちファシズムを理解できるのが、まだ小部分にすぎないのは認める。ドイツでもその通りである。この去りゆく世代は靜かに外部に立つてゐるべきである。といふのはその世代は決してこの人生の舞臺に上つて、共演する樣にと運命から招かれてゐるのではないからである。この世代を運命は見物席に坐らせた。しかしながら、來るべき

世代については違ふ。この來るべき世代を、若い國家は決して思ひ切つてはならない。それだからまさに我々國民社會主義者こそは、ムッソリーニが何故青年問題についてヴァティカンと論議しなければならなかつたかを、又何故にムッソリーニがこの點では少しも讓歩をしては、いけなかつたかを、理解できるのである。

ムッソリーニは決して自分の青年を思ひ切ることができなかつた。といふのは青年を思ひ切れば又同時に永遠性をも思ひ切ることになつたであらうから。イタリーの青年は誰でも國家に從つてゐる。イタリーの母親たちが自分の子供を國家の首領に委ねるといふことが一體イタリー國民ほど子供好きな國民にとつて何を意味するか、又そこにどんな信任投票があるか——といふことを最近ベルリンの一新聞が指摘してゐたが正に當つてゐる。諸君がフォーラム・ムッソリーニに入ると、綠の芝地にバリラ青年が體操してゐたり自由練習をやつてゐるのを見ることができるだらう。そして上の方の大理石のベンチには母親達が坐つてゐる。大きな團體である。ラウドスピーカーを通じて號令が傳へられる。どの青年

にも、もはや兩眼から男らしさが輝き出してゐる。かれらの全姿勢の中にもう諸君はこの青年が、いかに規律立てられてゐるかをみるであらう。これはすべて來るべき兵士でありファシズムの兵士である。そしてこの青年には「イタリーは第一流の國民である」といふことが骨の髓まで燒附られてゐる。

ムッソリーニはイタリー民族に信賴を返した。卽ち――我々も又それに屬してゐる！我々は理念のための鬪士である。我々を越えて日程に入ることはできぬ――と。ドゥーチェが嘗て「本と銃」といふ古典的なことばをそれのために刻んだ一青年。この言葉はこの新しい青年のシムボルである。知識と權力。あたまと力。この兩方の完成に於てこそ我々は新しい國家を形態化するであらう。我々はもう十年待たうではないか。その時はその他の物はもう知られぬのだから、その他の物はもう存在じない。その時はすべてはファシスト的である。そしてその時は、はつきりした濃淡をつけ、細別をすることができる。といふのはすべてのものを平均するのでなくて、原則だけを均一化しようとするのが新しい革

命的理念の本質だからである。そしてそれの原則が固ければ固い程、又譲らなければ譲らない程、仕上げは益々寛大となり、愈ゝ力強くなり得るからである。

ファシズムは決して犠牲無しに權力を獲得したのではない。勝利を目指す闘爭に於いてファシスト運動はほとんど五千人もの死者を永眠の床に就かせた。これらの死者達は、今日ではファシスト革命を先導する聯隊である。天才的に設計されたイタリーの革命展覽所を見得るならば、このことを意識するだらう。これはファシズムの誕生の最初の日、すなはち、イタリーの參戰から始まつて、政權ひきつぎの時に到るまでのファシズムの展覽である。この展覽の最後に突然壁紙をぬりつぶした一つの小さな部屋の前に立つ時、上に述べたことは明白になる。側には小さな書棚、その上には今尚牛乳瓶。小さなテーブル、それに埃だらけの電話機と、からのインク壺。その側に二、三の手榴彈。――これこそは「ポポロ・ディタリヤ」社におけるムッソリーニの仕事部屋であつた。

彼が交渉のためのローマ入りを拒んだのはこの電話機を以てしたのであつた。彼が「我等が貴下等に與へるのは内閣ではない。我等が貴下等にあたへるのは政府である」といふ文章を口述したのは、この電話機を通じてであつた。そして諸君は、このみるかげもない部屋から、そとの床の上を見るがよい。そしたら、ファシスト運動の死者の大きな丸い部屋の中をながめるだらう。その部屋の前には一人のファシストの兵士が、ヂッと動かずに付け劍で立つてゐる。そして上の丸天井に、諸君は「プレセンテ、プレセンテ」「(はい、こゝにゐます。はい、こゝにゐます」)といふ言葉を數千回見出すであらう。これは誰かが戰死して、指揮官がその人の名を讀み上げた時に、ファシスト軍團兵の發する呼び聲である。こゝには晝となく夜となく永遠にくりかへされてファシスタ・ジョヴィネツァの誇らしげな若々しい歌が鳴りひびいてゐる。十年間權力をにぎつてゐる一革命運動がこんなにも死者を尊敬してゐるのである。こんなにまでこの革命運動は傳統に根を生やして居り、イタリー國家の偉大な過去の中に組み入れられて居り、しかも大膽に且つ自制して將

來を見詰めるといふ勇氣を決して失つてゐない。この展覽の場內で又してもドイツのことを思ひ出させられる樣な氣がする。

そこでは倒れたファシスト達のきてゐた幾重にも幾重にも血に被はれた黑シャツを見る。そこにはその上で會議最中に一ファシストが、阻擊されたといふ市會議事堂の椅子がある。そこにはムッソリーニの靑年時代の手紙がある。又ムッソリーニを理知が足りぬためにに奬學資金を受けるに適しない者だとする彼の敎師の發表がある。或る橋の一部分をきりとつて來て組み立てゝある。この橋の手すりに一人のファシスト靑年がしがみついてゐたのを人々は奔流に投げ込まうとし、その時彼は手をとりはづされたのでやつぱり死なゝければならなかつた。すべて我々のところと同樣である。效果も又同樣であらう。なるほど我々は我々の政治意志の別な形式を見出すであらうが、しかし道は同じなのである。まるでこの運動が自分のそばに諸黨派の存在をゆるすことができるかの樣に幻想する勿れ。まるでこの運動が他の諸運動と權力を分つであらうとか、又此の運動が全く自分ひとりだけ

で征服した戰利品の分け前に、他の集團があづかることを認めてやることができるであらうとか幻想する勿れ。このことはファシズムの敎へるところであり、又國民社會主義運動の發展が實證するところでもある。

これらの運動はどちらも青年の熱い呼吸に溢れてゐる。この十二年間にイタリーで演じられたもの、それは一つの革命である。そして革命の終りに國家と民族とは革命の始めの時とは様子を異にするのが普通である。

終りに臨んで、もう二つ三つわづかばかりの結論を述べたい。この場合に私は詳しく立ち入つて述べる必要はあるまい。といふのは結果の明瞭さはあまりにもはつきりして明かであるために、その明瞭さについて語ることはそも〳〵全く必要がないから。

ファシズムは我々よりも十年を先んじてゐる。但しファシズムが漸くそれの權力獲得の後になつて始めてやらねばならなかつたことを、我々の方は我々の反抗時代の十二年間に

既にやつてしまつてゐるのだから、この十年先んじられてゐるといふことも絶對的なものではない。しかしファシズムは十年の間、國家の中に入り込んで成長するだけの時間を持つてゐた。これは我々が追ひつかなければならないことである。ファシズムが創造したことが何もかも我々に應用できるといふのではない。しかし創造のなされる精神、すべての物の上に立つ衝動、すべての物を驅り立てる意志、すべての物を動かす原動力――それらが我々と同じなのである。青年をこの國家の指導に當らせることに我々が成功するのは決定的なことである。何となれば老人は恐らく青年にまさつてゐるかも知れないから。――どの點でまさつてゐるのか私には分らないけれど――。しかしいつでも青年の方が正しい。といふのは青年は事柄を、形をかへずに又内的な阻止もなしに眺めるからである。

青年はすべての「然り」と「否」との後に「しかるに」とか「しかも」とかを置かない。青年は「然り」といひ青年は「否」といふ。もし國家が青年に指導されるならば、これは國家にとつて何の害にもなり得ない。ナポレオンは嘗て「私は年若い將軍と、年とつた元

帥とを望む」と言つたことがある。年若い將軍の技術と熟練とにおいて缺ける點を、その時こそまさに年とつた元帥がつけ加へてくれる筈である。しかし青年には國家に精神をあたへ國家に青年の刻印を押しつけるといふ使命がある。我々は更にファシズムから學ばねばならぬことがある。――すなはち革命は妥協を結んではならないといふことである。革命といふものは革命であるか、さもなくば何物でもないかそのいづれかである。革命にはことがら全體をやり、しかもその時決して感傷的な阻止を感じてはならないといふ歷史的な義務がある。革命的發展の進行中には多くの物が排除されねばならぬことは本質的である。もし古い形式が死滅し得ないならば、そこにできる物をも尙打たねばならぬ。といふのは古い形式の下に崩壞せんがために民族が存在するのではなくて、民族に形態をあたへるために形式が存在するのだからである。何の妥協もない！　すなはち權力をすつかり握るか、さもなくば權力を全く握らぬかそのどちらかである。

青年が國家の指導に立つならば、青年は勤勞せねばならぬ。老人以上に勤勞せねばなら

ぬ。青年は決して疲れてはならぬ。そして自分のテムポを國家全體に押しつけなければならぬ。政府では仕事があまりにも、のろ〳〵と行はれるものである。問題を敢て、つかまへなければならぬ。そして又官僚制の限界を飛び越えんとする勇氣を一擧にして持たなければならぬ！　やることは、民族のために、そして民族と共に、やらなければならぬ。そして革命的な聯隊は決して民族に對立してはならない。不人氣なことを民族に向つて明かにすることができぬなどと、わたくしに說く勿れ。たしかにこれはできる。ただ民族と共に語る才能がありさへすればよいのである。民族をわけも分らずに罵倒する人々ほどには、民族は決してわけの分らぬものではない。民族は民族の欲するところを知つて居り、何が可能か、何が不可能かをも知つてゐる。民族に向つてはただ事物に對する內的興味をあたへさへすればよいのである。さうすれば不人氣なことをもそれが民族に必然的なことゝ思はれるとの理由で堪え忍ばうとする勇氣を民族は出すであらう。

意志があるならば、そしてこの意志を民族に吹き込む指導者を持つならば、民族は結局す

べてのことをなし得る。殊にドイツ民族の様な地位にある民族は。我々は過去數年間にもつとも重大な誤りをおかした。といふのは我々が一つの危機を捕へないでいつでも「しかし實に今こそ一番重大な危機である！　百年この方一番重大な危機である」といつてゐたからである。これでは民族には勤勞に向ふ勇氣が、事柄を捕へようとする勇氣が與へられない。民族のすることの多くは結局やつぱりただ歴史的な奇蹟にほかならない。民族に與へなければならぬのは、結局して一つの權威を造り出す様な、或る盲目的な信頼である。この權威は國民的信任の、いふにいはれぬ資本として存在し、それ自身には觸れることのできぬものである。イタリーが自分のドゥーチェに信頼する様にドイツは自分の總統に信頼しなければならぬ。たとへ總統がもしかして間違をやる様な場合でさへ、これは總統の人間としての權利である。他のどんな人にもゆるされる權利である。そんなものは全く議題にさへもならない。議題になるのは一つの國家のうちに、すべての人に知られてゐて國民の大きな信任といふ資本を代表する様な、一つの中心的な權力が存在してゐるかど

うかといふことである。

國民にはただ一つの意志、一つの決斷だけしかあつてはならぬ。そしてこの國民は又一つ、一つの組織によつてだけ動員されるのでなければならない。我等は十年たてば、丁度イタリーが今日本來の民族である樣に、本來のドイツとなるであらう。我々はこの十年間に互に見出し合ふであらうし、又あらゆる困難を片附けるだけの力を恢復するであらう。我々はそれが我々にやれるのだといふ信念さへ持てばよいのである。さうすれば成功もするであらう。我々は今日ドイツにおいて一つの大きな歴史的發展の端緒にゐる。我々自身はその發展の範圍をみわたすことはできない。といふのは我々自身がこの時代の生んだ子であるから。もつとも大きな内外の諸問題が意のまゝにされようとして我々の手にあたへられてゐる。我々はそれらの問題を克服できぬと考へる理由を少しも持たない。我々はただそれらの問題に手をつければよい。それらの問題を意のまゝにすることができるといふ信念を持たねばならぬ。アドルフ・ヒットラーが我々に道を示してくれるのだ！

ベルリン大學總長　ウィリー・ホッペ

獨逸史中に於ける指導者人格について

しば〳〵引用される詩人の言葉に、地上の子らの最高の幸福は、かの人格である、といふ言葉がある。この言葉を最初に語つたゲーテは、他の何人にもまして、彼の時代の制約の中で、この最高の幸福を獲得しようと努力したのであつた。いふまでもなく我々現代人は、彼の人格概念がわれ〳〵の時代に完全なものとして妥當するとは考へない。われ〳〵はゲーテを盲信するものではない。しかしわれ〳〵はワイマールの賢者と共に、人格の中に稀有なもの、誰れにでも共通に賦與されたやうなものでない或るものを見出すのである。

人格とは、個々の人間の價値豐かな中核を形成するものである。それは無造作に誰にでも歸屬するものではない。人格は獲得されるものである。努力によつて獲得されるものである。人格は生の發展の果實である。個々の人間は決してこの果實の成熟の時期を豫見す

ることはできない。何らかの方法で計算することもできない。人格とは形成されるものであるけれども、つねに一つの理想としてとゞまるものである。人格とはつねに新な要請である。勿論人間の中には人格の萠芽は存在する。しかし、この萠芽を發芽させ、發展させることは、人間の自由になし得るところではない。そこには、彼の環境が働きかけ、彼の祖先の古い過去の世界も働きかける。しかし、もしたゞ一つのこと、つまり自己自身の法則に對して忠實であるといふことをはつきり自覺してゐないなら、如何に良い素質を持つてゐても、人格にまで成熟することはできないのである。

生活への勇氣を持ち、自己の持つ一切の素質をあげて世の動きに投じ、しかも人間以外のすべての生物が服從してゐる自然のメカニズムの持つ諸制約を越えて、大膽に自我（イッヒ）を發展させるものだけが、人格を獲得し得る。彼の自我（イッヒ）を昂然と、何ものにも隷屬させることなく守るもののみが人格を獲得し得る。人格的になるといふことは、何よりもまづ自己自身のうちに自由を持つといふことである。卽ち、自己の自我に對して支配權を獲得すると

いふことである。更にまた、外界によつて自己の方向から逸脫せしめられないといふことである。ゲーテは更にその言葉をつゞけて言つてゐる、「人間の生活は、自己自身を見失はないかぎり發展せしめられ得るが、もし自己自身に停滯するならば、現在持てるものを一切失ふであらう」と。しかし同時に、眞に人格的なものは、完結し、充實せる彼の自我を外部の世界と織り合すものである。

はつきりした自覺を以て自身の道を步まねばならない。しかしこの道は決して利己心といふ道ではない。人格の道は決して自己滿足のなかに迷ひ込むのではない。眞の人格は協同體に結びついてゐる。人格はその獨自性を把持しつゝ、全體に對して自己を打ち開くものである。人格の擔ひ手は所謂慣習の束縛を受けてゐない。斯かる人間は所謂世俗的人間、平俗な社會的人間、社會、即ち周圍の世界の單なる一成員に對して千倍もすぐれてゐる。

人格と世界事象—所謂歴史とが關聯をもつてゐるといふことは、自明的なことではないだらうか。然らば「才能とは何であるか」。それは「子供の玩具」であると曾つて詩人は語つた。「資質、それは誰でも持つてゐることではないか」。しかし偉大なる出來事はすべて人格に依存せるものである。人格のみが、行爲人を擔ひ得る。然しながら行爲人のみが歴史上の偉大な鬪爭を決定する英雄である。行爲人、指導者は絶對に敎說の瘦地や、黨派爭ひや、姑息な獨斷の低地からは生れるものではない。指導者人格は他の人間の人格よりもはるかにつよく、自己自身の法則に從ひ、時代の風雪に耐えて形成されるのである。指導者たるといふことは、自己の法則を時代に向つて口授することである。

指導者を持たない時代は譬へて言ふならば史上の砂漠である。われ〳〵はかゝる砂漠を知つてゐる。われ〳〵はすべて共に何年もの間かゝる砂漠をさまよつた。從つて指導者のしつかりした手によつて手綱が握られるに至つた時代は、それだけ一層輝かしいものとして現はれた。

民族の車は怒濤の如く息をもつかせぬ力を以て時代を疾驅し拔けた。この車輪に打敷かれて諸黨派はその最後の呻きを發し、敵對する妨害者達は車輪の轍の塵埃のなかに、粉碎されてしまつた。時には、道は非常に狹く、人は車に不安を感ぜねばならぬこともある。しかし、眞の指導者はかゝる困難を排して、一つの前提の下にその民族を導いて行く。即ち民族といふ車は頑丈に組立てられてゐる、それを曳く馬達はどんな僅かな合圖にも直ちに應じ得る、といふ前提の下に。

ところで、一體指導者の人格は、實際歷史の進行に對してそれ程決定的力を持つものであらうか、といふ疑問が起る。しかし、こゝには一つのかすかな聲がもれ聞えてゐる。それはやがて、個々の個人は歷史の過程に對して何の意味もない、或は大した意味を持たないといふ大きな合唱にまで成長する。歷史は大衆の運動であるといふのである。かゝる理論を說敎したのは集合主義(コレクテイヴイスムス)と實證主義であつた。また倦まざる社會學的考察も大衆を前景に押し立てることに與つて力があつた。大衆の前に於ては個人は、それがどれほど强大な

人格であらうとも、言はゞ消滅してしまふ。

ひとは特にマルクス主義者は、個人人格の自由を否定しようとした。それによれば個人は社會といふ車輪に組みこまれた獨立せざる一部分、一片の物質にすぎず、とにかく一應獨自の小車輪であるが、それらすべてがまた大きな機械に從屬してゐるものであると言はれる。かゝる教説によれば、地球上に生起したところのものはすべてつねに大衆の表現せるものであつた。一時代の根柢的見解がかゝる理論から生れ、それは民族の經濟機構を變革した。そしてその要求——本質的には物質的な——が戰爭を勃發させたり、平和の時代を繁榮させたりした。

最後に、歴史の榮枯盛衰は、自然を支配せる法則と同じ紐帶で結ばれた。歴史的生活の合法則的過程——かゝる中に於て、個人の活動が何の意味を持ち得ようか。個人は拘束されてわけの判らない或る物、常に彼を粉碎し得る恐ろしい運命に、引き渡された。

われ〳〵の時代は、大衆の意義を充分自覺しない最後の時代であらう。自己のうちと、自己の背後に、褐色の何百萬の軍隊を持たない國家とは一體何であらうか。當時、羅馬への行進を起し、伊太利のファシスト國家を創造したのは大衆ではなかつた。かゝる大衆は、無組織の遲鈍なものではなかつた。それは無數の個々の個人から成つてゐた。勿論それらすべてがわれ〳〵の意味に於ける人格ではなかつた。その或るものは鈍重で無自覺であり、自己の目的をはつきり意識してゐなかつた。

しかし、一方他の者には新しき建設に協力せんとする强大な意志が煮えたぎつてゐた。しかし大衆の力は、たゞ個々の指導的人格によつてのみ活動的となり、統一されて來たのである。大衆はつねに素材であり、指導者たる個人がそれに形式を附與するのだ。大衆は多數の部分を持つことによつて、非常に優れた價値を持ち得るかも知れない。しかし、それだけでは多くのことは成し遂げられない。偉大な生の覺醒者が現はれざる限り、大衆は、その成員が善くても惡くても、創造力を持ち得ないのである。

指導者は、毎日或はいつの時代にも地球上に現はれるといふわけにはいかない。われわれが承認し、われ〳〵が頌讃する勝利の時期は、運命がかゝる指導者の力を未知の遠方から呼び寄せる時期である。指導者が直に自己の任務を理解し得る時代は幸である。時代が未だ指導者の偉大さを受容するまで熟してゐなかつたために、如何に多くの指導者が蹉跌したことか。時代は自己のなかに救世者が住へることを理解しなかつた。時代は彼を十字架上につるすことはしなかつたにしても、彼を嘲笑し、或は否定した。ところで、こゝに歴史的過程に對する大衆の意義が存するのである。大衆を持たない指導者は、その事業を完成し得ないであらう。建築材料を持たない眞の建築家は存在しない。また、兵士を持たない將軍がどこに存在しようか。

指導者と大衆は引き離すことのできない關聯を持つ。それは兩者とも自己自身のみでは價値がない。兩者はそれ〴〵力及び素材として歷史に於て協同する。兩者は共同して民族の昂揚時代を指導するし、また共同して國家を崩壞せしめもする。何故なら――これは殆

んど説明を要しないが――神の手は指導者の人格を單に創造者としてのみならず、破壞者としても使用するものであるからだ。しかし眞の指導者は常に破壞に建設が續かねばならぬといふことを自覺せる者のみである。指導者に把握された大衆は、破壞のためのハムマーたるのみならず、指導者にとつて平和的建設のための道具ともなる。最初は振りかざさねばならなかつた劍から、指導者は、種を蒔くために豐饒な大地を鋤き起すところの犂頭を鍛造せなければならなくなるであらう。

獨逸民族のために生れて來た偉大な指導者人格に於て、獨逸民族の生成を一度詳細に描くことは、大きな政治的教育的課題をなすであらう。何故なら、歴史はかゝる指導者の人格の中に自己を反映せしめるものであるから。全時代の光が指導者に於て、恰も焦點に於ける如く、集約される。今は、過去二千年の間から最も重要な人物を二、三選び、それから指導者人格のタイプを展開し、同時に獨逸歴史が偉大な個人によつて形成された事情を指示することで充分であらう。

われ〳〵はどこまでも、今私が言つた如きことによつて大衆の意義を考へる。しかし、こゝでは、指導者の人格を浮彫にしなければならない。獨逸民族の行手を曾つて照した炬火に再び火を點じなければならない。何故なら、現代人の課題は過去の闇黑に探求の手を差しのべたり、過ぎ去り消滅し去つた時代の骨董屋をほじくりかへすことではないから。次に歴史とは、私見によれば、それが生命たるかぎり、撫育されねばならぬものである。それから現代の意識の中に完全にその生命全體が覺醒せしめられねばならぬものであり、滲透して行かねばならぬものである。

指導者の人格は、一切の地上のものと同じく、それ自身の時代を持つものである。私はすでに、指導者の人格も自己に適した環境を見出さざるときには萎縮し得るし、萎縮せざるを得ないといふことを示唆しておいた。一時代が倦怠を來したとき、一時代が衰頽に向つたとき、民族がグニャ〳〵とへたばりこんだとき、そして乾燥した田畑が雨に渇する如

く民族が新しい力を渇望したとき、そのときには何よりも先づ指導者人格が生誕するであらう。しかしまた外國の暴力が平和な民族の上に加へられ、その生活の調和を攪亂し、民族を外國の旗幟――政治的、經濟的、または觀念的な――の下に拉し去らんとするときにも指導者の人格は生誕するであらう。救濟的指導者が出現するのは常に困難の時代、過渡的時代、運命的時代、運命の轉換期である。

われ〳〵の目を惹く最初の指導者は、かの困難な時代に、困窮と壓迫との時代に生れてゐる。彼の紀念碑はデトモルトの高地から獨逸の國土を俯瞰してゐる。彼の名は、獨逸名ではたしかな呼名がなく、羅馬風にアルミニウスと呼ばれてゐるが、恐らく彼はエルミオと呼ばれたのであらう。後代は彼を解放者ヘルマンとして讃嘆してゐる。彼の英雄的姿はゲルマニヤ人の詩歌の中に取り入れられてゐる。巨人ジークフリードの姿の中に、このケルスケル族の王の若干の特質が恐らくそのまゝ見られるであらう。われ〳〵は彼をローマに對する偉大な敵對者として知つてゐる。卽ち一方に世界國家たる羅馬がある。その權力

手段は無制限であり、その軍隊の進擊は全世界を威壓し、ゲルマニヤの丸太道路にも、ゲルマニヤに通ずる羅馬人のすばらしい大道にも威をふるつた。

そして、他方にはアルミニウスがゐた。彼についてわれ〱は、先史的探求がゲルマニヤ人の文化程度に關する概念を與へてくれるまでずつと態皮を着た野蠻人と教へられてゐたが、決してさうではない。しかし僅か五千乃至八千のケルスケル人の頭に立つてゐた一君王が、敢へて羅馬と力を競ふといふやうなことは可能であつたであらうか。しかし彼は事實に於て一個の指導者たることを示した。彼の燃える如き精神は——と羅馬人は言つてゐる——彼の眼光、とそのまなざしから閃いてゐた。この精神が人をして磐石の如きローマ國家に對する攻擊を敢行せしめたのである。この一人の男がトイトブルグの森の戰鬪に於て、全世界に跨る羅馬に對し力强い打擊を與へたといふことを學校で教へてゐる。しかしわれ〱はこの事實を、伊太利のファシズムが古代羅馬に對すると同樣の誇りを以て、民族の意識の中に定着せしめねばならぬであらう。羅馬はこれによつてラインの背後に退却

したのである。
しかしこれは、彼が自己の民族のためになしとげた唯一の偉大な業績ではない。彼がゲルマニヤ種族の一部を、暫時にせよ併合したことも、これに劣らないもう一つの偉大な業績であつた。彼は大衆を組織し、それを道具として使用した。かゝる軍事的、政治的成果のほかに、一層大きな、しかし餘りにも、僅かしか注意されてない一つの成果がある。即ちアルミニウスは自ら伊太利に於て、羅馬の甘美な毒物を知悉してゐた。しかし彼の兄弟、彼の外舅は、この毒の犠牲となり、羅馬側についてしまつた。アルミニウスは彼の偉大な行爲によつて、ゲルマニアの大部分を自己の民族性と祖父傳來の神聖な習俗とに對する神聖な信仰のなかにしつかりとつなぎとめた。民族の獨自性は、西部及び南部の、羅馬に占領された地方ではしばしば外國文化に壓倒されてゐたが、こゝではその獨自性が維持された。以前と同樣にドナルはその槌を獨逸の原野に打ち振ひ、羅馬の僧侶によつて古代獨逸の習俗が驅逐されてしまふことはなかつた。逞しい力がかくして喚起され、アルミニ

ウスの業績は何百年に渉つてずつと影響を及ぼしてゐる。

これは、勿論、すべてのゲルマニア族に於てさうであつたのではない。彼等はあたかも将棋の駒の如く、民族移動の時代に、ヨーロッパの天地をあちこちと押し流されて行つた。そこには何の統一も、何の團結も存在しなかつた。彼等がドイツの大地を後にして去つた限り、その民族性は救ひ難いまでに、頽廢するまゝに委棄された。しかしその場合にも彼等に指導者が缺けてゐたのではなかつた。獨逸の英雄傳説に於ける東ゴートのテオドリッヒやベルンのディートリッヒの名は遠く知れ渡つてゐる。彼が、羅馬國家と獨逸民族性とを結合せんとしたとき、蹉跌せざるを得なかつた。民族の生活に於て、民族の生存といふ自己の生活法則を持つ不思議な樹木よりも、より丁重に保護さるべきものは何ものも存在しない。

それから數百年の後、もう一人の指導者たるザクセン族のヴィドゥキントがやはりこれで

蹉跌した。彼のまはりには、その敵對者たるフランク王カールと同樣に、種々なる傳說や寓話がところ繁くまとひついてゐる。彼は今日に至るまでヴェーゼル地方に於て、アルミニウスと共に、古代獨逸の英雄の一人として生き續けてゐる。彼はザクセン族の力を糾合してフランクの支配及びキリスト敎に抗し、自由のために、父祖傳來の神々の信仰のために戰つた男であることはすでに知られてゐた。彼は抵抗の靈であつたが、遂に困憊の極仆れてしまつた。しかし彼の傳說が存する唯一の地方たるフランク地方に對して、われ〳〵は信を置くことができなくなつたのだから、われ〳〵の長い歷史の流れの中で、ザクセン族のこの指導者は一層大きな意義を帶びて來る。

何故なら、血と土地とのために鬪ひ、外國支配に對して獨特の鬪爭を展開した人間の正しさを、フランク地方の人々が認める筈はないのだから。われ〳〵はヴィドゥキントに於て民族理念の戰士を見る、われ〳〵の中古史に於ける自由のための偉大な英雄をそこに見る。彼の沒落と共に廣いザクセンの國へ、羅馬敎會が、そしてそれを通じてキリスト敎が

怒濤の如く侵入して來た。それと共に純粹な形に於ける北歐的世界觀は終末を告げた。尤も、それは所謂迷信の中にひそやかな生存を續け、現代に至つて再び明るみに出て來たのであるが。

ヴィドゥキントの行動力は百年以上の後世にも尙影響を持ちつづけた。卽ち、ヴィドゥキントと協力して活動した貴族達の後裔たる二人のザクセン人は、獨逸民族の個人の支族を統一し、それによつて新しいドイツ帝國を生誕せしめた。これでザクセン族の行動力と强靱性は、歷史によつて實證されたのである。

われ〳〵の歷史に於てハインリッヒ一世とオットー一世を、十世紀の轉換期が生んだ指導者人格として特質づけるものは何であるか。ハインリッヒ一世の統治は、勿論なほ若干の不確實な點を示してゐる。しかし一つ、目的のはつきりした東方政策が判明してゐる。最後にこの獨逸の支配者は、スラヴ民族に對し、一再ならず拳を振り上げてゐる。低地

の河川地方からホルスタインに至るまでのスラヴ人はハインリッヒに隷屬せしめられた。スラヴ族の中心たるブランデンブルクにまでザクセン人は進撃した。獨逸の眼は、ハインリッヒ、及び、更に一層その息子によつてエルベ河の向ふにまで導かれて行つた。エルベ河の高い岸邊にある宮殿から、河流を越えて遠くスラヴ人の國を俯瞰せるマグデブルクで、オットーはその青少年時代を過した。後になつて、彼はこゝに、使節や文化を東方に送り出すべき中心を作つた。スラヴ國やポーランド地方の大部分の僧領の創設はこゝから發源してゐる。

彼ははつきりした自覺を以て、政治的にも、教會的にも、これらの地方をドイツに結びつけんとした。だがかゝる東方政策の目的は如何に遠大なところに置かれてゐたことだらう。そしてもしオットーがこの披示された道をずつと前進してゐたならば、如何にすばらしいことが達成されたことであらう。もし國土がエルベ河の向ふにも保持されたとすれば、ドイツ史は全然違つた相貌を呈したことであらう。オットーは恐らくかくの如き仕方

その東方政策を法王の干渉から守るために、とり合へず羅馬的伊太利的の計畫を追求しなければならなかつたであらう。それは成功しなかつた。しかしそれがどうあらうとも、それで後代の行動に對する根據が設定されたのである。

單に道を淸める者にすぎないといふことは、指導者人格の運命なのかも知れない。新しい黎明が明け放れんとする時代には、他の人格が新らしくその旗幟を戰場に進めて來る。そしてその旗幟に始めて勝利は書き込まれる。これはヨハネの時以來常にさうであつた。

かゝる黎明の時代が約二百年後に始まつた。それは二人の人物によつて特徴づけられる。ロタール皇帝及びハインリッヒ獅子皇帝がそれである。歷史敍述はロタールを正當に取扱つて居らず、ハインリッヒ獅子皇帝を、その競爭者フリードリッヒ・バルバロッサに對して、しばしば低く評價してゐる。だが歷史は、ドイツ民族を更新し、東方への道をきつぱり指示したところのロタール及びハインリッヒに花環を捧げてもよい。

ロタールは彼に後のどの獨逸王にもまして東方植民の思想を促進した。ザクセン公國の根據から――彼は國王になつてもその根據を拋棄しなかつた――彼は東方及び東南地方をも政治的に支配した。人は彼に就て、他の如何なる獨逸王にもまして、ポーランドの貢物を完全に入手したものと言つてゐる。當時、ボヘミヤもハンガリーも、獨逸領主の力強い手を再び感ずるに至つた。アスカニア人はロタールによつてブランデンブルク地方に定着せしめられた。後方に於て、彼は低地エルベの右岸地方のシャウエンブルク伯を獨逸の埠頭たるポレスタン地方へ追ひ出した。

彼はまたポメラニヤ地方の教會の大事業に保護を與へた。彼の奬勵策を信じて、獨逸商人は北方の國々へ、バルト海諸地方を結合せるゴートランドへと移住した。ロタールの出現は餘りにも時期が遲すぎた――これもまた指導者の悲劇かも知れない――といふ失望、及び彼以後自力を以て東方へ進出した獨逸王は一人もなかつたといふ悲嘆は、それほど大したものではない。それ以後、わが民族の歴史は、如何に異つた、如何に多幸な道をたど

つたことであらう。

この時代に生起した事件はすべて——そしてそれは何と言つても非常に多かつた——獨逸の公國から發源した。こゝでは第一にハインリッヒ獅子皇帝がある。その人物も業績も、ロタールよりよく知られてゐる。「完全圓滿な風采」を持ち、堂々たる威風を備へてゐた。彼は自己の標識として獅子を選んだのは誠に當を得たものであつた。この獅子は今日も尙ブラウンシュヴァイクのダンクヴァルデローデ城の前にある。

彼は彼の從兄弟で、後に彼に敵對したフリードリッヒ・バルバロッサやロタールの如き皇帝ではなかつた。しかしやはり一個の指導者であつた。彼の力は、ライン、ウェストファーレン地方からオーデル河に至る間及び海からハルツ地方に至る間にまで及び、それに依つて彼は確乎たる地歩を持つてゐた。だから、確信と、心憎いまでの大膽と冷靜とを以て、獨逸史上の僅かの人物のみが取上げた問題に取組んで行つたのである。政治的に混亂せる帝國は、彼にとつて無關心なものとなり、終に彼は意識的にそれから離叛して行つ

た。彼の眼は北方、東北方、及び東方に向けられてゐた。

彼がこゝで征服や植民に於て、都市制度の促進に於て――例へばリュベック――なしとげたところのものは、偉大な國民的業績である。彼の事業は國民的なものとして考へられはしなかつた。公國自身の力は自己を越えて擴大されねばならない。しかしまた指導者の仕事は、時代や計畫を越えた規模を取得するといふことも、しば〳〵指導者の運命に屬することである。ハインリッヒ獅子皇帝は死滅しなければならなかつたし、彼の權力は、たしかに帝國のためによくなかつたので粉碎された。しかしそれにも拘はらず彼の業績は殘り、その結果はシレジヤ及びプロシヤにまで擴大された。伊太利の暖い土地に於て、シュタウフェン王朝のカイゼルの政治はより光輝燦然たるものであつたであらう。しかし嚴厲な北方の國でハインリッヒが創造したものは、より長く、より深い影響を與へつゝ後世にまで殘つた。それに就いて二、三言費すならば、その中心をハインリッヒが守つたところの、東方植民地の最重要の都市リュベックは、帝國が崩壞に瀕した頃、獨逸ハンザ同盟の

首位についた。

われ〳〵は以前の時代に於けるよりも、ロタールやハインリッヒの時代に於て、指導者の掌中にあるかの素材をも一層はつきりと認識することができる。それは騎士、農民、手工業者及び僧侶として、東方へ移住したところの、無數の多くは無名の人達のことである。彼等の仕事の遺物は決して消滅し去る如きものではない。それは正しい指導者が正しい援助者を見出したことの徵標である。彼等の遺物は廣大な、現今開墾されてゐる地方である。それは立派な軍事基地の創設であり、望樓、本丸、銃眼(ツインネンクランツ)つきの尖塔を持つた城塞である。それは東方の重々しい嚴肅と、ゴシック風の窓拱彫刻の輕快さとを持つた僧院及び敎會である。それは堂々たる破風と法廷の柱廊を持つた議事堂である。ドイツ人の手による立派な工作物は、ポーランドやロシヤにまで達してゐる。無數の人々がそれに從事したのである。だがその目的は少數の指導者人格によつて與へられたのだ。

それ以後何百年間かは指導者に於て豐穰であつたとはいへない。この時代が特殊性を持ち、矛盾に滿ち、支離滅裂であつた理由の一つぱたしかにこゝにある。すべての諸勢力が互に軋轢してゐた――公國は貴族と、貴族は都市と、都市はまた公國と、公國は農民と、ツンフトは都市貴族と、等々。かゝる重苦しい雰圍氣の中へ、フス教の教會理論がボヘミヤから轟き渡つて來た。耳を聾するばかりの喧騷のうちに、十五世紀の終りには、ニコラスハウゼンの風笛師の口から、社會革命の方法が告げ知られた。そしてそれと同時にオスマン軍の軍樂が帝國(ライヒ)の西南玄關をノックし始めた。

外交方面にも、內治方面にも、當時獨逸國民にとつて指導者は生れなかつた。ただ宗教界に於てのみ一人の男が打開の道を開かうとした。卽ち、ルーテル！である。各人は宗派の上で彼に對してどんな關係に立つてゐようとも、とにかく彼は稀有の指導者であつた。

それはハインリッヒ獅子皇帝のそれが原始的諸制約を打越えたと同樣に、彼の行爲が教

會的制約を打越えて成長したことのなかに示されてゐる。何故なら、彼の行爲によつて獨逸民族は、「いはば一擧に西洋の精神的優勢にまで」高められたのだから。眞の指導者は早急にその仕事に突進するものではない。恐らく最初は、公衆の雰圍氣の中に入つて行くことに對する畏怖が、彼を妨げたであらう。しかし遂に突如として、恐らく神の召喚と確約とが彼の耳に響いたことであらう。ルーテルは先づ根源的自己のもの、自己の內的なものを賭けた。彼は自己自身と困難な戰ひを戰ひ拔かねばならなかつた。この戰ひは、起つて仕事を引受けるまでに、如何なる指導者にも避けることのできないものであり、そしてそれは既に活動に入つてゐるときにもなされねばならない戰ひである。

自己の存在の最內奧の核心からルーテルは改革にとりかゝつた。この改革は革命となり、ルーテルが根絕すべきものと考へる事物に對する峰起にまで發展した。偉大な改革者はすべて革命家でなければならない。革命家ルーテルは、長い世紀の勞作になる敎會の機構の一切を破壞し去らうとしたのではない。眞の指導者は、自己の後に民族の廢墟が殘

つてはならないといふことをあまりにもよく知つてゐる。彼の歩武は勿論破壊をするが、そこからはまた新しい生命が芽生える。眞の指導者は、古いものもそれが使用され得る限り、新らしきものと有機的に結合せんとする責任を自覺してゐる。

その際、彼は偉大な建設を妨げる一切のものを容捨なき尖鋭さを以て排除する。然り、事情によつては殘忍な程酷烈にそれらを防ぐ。不滿屋、熱狂屋、すべての指導者をけなす永遠の知つたか振り屋がそれである。これらはまたルーテルの仕事をも破壊しようとした。だがルーテルは實際に於て、民族の意識の中に入つて行く指導者の幸福を享受することができた。彼のしつかりした人と爲り、彼の民族的外貌、彼の話し振り――そして彼は自ら言つた如く、好んで民衆の口もとを見た――は大衆の心を摑んだ。勿論同時に彼の心の內奥は唯選ばれた少數者によつてのみ理解されるにすぎないといふ指導者の運命もそれと結びついてゐた。偉大なる指導者は、大衆が如何に彼のまはりに歡呼の聲をあげようとも結局彼自身の道を孤獨に歩みつづけるのである。――

ルーテルの死後はプロテスタントの方には新らしい指導者は生れなかつたし、ツォレルン王家の教會政策の領域には、指導者は所詮生れはしなかつた。次の時代には身分の高い人格が現はれた。それはゲルマニャ的血緣のスウェーデン人グスターフ・アドルフに至るまで唯一のものであり、數百年後に指導者としてドイツ史の流れを新らしい軌道に導くために召されたものである。それは、卽ち大選擧公とフリードリッヒ大王である。彼等兩人とも「大」といふ尊稱を同時代人から貰つたのは偶然ではない。民族の本能は例の如くこゝでも正當に發言したのである。

確固たる締め金が兩人の本質を結んでゐる。卽ち、彼等にとつては「指導する」ことは同時に「奉仕」することである。フリードリッヒはこれを「朕は國家の最高の從者である」といふ確固不動の言葉で表白した。これはかのプロシャ指導者精神及びかの非常に誹謗された自主性の持つ最深の意味である。それは、「朕は國家である」と考へたフランス

王ルイ十四世の主權とは何等共通するものを持つてゐない。それはまた、現在ソヴェート・ロシヤに於て荒れ狂つてゐる如きマルクス主義的狂熱的支配者心理とも何等共通するところを持たない。指導者もまた國法に從ふ。それは大衆と共に運命協同體をなし、大衆なしには、指導者は自己の課題を達成することはできない。七年戰爭はかゝる關聯なしには考へられない。

兩ツォレルンは次の點で一致した。卽ち、一切の指導者體系がそれに基いて建てられるところの思想は、權力の思想であるといふことである。しかし權力は彼等自身のためや、單なる自己のためのものではなく――これが指導者を專制君主から區別する――全體のためのものである。それは常に國家全體のためにあり、個人の幸福のためではない。何故なら、幸福は、外的にも內的にも强固な國家によつてのみ保證されるのだから。國家のためには、人は一切を敢行しなければならない。

大選擧公は小さなブランデンブルク國から出發して、大ヨーロッパの政治にまで突き進

んで行つた。彼の軍隊は如何に小さく、彼の物資は如何に乏しかつたことだらう。しかし彼は敢へて進み、民族の內部で尊敬され、獨逸・ヨーロッパの未來の形成に對する協力者となる。フリードリッヒがオーストリヤに對して開戰したとき、その力は一體どれほどであつたか。しかし今も尙この打擊は天晴れ見事なものであつた。敵に對するフリードリッヒのやり方は、また指導者の使用するやり方の一つである。

しかし彼は、ただ確固たる立脚地からのみ果敢に行動し得た。それはわれ〳〵がルーテルに於て見た如き、神々の密接な結合の立場であるかも知れない。これは大選擧公に獨特のものであつた。全く神祕な宗敎的確信を以て、彼は自己の課題の偉大さを信じた。或は――しかしこれは稀なことだが――指導者はその敢行力を自己安心から汲み出し得る。そしてこれは哲學的思索によつて與へられる。運命はフリードリッヒ大王にかゝる支柱を與へた。

フリードリッヒ・ヴィルヘルム及びフリードリッヒは、それぞれ自己の內奥から義務と

いふ指導者思想を抽出した。そしてこれがまたその巨人的仕事を保證した。フリードリッヒの日々の仕事は、朝早くから夜遲くまで規則づけられてゐた。そのために平安な閑暇の時間も少しも變へられなかつた。「名譽を以て世界を支配せんとする君主は」と彼の父は彼を叱責して言つた。「自分のことはすべて自分でしなければならぬ。君主は仕事をするために選ばれたのであり、腐敗した婦女的生活をするためではない。愛する神が汝を王座に据えたのは、怠惰に暮すためではなく、仕事するためであり、國をよく統治するためである」と。

大選擧公フリードリッヒ・ウィルヘルムは、三十年戰爭の恐るべき道義的頽廢を知つてから、かゝる義務概念に特に深く注意を拂つた。かゝる義務は、常にさうであるべきだが——上から下に注がれる。それは、衰退した次の時代も全く破壞しつくすことのできなかつたところの偉大な抵抗力を、プロシヤ國家に與へたのである。

この兩人に於ては、透徹した洞見が冷靜な義務の觀念と結合されてゐる。フリードリッヒは政治的理論の研鑽を閑暇に於ける仕事にしようとした。自己の仕事部屋で役人と共にゐるとき、戰場で兵士と共にゐるとき、彼は政治的並びに軍事的實踐家であつた。そしてこれは、同じ程度ではないが、大選擧公もさうであつた。常に自己を新らしく形成するのは實踐である。實踐は、最初はかの人達の精神の中に於ける理念としてのみ生きてゐたのだが、やがてかゝる充實した偉大な人格からたえず新らしく生誕して來た。これは慈愛深い運命がその敎へ子、——卽ち、これが指導者である——の素質の中に入れてある無盡藏の富の表現である。

運命は彼等に對して犧牲を強いることを惜しみはしないが、やはり運命は慈愛深いのだ。一體犧牲なくして偉大なものが生長したためしがあらうか。フリードリッヒ・ヴィルヘルムは重苦しい家族的惱みを堪え忍び、フリードリッヒはその偉大をかちとるためには全青年期を費やした。人間認識もまた指導者の負ふ犧牲の一つである。誰が指導者の如

く、人間をその偉大さと、その卑小さとに於て知り得るか。フリードリッヒは無益に人間輕蔑家となつたのではない――。

兩人の仕事は當人達よりも長く生き、更に生長して行つた。何故なら、眞に偉大な仕事はその創造者と共に終るものではない。フリードリッヒ・ウィルヘルムの息子は――その他の點では父親に似てゐないが――その國を王國の列に入れることに成功した。フリードリッヒの國家はナポレオンの攻撃の下に崩壞した。しかしシュタイン及びハルデンブルクによる再建の活動は、どのやうな變化を受けたにしても、不易のフリードリッヒ的プロシヤ的義務の精神からなされたのである。こゝでもまたかの深遠な聖書の言葉が妥當する。曰く、「而して彼等の仕事は彼等の後に隨い行く」。

この言葉は更にもう一人の指導者人格を呼び出させる。國家の組織のために、われ〳〵ドイツ人に與へられたところの、人物の大きさから言へば殆んど唯一の人、卽ち、ビスマルクがそれである。

一定の事情に於ては、指導者の不可缺の條件となるところの、かの偉大な頑迷がビスマルクを特徴づける。彼によればプロシヤは、一切のものがそれを中心にして廻轉してゐるところの極であつた。彼が爾餘の諸國家を服從させようとしたところの法則であつた。またプロシヤは、その下に、彼が靜寂なシューンハウゼンに於てかゝる頑固さの正しさを認識してゐた。若い時代に既に、彼は靜寂なシェーンハウゼンに於てかゝる頑固さの正しさを認識してゐた。このシェーンハウゼンで彼は、堤防工事監督官として、プロシヤの意志によりエルベ河の水に戰を挑んでゐたのである。彼は自己のプロシヤに對するかゝる信念を決して失ひはしなかつた。彼が獨逸國家に乘るために、それに鞍を置いたときにも、この信念を把持してゐた。

ビスマルクは、この正しくも頑迷な道によつて、偉大な指導者人格の意志の持つ德性を證明した。「彼は若き領主として、經營の指導に於ては、一切が統一的意志にかゝつてゐることを既に認識してゐた」と正しくも人は言つてゐる。彼は後になつてそのことをまた

實證した。曾て大選擧公は、プロシヤの諸身分團が國の統治に干渉しようとしたときに、彼等を二頭立にして驅り立てたことがあつた。同様にビスマルクは、議會や出版物が政府を監督しようとしたり、統治に參與しようとしたときには、顧慮することなき輕蔑を以てそれらに制限を加へた。

彼はかゝる强力政治に對して責任をとることを拒否した。しかし彼は、自己の課題に對して眞劍に立向ふものがすべてさうである如く、神に對して責任を感じた。こゝでもまたわれ〳〵は、指導者の心靈の中に響き始める、かの美しい宗教的調べを聞く。

更にかゝる鬪士は、如何にそれが反對に聞えやうとも、死ぬ程平和を愛したのである。彼は鬪爭が一切の事物の父であることを知つてゐた。しかし國家は外的及び內的戰ひの渦卷く埃の中に於ては長く生存し得ないといふ、かのしば〳〵輕蔑される智慧もまた彼の耳に囁きかける。彼の政治は獨逸及びヨーロッパを大きく震撼させた。しかしその後、彼は平和を維持したのである。恰も、曾てフリードリッヒ大王がシレジア戰爭の後、植民活動

の輝やかしい成功を國に齎らした如く。

我々は更にこれ以上一聯の指導者人格を跡づけることができるだらうか。そしてさうしても差支ないであらうか。

勿論、我々は、將軍や大統領から、現在我々が服從し、よつて立つところの現代の指導者に至るまで跡づけ得るであらう。しかしかゝる獨特の人物の本質を充分洞察したと誰が言ひ得ようか。こゝでは畏敬がふさはしい。生存者に對しては、歷史は沈默しなければならない。しかし吾人が、吾人の歷史に於ける偉大な人格の姿の生誕を見たときに、しばしば指導者の像が眼前に燦然と輝きはしなかつただらうか。

伊太利の指導者（ドウチエ）は曾て言つた。「自己を尊敬する民族は決して歷史を忘却することはできないし、また忘却してはならない。そしてまた明日の歷史は今日の生活によつて形成されることを忘れてはならない」と。しかし、今日の歷史はその一切の本質的な點に於て我々の指導者に根ざしてゐる。我々は彼の信仰書の中から彼の世界觀の原則として次のこと

を知る。

即ち、若き獨逸に於ては民族的價値要求を充す個人と、創造力を持つ者とに高い意義が與へられるといふことを。問題は多數者や單なる大衆ではない。英國を曾て偉大ならしめた人クロムウェルの言葉は言ふ。「民族とは、そこですべての者が平等である如き協同體ではなく、各自が適所に位置せる如き協同體である」と。だから、すべての個人が指導者たらんとしてはならない。しかし、次の如く言ふのは正しい。

即ち、國家は上部に對しては責任をとり、下部に對しては確實に命令しつゝ、「明日の歷史」を築くべき指導者の職務を、廣狹とりぐの領域に於て、遂行するところの人格を生長せしめるといふことより、一層高い如何なる課題をも持ち得ないと言ふこと。何故なら、もう一度强調して言ふならば、指導者のなすべきことは大衆のところへ降りて行くことではなく、最初はただ少數の者しか知らないところの純粹な軌道に、彼等大衆の意慾を導いて行くことであるから。

かゝる人格は卽座に育成され得ないといふこと、特に、國民社會主義國家が要求する如き指導者の選拔はさうだといふことをわれ〳〵はよく知つてゐる。しかし、やがてその時機は熟するであらう！　そして歴史の力強い太陽も、この種子に對してその光線を效果的に注ぐであらう。現代及び過去の偉大な人格を模範として、遂に、新しい、歡喜する、解放する生命が燃え上るであらう！

退役陸軍中將　ホルスト・フォン・メッチュ

クラウゼウィッツの現代的解釋

或人がロンドン非干渉會議フランス派遣團長に對し、今日吾々がスペインに於て經驗してゐるこの事件が若し一九一四年前のことだつたら、夙くの昔に一大戰爭になつてゐるところだらうと云つたところ、そのフランス人は「その當時は戰爭とはどんなことだか知りませんでしたよ」と答へたものである。

だがそれも古來最大の戰爭哲學者たるカール・クラウゼウィッツを、今日云はれてゐるが如く、絕對的總力戰の豫言者と認めてゐたならば、容易に知り得たことであらう。大國民の軍人や學者なら、大抵彼のことは知つてゐたらう。また彼の名著『戰爭論』は前大戰中イギリスに於て最も多く讀まれた書物の中の一であつた。ドイツの參謀本部もこの大思想家に薰陶を受けたのであつた。然し國民全體の共同財產としてこの大思想家の貴重な思想財產からは殆ど何等學ぶところがなかつたと云つてよい。一般大衆はその名前程には彼の

ことは知つてはゐなかつた。

とは云へ私はいまこゝにこの偉大な精神的遺産をわづかな枚數の中に剩すところなく叙述しようなどといふ大それた考へは毛頭ない。と云つて今更あの浩瀚な難解な書物を一言一句研究しなさいとはおすゝめも致しかねる。蓋し同書は既に百有餘年前に書かれたものであり、その間多少時代遲れになつたやうな思想もなくはないからである。例へばこの戰爭哲學者の考へ方でも當時の稍々原始的な兵器技術に直接結びついてゐるものの如きは、すべて現代的なものとは云へない。吾々はさうしたものは全然差措いてかゝらなければならない。また國民を武人的道德に教育するには國民に戰爭そのもの、乃至は「戰爭に慣れること」が必要であるといふ見解の如きも現代的はない。然しながら其の後には依然として時代とは無關係の超時代的な一聯の多くの思想がのこされてゐるのである。私はさうしたものに連がりをつけ、簡單なものの中から最も簡單なもののみを摘記して行きたい。何となれば、吾々にして知識が民族意識となることを欲するならば、——しかもこのことは國

防政策上の領野からしても欲せざるを得ない――極く簡單な知識だけしか取扱ひ得ないからである。

戰爭技術乃至國防政策がそのものとして簡單なものであるとは、誰あつて云ひ得るところではないだらう。クラウゼウィッツも敵地に至るまでの軍の構成が如何に複雜なるものであるかを繰り返し指摘してゐる。然しながら彼は之に附言して、國防活動はいかにも多種多樣なるものであるが、結局わづかの大きな結論に歸着するものであると云つてゐる。かうした判斷から發して、彼は知識の簡單化のために盡すところがあつた。簡單化は平板化ではない。むしろクラウゼウィッツの謂はんとするところは、國防のことを教へるからには、國防學上の細目や軍事科學上の片言隻句を詰込んだり、見せびらかせたりすべきものではないが、さうかと云つてまた啓蒙を要する國民に原始的な方法によつて――卽ち合言葉などで教へることにのみ限るべきでないといふにある。

簡單な知識とはこの二つの兩極間の中間にあるのであつて、それは軍事專門家と徒に用

もないことに鏑を削り渡りあふやうなことなく、重要でないことと重要なこととを區別し、非現代的のことと現代的のこととを篩ひ分け、國防政策上の總決算から最後に得られた若干の大きな結論から、本能的な部分を攝取し得たところのものを云ふのである。

クラウゼウィッツは知識の單純化のために盡したばかりではない。彼は國家の單純化といふことのためにも代辯した。吾々は今日この單純化された國家を有つてゐる。さういふ眼で見ると、吾々はクラウゼウィッツを以て第三帝國のために闘つた先驅者と看做さざるを得ない。だがそれはたゞ彼が當時よりドイツが依然ヨーロッパの中央に位するといふ難局にあつて、國家の內容は統一的に指導されざる限り、到底庶幾の抵抗力をもち得るに至らないことを熟知してゐたまでのことなのであつた。

然しながら、この指導者國家は決して天惠ではなく、義務なのであつた。かうした國民の政治的生活形態には、たゞ國家機關と一人の天才的指導者とを必要とするだけで、單に唯

々諸々としてこれに從ふといふ部下の者があるだけでは駄目である。いや、それにはどうしても理解ある部下の者を切に必要とする。何となれば、クラウゼウィッツの說くが如き國民全體の力が物を云ふといふやうな全國民の協心戮力を招致し得るものは、理解ある部下を措いて外にないからである。然るに國民の協力は精神的心理的な統一のある基礎から出發しなければならない。其の上になほこの協力は、玆に云ふところの國民性、卽ちドイツ國民の樣式に適應したものでなければならない。

クラウゼウィッツは、吾々が我國の歷史からのみならず、自己の苦い經驗から知り得たところのわが國民性の弱點を知つてゐた。例へばクラウゼウィッツの云ふところによれば、吾々には個人主義的に獨立獨行しようとする傾向があるが、これこそわが國民性の一特徵であるといふのである。然るに吾々の國家の現狀は、あらゆる國防上の勢力を一つに集中することを要求してゐるのである。このことからしてクラウゼウィッツは軍事敎育といふものが國民性にも、環境にも適應したものでなければならぬとの結論を下してゐる。ドイツ聯邦

は種々雑多な形態の國家の寄木細工として、かうした國民性から生れ來つたものである。そればかりか、共和制といふのは——クラウゼウィッツの要求するやうな大きな指導目標を共感するに止るといふのではなく、たゞ批判的論議を助長し、政治を共にせんとする疾病を助長するものであるから、ドイツの國民性には最も合はぬものであるといふのである。而してこの大思想家の說によれば、この指導目標は實に雄大な、從つてまた崇高なものでなければならない。誰か今日この目標がないと云ひ得るものがあらう！

更にまた吾々はクラウゼウィッツの遺産の中から學ぶことは、ドイツ國民の統一を得るには力による以外にないといふことである。ドイツの歴史は其の間、この武士的哲學者の見解の正しかつたことをはつきりと實證した。吾々はクラウゼウィッツのかうした考へ方が鐵血宰相ビスマルクを始めとし、幾多ドイツの偉傑の見解と一致してゐることを知つてゐる。

だがまた何としても數の上では常に劣勢であるといふのが吾々の國狀の悲劇的特徴であるといふことも、クラウゼウィッツの認むるところであつた。從つて彼の理論には理論的支

柱を要すること最も大なる弱者のことが常に念頭から去らないのである。だが吾々の周圍の國の數的優勢に對し之を償ひ得るものとして吾々には內的價値の優勢より外にないところからして、彼はこの內的價値を高めるには、數を生かす精神によるより外にないこと、また國際的鬪爭の中にあつては結局精神が常に決定的のものであることを吾々に想起させてくれるのである。

之に就いては過去の歷史、殊に最近の過去の歷史は吾々に幾多の歷とした證據を供してくれた。一九三三年の政權獲得まで國防政治上ドイツ人は一人として枕を高くして眠ることが出來ないやうな狀態にあつたことは、何人も否定し得まい。吾々の周圍の軍事的、數量的、國防技術的優勢は甚大なるものであつて、數量的にも機械的にも物質的にも吾々を屈壓させることは易々たるものであつた。ところがそれが何故さうならなかつたか。それはたゞ全く吾々の周圍の國々の軍事的機關が獨活の大木にすぎず、彼等に氣魄と精神と深遠なる使命といふものがなかつたからであつて、これなくしては高度の裝備をした吾隣邦

諸國民と雖もドイツに對し、物質的勝利はおろか、精神的・心理的勝利も、將また創造的勝利も贏ち得るといふ信念は得られるものではないのである。然るに彼等にはさうした閃きが一向になかつたのである。

一九一八年に於ても相手國側の獲ち得たものは物質的な數の上での勝利にすぎなかつた。さうした理由のみからでも、敵國側、敵國側同盟はこの「勝利」から何等の創造的價値をも獲ち得ることは出來なかつたのである。精神的・心理的にも甦生奮起させる力を與へてこそ眞の勝利と云へるものであるから、この勝利の如きは云ふに足りぬものなのである。然るにこの勝利は事實吾々にかゝる力を喚起せず、敗北を起させたものであつた。されば、クラウゼウィッツの說くが如きあらゆる英雄主義、あらゆる英雄心にもかゝはらず、健全な現實的考へからして吾々が吾國の國防政治的觀點から云つて將來に對しても失敗の可能性を引出してゐるのは止むを得ないことである。それは何も悲觀主義ではなくまた恐怖心からでもない。それはまた現實に於て吾々を抑へつけ得るやうなものなのではない。

却つてその反對なのである。即ち大戰爭にあつては何處か機械的失敗は免れ難いものであるが、かゝる失敗にも屈せず、むしろ場合によつては、易々樂々と獲ち得た勝利より以上にかゝる失敗こそ創造力の湧き出るやうな努力を掬み取るべき源泉となるものなのである。

ドイツにはかうした國民全體にとつて都合のよかつた戰勝の歷史がある。それには一八六六年及び一八七〇―七一年といふ年號を想起させるだけでよい。それらの戰爭は國防教育上にはドイツ國民を緊張させると云ふよりは、却つて弛緩させる結果になつた。之に反し一九一八年は窮局するところ國民社會主義運動となり國民社會主義國家となつて實を結び、將來とも充分に吾々の勢力伸張を期待し得べき力を吾々に齎したものである。それ故今日に至るも相變らず一九一八年の敗因は吾々に肉類がなかつたからであると振れて云つて廻るのは、クラウゼウィッツの思想を履き違へたものであつて、舊弊に復歸するといふものである。

吾々は道德的頽廢乃至は英雄的精神の缺如のために崩壞したのである。それは嘗て吾々の前にクラウゼウィッツが說いた精神とはおよそ反對のものであつて、この精神たるや何も一九一八年に始まつたことではなく、其の以前の時代のものを誤まらした末、遂に影をひそめてしまつたものなのである。吾々は大體國際間の鬪爭の如き大現象が物質的・技術的・機械的な個々の手段によつて決せられ得るものとは到底考へることは出來ない。國際間の鬪爭に於て最後の決を下すものは、むしろあらゆる能力の總計、あらゆる部分的力の總計と、何よりも心理的・精神的力の總計である。さればクラウゼウィッツは「專門的特別分析」に墮してしまふことを戒めてゐるのである。

彼は何處までも「全體的現象」に依るべきことをすゝめ、また「精神をつくるものは精神なり」と云つてゐる。卽ち本當の精神のみが國家の干城となり得るものなのである。これこそ、大民族間のあらゆる鬪爭が從來とは全く趣を異にし、心理的精神的方面により布陣するに至つた現代の一つの特徵である。如何なる軍事的事件が現在スペインをめぐつて

行はれてゐるかといふやうなことは大したことではない。むしろスペインが積極的思想と消極的思想の大戰場と化してゐること、そして事態の發展によつては、この二十年來云はば號令の下るのを待つばかりになつてゐた陸軍や、海軍や、空軍などの力よりもこれらの思想の方が遙かに強大な原動力となるといふことの方が重大な問題なのである。

一つの使命から生れ、一つの使命を生み出すところの氣魄なく、身命をかけて行ふに足る英雄的な精神なくしては、軍事的機關といふものは無意味である。

軍事的準備といふものも、クラウゼウィッツが要求するが如き精神的・心理的覺悟の後楯がなければ無に等しい。例へば國民の間に消費訓練がなければ、國防軍の軍事的訓練も不充分たるを免れない。國民大衆の間に同じ氣魄が出來てゐなければ、いかに大軍を擁するも大したことはない。法令の力が國內勢力を基礎とせず、即ちクラウゼウィッツの力說する「道德的主勢力」が通用せず、機械的な魂のない暴力(テロル)が威を擅まゝにするときは、法律も

屁つたくれもあつたものでない。

最近の過去及び現代にもその例に事缺かない。本政治大學の教授制度は出來る限り吾々の周圍に起りつゝある出來事と接觸を保つて行ふことになつてゐるので、差當りエチオピア戰爭當時大英帝國が大艦隊に警戒體制を整へ、之を地中海に集結したことを擧げよう。當時ローマが憂色に滿ちたことは勿論である。然しながらそれもこの海軍の威嚇手段の背後にイギリス國民に戰爭の用意がないことが充分に分らない前までのことであつた。當時千人のイギリス人に一々訊して見たら、こんなエチオピア戰爭などで、結果がどうなるか分りもしない大戰爭をするのは烏滸の沙汰だといふ答へを千人が千人から得ただらう。

わが總統が果敢な三月決行の最後の斷を下した當時も、これと全く同じやうな現象が起つたものである。最後の決斷は周知の如く、ラインランド進駐と全國的徵兵制度を實施してから後に、二ケ年間の徵兵勤務を實施したことであつた。今日、後になつてこそ國境外

で何もしまいといふことが分つてゐたからやつて退けたのだと、冗談ごなしに同胞にいふことが出來るものの、その當時は戰々競々たるものであつた。然しながら當時これらのことが決行されたため、フランスは向背の世戸際に立たされ、フランス當局は對獨軍事對策がないものかどうか頗る眞劍に考慮してゐたといふことは紛れもない事實である。

たゞ注意すべきことは、これらの措置は指導的政治家の意圖に反し、軍部の責任者の提案によつて葬られてしまつたことである。フランダン、サローの如き人々は對獨軍事行動に贊成だつた。だがフランス參謀總長ガムラン將軍の如きお歷々が之に反對だつたのである。このことから吾々の學び得ることは、既に百三十年前にクラウゼウィッツが知り且つ言つてゐたやうに、國民全體がその人的、物的、觀念的な力をあげて團結し、擧國一致の政治の大目標に夫々關心をもち、そのために起つに至つて始めて決定的な武裝的決斷を下し得るものであるといふことである。ところがこの感情がガムラン將軍にはなかつたやうなのである。純軍事的に云つて、わが十九ケ大隊ばかりの軍隊の象徵的占領に對し、ライン

責任の衝にあつたこの武人は賢明にして餘りにも慮りが深く、遂に不合理な軍事的實驗をなすに至らなかつた。軍事的戰爭の時はこの時失し去つてしまつたのである。潜在的戰爭は今日軍事上、經濟上、乃至はまた世界觀の上でも行はれてゐるが、それには個別的な力が何等かの形で何處までも夫々關係してゐる民族と民族との間の闘爭である。かうした理由から國防政治は兵事ではなく、兵事こそ老幼男弱を問はず、地位、職業の如何を問はず、國民の事なのである。これがクラウゼウィッツの所謂普遍性である。これが彼の謂ふ全體性に於る絶對的戰爭なるものの形態である。

さてクラウゼウィッツが吾々に說くが如く、戰爭といふものが平時の決算、就中戰爭に先行せる社會的狀態、卽ち社會狀勢の決算だといふことになれば、國防の總體を賭ふことは吾が國防政治上の義務であり、必勝を期する總力戰の絶對的形態はこの義務から生じ得るのである。

それにしてもこの理論に就いて忘るべからざることは、武力的對決といふことになれば、戰爭遂行の最も重要な道具たる兵力が試金石であるといふことである。然し兵力、卽ち軍事的戰線といふものは、前提たる國防政治の幾多の大きな合成力の一つにすぎない。國防の底邊、卽ち勞働戰線と文化戰線とは、クラウゼウィッツの指摘せる他の二大合成力である。然しながらこの哲學者の說によれば、武力による決定といふものが何處までも戰爭の最高の法則であり、從つて平時に於ても武力の養成は最高の國防政治上の任務である。吾々が國防軍のために盡すことは、取りも直さず吾々が國民のために盡すことであり、吾々が國民のために盡すことは、また國防軍のために盡すこととなる。兩者の相互作用は頗る大きく、兵力を養ふ國防上の底邊の上に立つてゐない兵力、卽ち單なる軍事的戰線は陸に上つた魚の運命となるは必定である。卽ちこの國防力の後楯ともいふべき全體としての國民にしろ、もし軍事的戰線の守備を輙去しなければならぬといふことになれば、國防軍の活動權や社會的權力はおろか、國民の必要とする生活條件すら失ふことになるのである。

卽ち知る。國防に利用される部分的力は悉く何等かの形で相契合してゐるものなのである。また之はクラウゼウィッツが縷々反復して吾々に說明したことであるが、個別的な力は、それが人的なると、物的なると、觀念的なるとを問はず、勝負の決を下し得べき筋合のものではないのである。部分的決戰や個別的戰果は一部の賦拂ひ勘定以上のものではない。最後の結果、卽ち戰後に來るべき平和の總決算が戰爭の價値を決するのであつて、而もこれは政治的な最後の結果でなければならない。つまり軍事的價値だけでは充分ではないのである。「俺達一人でやつて見せる」とは健氣にも方々で盛んに使はれる美しい言葉だが、國防政治上決して通用し得る言葉ではない。現在ではもはや十中八九通用しない。吾々は總がかりになつてかゝらなければ出來るものではないのである。吾々は皆一つ船に乘つてゐるのであり、皆運命を同じうしてゐるものであり、互に鎬を削つて相爭ふべきものではなく、國防政治上の一致協力となさなければならぬものだといふことを想起して、さうしてこそ始めて吾々は國防政治上正道にあるのであり、さうしてこそ始めて吾々

はクラウゼウィッツと一致を見たことになるのであり、そして今日この一致を見出すことこそ私の庶幾するところなのである。

さてクラウゼウィッツは吾々に一つの戰爭理論を與へてくれた。或は某々國民を怖れしむるに足る一つの戰爭哲學を與へてくれたとも云へよう。吾々は兎角「灰色」といふ附加言を「理論」に結びつけ、世間とは縁の遠いものとなつてゐる觀念を哲學に結びつけ易い。クラウゼウィッツに於てはそれがさうでないことは、彼が理論といふものを以て純然たる算盤玉を取扱つて事足れりとするならば、それこそ情けないことだ、また秤にかけて測られないことが始まるところに哲學が終るとするならば、それこそ慘めなことだと云つてゐるところから見ても分るだらう。

哲學は事實を歪曲するものに非ず、事實の間を縫つて行くものである。それは肉感的罪障を負ひ、乃至は天使のやうに翼の生へた人間との接觸といふものを決して度外視するものではないのである。それならばこそ哲學がよく將卒を率ひて、彈丸硝烟の中に、劍の下

を潜り、戰場まで行き得るのである。それは何も將士の手をとつてよち〱原則論を教へんがためではなく、かゝる原則論からして自由な決斷を創造せんがために外ならない。原則論といふもの、哲學の命題といふものは、戰爭にあつては大して重要なことではないといふのがクラウゼウィッツの説である。たゞ夫々の場合々々についてその必要に應じて之を實現化することがすべてである。彼はこの行動哲學の代表者である。それは重箱の隅をつゝくやうな穿鑿や屁理屈を事とするものではなく、それ故にまた哲學と經驗とは抵觸すべからざるものであるといふ主義の代表者である。さればまたクラウゼウィッツは戰爭理論といふものは由來いつも最も大膽なることのみを要求し得るも、何も精神的飛躍を阻害する要はなく、むしろ勇士に大いに精神的力を附與し得るものであるとも敎へてゐる。「最も大膽なるもの必ずしも最も賢明なるものたることを要しないが」、――と彼は云つてゐる――「しかし未だ嘗て大膽なところのない偉大な司令官といふものは絶無だつた。」また「最大の大膽は最も深遠な知慧たり得る」と。勇氣は決斷力を生かすが、恐怖は、之を鈍

くするものである。

然しながら、精神的心理的勢力に就ては吾々は感情的なことと理性的なこととを嚴に區別しなければならない。それこそクラウゼウィッツのやうに截然と區別しなければならない。彼は吾々に色々な對照を示してゐるが、そのすべての對照に於て冷靜な理性、冷徹な頭腦と熱情との二つの要因の中、いつも彼はこの熱情の方が何處までもやはり重要なものであるとの結論に達してゐる。慧知のない大膽といふものは徒に空を切るやうなものである。だが大膽なところのない慧知といふものは柄のない刀に同じである。さうかと云つて理性的なこと、教育といふことも、國防政治上決して輕視して貰ひ度くはない。それは何もクラウゼウィッツが學者の將校を要求したといふのではない。

彼の說によれば、學者の將校からは未だ嘗て偉大な司令官といふものは生れたことはなかつた。だがまた司令官の重職にあつて教養のない指導者といふものも同樣歷史上餘り發

見することは出來なかつた。いふまでもなくこの教養といふのは、精神的教養と心情的教養、知識と性格、學校で習つた机上論と實世間に於ける處世論とより得た其の間の綜合論(シンテーゼ)といふ意である。かうした觀點から云つて、例へばブリュッヘルの如き、誰あつて教養のない者だつたと云ひ得やう。彼が屢〻複雜な關係を公式化するに用ゐた古典的に單純な、素晴らしい方法は、指導者にあつては結局感情的要素がやはり絶大な原動力でなけばならないことを示してゐる。かのコルシカの巨人が再擧を圖つて最後の百日天下を得たるも、ウォーターローに於て一敗地に塗れたとき、ブリュッヘルは「ナポレオンといふ奴はやつぱり馬鹿だよ」と云つた。この冒險家の敗軍の將の核心はこの言葉によく盡されてゐた。

勿論今日の「大ドゥーデン」によれば難點はあるかも知れないが、この前進將軍は別にもう一つちやんとした文字で次のやうに書いてゐる。「私の血の最後の一滴、私の身體の最後の組織も祖國に屬するものである。」かう云つたことが心血を以て書かれるときにはいかなる正字法によつて書かれやうと一向差支ない。指導者といふものはかうした精神か

ら生れて來なければならない。吾々は教養といふ概念はやはりこの精神から解するもので、學問的教養にも國防政治上の順位が要るものであり、また教養の缺如は時にはまた國防の缺陷でもあり得ることなのであることを忘れてはならない。

教養は武器である。教育の向上は最も鋭利な武器である。そして大軍の組織的・武器技術上の様相が益々類似したものになればなる程、クラウゼウィッツによれば、將校團の精神的優越乃至は司令官の才能が益々決定的なものになるといふのである。精神はどうも益々自由奔放な行動の樂園から追放されるばかりである。然しながらこの地上の生存競爭に於て、武器を以て闘爭が行はるべきところに於ては精神は最も缺くべからざるものである。されば吾々はクラウゼウィッツに於て、およそ機械的なこと、純軍事専門的なこととは遠ざかつた、それ故にまた今日吾々が認めて超時代的價値となすものを有する考へ方に逢着する。だが繰返して云ふが、その考へ方は今日現在のドイツ人を中心に、また現在つくられつゝあるドイツ國家の狀態を中心に集まらんとしてゐるものであつて、今日この國狀はク

ラウゼウィッツ時代よりも危殆に瀕してゐるものと考へざるを得ない。
後のビスマルクもさうであつたが、彼は本能的にかうした衝動から全然引放すことの出來ない勢力が外部からわがドイツの地に浸入しつゝあることを、正確に感知した。然るにその中に、今日わが國の東部國境及び東南國境に圍繞してゐる東歐及び東南歐といふものがドイツに對抗して出來上つたのである。そこで問題は、反獨國家としてつくられたこれらの諸國の亂立をドイツに有利に轉換することである。クラウゼウィッツが小國亂立の弊を論じて、結局他のより強大な國家の緩衝地帶になるにすぎないと云つてゐるのは、まさに二十世紀の急所を衝いたものである。この一世紀前の思想と、今日ボールドヴィンの云つた「吾々の國境はラインにある」といふ言葉とを比較されたい。乃至はまたフランス及びソヴェート・ロシアの航空母艦としてのチェコ・スロヴァキアとでもよい。さすればクラウゼウィッツこそ、ヴェルサイユの愚行を正眞正銘に見ることを敎へてくれた豫言者と云はれよう。

國家の生命圈といふものは、政治的境界や、地域的境界からばかりではなく、經濟的にも文化的にも解すべきである。吾々が國防政策上行ふあらゆることに對し吾々に方向を附與すべきドイツの使命といふ感情もこの三つの要素から生れて來るものである。既に一再ならず、總統はこの圈内に於て出來るだけ武器を用ゐざる覺悟なることを聲明した。また一再ならず、自分たちを維持する以外の國防政治的任務を有せざる旨聲明してゐる。十四年の間に於て相手國側はドイツが心から緊張緩和を求めたるに對し、相變らずドイツ側に應ずる用意のない證據を益々見せるに至り、玆に彼等が詐つてドイツの軍備擴張と誣ひてゐたこと――だが決して軍備補充とは云はなかつた――が始めて着手されたのである。

ドイツでは彈藥筒一つ、新に教育された兵士一人、新造された加農砲一門、新鑄された砲臺一門、國境外に於て世界大戰終末後各地に於て一層規模に行はれ來つたことに對する反響でないものは、ないのである。さればこの點に於ても吾々はドイツの軍備はいづれも

常に何等か守勢的思想に支配され、それ自體決して侵略的に國境外を狙つてゐるものではなく、むしろドイツ國民の維持保全のために設けられたものであり、一切の平和に對する保證でこそあれ、決して何人に對する脅威を意味するものでないといふクラウゼウィッツの說と一致するのである。

さら前のことではないが、總統が或る質問者に對して、如何に些細なことであれ、如何なる勞働に對しても魂を吹き込むことこそ、彼の第一の社會的任務の一つであると答へたことがある。これこそ正しくクラウゼウィッツと古典的に一致することである！ といふのは、クラウゼウィッツは其著「戰爭論」の中で、魂のない軍備は無用の軍備であると書いてゐるからである。

このクラウゼウィッツの思想がいかに現代的に即したものであるかは、ソヴェートの巨大な例の教ふるところである。ソヴェートの軍備實體は多くの點で注目すべきものであり、

無分別に輕々しく馬鹿に出來ないし、また馬鹿にすべからざるものあり、よく勘考してからなければならないことは云ふまでもない。然しながら、この尨大な軍事的機關の中に、これこそロシヤの國家、國土及び國民に對する未來を意味するものなりと期待し得るやうな精神を注入することは、今日までまだ成功するに至つてない。恥も外聞もない暴力團的な似而非精神は英雄的精神の代りになるものではない。似而非精神は、桎梏を與へることは出來るかも知れないが、また絶大な價値を傷け、絶大な價値の損失を來すことがある。だがそれには何處までも創造的な點は見られない。

ソヴェート軍はヨーロッパの人質といふことは出來やう。だが吾々がソヴェート軍の間に若干の原始的な英雄主義を想像するときでも、ソヴェートの使命そのもの役立つ更生力あるものとは考へられない。吾々の育成してゐる英雄主義は、クラウゼウィッツによれば、何としても合理的基礎のあるものでなければならない。それは決して陶醉であつてはならない。「理性から發した英雄主義」といふ言葉は事實クラウゼウィッツの造語であるが、多

くの國民には一寸解し難い言葉であるかも知れない。

然しながらこのジンテーゼこそ吾々の必要とするものなのである。それは何人と雖も長い長期戰の期間中には、成功の見込みもなく、犠牲を利用し得る見透しなくとも、たゞ單純にさうするより外に仕様がないといふ理由からのみで以て、英雄心を働かさざるを得ないことがなきにしもあらずだからである。そこで結局はどうしてもやはり合理的理由から行動することになる。だが武士の禮節といふものは、完全な配備より以外にないといふ見識と云はんよりはむしろい義務である。服從心、即ち精神力といふものは、全體の必然性に賢明に順應することと同じく重要なことである。然しながらクラウゼウィッツが大膽な行動に對する前提條件として、彼の敎へ見たる皇太子に示した光榮ある沒落てふ觀念は、結局のところ、戰爭に於ては大なる危險なくしては大なる成功はないといふ理性的熟慮の結果生れたものである。それは經驗とは緣のない哲學ではなく、哲學的創造的經驗といふべきものである。

かくして吾々は、伸びんがためには自分自身にのみ忠實であればよいといふ高邁なドイツ的人間の先驅者としてクラウゼウィッツを見るのである。たしかにクラウゼウィッツは、前述の如く、わが國民性の弱點を吾々が兎角陷り勝ちなやうな見損ひはしなかつた。だが吾々とても、この國民性が正しく理解され、正しく用ゐられるには、確信を以て將來を眺め、自分自身を信ずべきあらゆる資格を之によつて得らるべきものであるとの結論に達し得て、差支ない筈である。

前大戰に於てドイツ兵は世界最善の兵士を供給したものである。將來の戰爭に於てもドイツ國民は最善の兵士を供給するであらう。このことについては吾々は何等疑はない。とれには或る程度の自信がある。尤も弱年のもの共には間々自己の能力を先走つたやうなことをするものがあるかも知れない。然しながら吾々年長者はさうだからと云つて青年を叱責してはならない。却つて反對に吾々は、軍隊生活に於ては自信が既に仕事の成績の半ば

をなすものであり、――クラウゼウィッツの云ふが如く――大膽はさなきだに責任の增大と共に減つて行くのが常であるといふ見解に與せざるを得ない。だがかういつた確信を以て吾々が二ケ年の教育を受けた同期生が二十組になるまでは、荏苒日を過すわけには行かない。吾々は吾々の能力に相應した國防政治上の仕事を自力で作り出す限り、周圍の國々の數の上での優越には驚かされず、實質的に自分たちの方が優れてゐると感じ得るだけの價値の上の優越を絕對に贏ち得る自信を心に抱かなければならない。

それにしてもクラウゼウィッツはやはり「何よりも決定的な點に於て、常に優勢である」ことを要求してゐる。そのことから吾々に國防軍增大のために人口增加をはかる義務が生じて來るのである。勿論これは無意味な數の上の增加のみを云ふのではない。「何百萬のものは種の增加に骨を折つてゐるが、人類の向上は極く少數のものによつて成る」とはシルレルの有名な言葉である。だがこれで以て人口減少のカーブが國防力減退を意味することの反駁にはならない。いづれにせよ、生理的狀態によつてわが國防政治的狀勢を測定す

ると共に、よき人口政策なるものはやはりよき國防政治に屬すものなることを忘れずにゐてこそ、吾々はクラウゼウィッツの遺鉢を繼ぐものである。

クラウゼウィッツこそ、今日吾々の必要するドイツ的なるもののために闘つた先驅者である。クラウゼウィッツこそ、今日吾々が有する如きドイツ國家の豫言者であり、またクラウゼウィッツこそ、陶醉に溺れる如きことなく、充分に現實的感覺を兼ね有し、逼迫した將來の狀勢に意氣阻喪するやうなことのない英雄的精神の代表者である。

然るに今日この偉大な國家は吾々に概して「時代は諸君のものである。今後時代が如何になり行くかは、一つに諸君の双肩にかゝつてゐる」とも云つて呼びかけてゐる。卽ち、遠い時代に對して何等の慰めのないことは、吾々にとつてわがドイツの使命實現のために有效なる一つの處方箋である。國民同胞はそれよりもむしろわが國防力の增强に資すべき國防政治的活動に何處まで吾々が善處し得るかといふことを各自今日でも調べて見なければ

ばならない。さればグラウゼウィッツの著『戰爭論』の主要價値は、今日目前に展示されてゐる戰爭の描寫そのものにあるといふよりは、どちらかと云へばむしろ國防政治上の平和要求にあるのであつて、これこそ吾々が今日この戰爭理論から演繹すべきことなのである。

この戰爭理論は、平和が續けば續く程、吾々の戰爭能力も益々增大するといふ結論に吾々をもつて行くに違ひない。總力戰の萬端の準備、殘酷な暴力のこの本然的勃發に關する啓發された想像力といふものが、國民の中に本當に浸潤して行けば、同時に戰爭廻避の最善の手段となるものであるから、クラウゼウィッツの思想的遺產は平和のために貢献するものとされるに違ひない。

いかなる軍事的機關、いかなる戰時經濟上の力も悉く破壞され得るも、長期の執拗な平時活動の中に心理的・精神的に鞏化された國民の態度といふものはさうは行かない。即ちかうした國民の態度には、軍事的及び經濟的武裝同樣あらゆる國防政治上の活動が行はれなければならない。吾々の必要とするのは先入觀ではなく、準備された人間である。さう

してこそ始めて吾々は意氣軒昂な必勝の見透の方が國民の士氣を阻喪さすやうなことのある戰爭の印象よりも強くなければならぬといふクラウゼウィッツのテーゼを正しく評價したことになる。さうしてこそ始めて吾々は、わづかに表面的に支へられてゐた平和の維持が驚天動地の突發事件のために犧牲になつてしまふといふやうな危險——これはクラウゼウィッツが特に注意したことである——に陷らずに濟む。かうした奇襲は一九一八年には何百萬といふ大多數の者には現在あつたことなのである。

理性的なドイツ人の誰一人欲しないところであるが、將來戰には何百萬といふより準備され、啓蒙され、それ故にまた抵抗力ある多數の人間を見出すに違ない。戰爭には服從が何よりも至上のことであると、クラウゼウィッツが云つてゐるのは尤もなことである。確かに國防力にあつては規律は何故にといふ質問に對する回答によつて左右され得るものではない。だが國防軍以外にあつては、國民の埒内に於て、國防政治上の平和啓蒙宣傳は戰時に於て何故といふやうな質問が成可く提出されないやうに手配しておかねばならない。無

理解は何處までも反抗である。欲せざるところだが、歡迎せざることなのである。

ドイツ人が喜んでついて來るには、それだけの感動がなければならないといふのは事實尤もなことである。從つてクラウゼウィッツが國家といふものは未だ嘗て合理的理由によつてのみ指導されたことはないと云ふとき、尤も千萬いふより外はない。吾々は之に附言して、國防政治的領域に於てはドイツはその尤なるものであると云ふことが出來やう。然しながら、わが國民の大多數のものが身を挺して事に當らんがためには、同時に、そのことを理解してゐることを欲する。そしてこの事實を自覺させるためには、クラウゼウィッツは現代打つてつけの人物である。吾々が今日のわが總統を理解するにはこの大思想家を俟つまでもないことである。だがアドルフ・ヒットラーのことはカール・クラウゼウィッツによつて成程と分る點が多々あるのであらう。然しながらそれだからと云つてナチス運動及びその國家が眞に新味を創造的に示した名譽が失はれるといふやうな言をなすのは當つてはゐまい。吾々は第三帝國によつて再びドイツの使命の歴史的軌道に立ちかへつたといふこ

とをこの確證の中に認めて、益々感謝の念を深くするものである。クラウゼウィッツは孤立したプロシヤといふものに對して餘り理解をもつてゐなかつたが、この今日のドイツ人にはオーストリーが同じくドイツの國土內にあつて一つの外國となつてゐるのは我慢のならぬことなのである。旣にフィヒテも「ドイツ統一のための暴君」を叫んだが、今日のわが總統は恰度この使命を受けたものと身を以て任じてゐるのである。

クラウゼウィッツが當時外國人の口に le plus allemand des allemands（ドイツ人中のドイツ人）と呼ばれた如く、アドルフ・ヒットラーは今日の世界にドイツ國の權化とされてゐる。クラウゼウィッツは當時のドイツには弘流してゐなかつた非常に緊張した國民的名譽感をもつてゐたが、アドルフ・ヒットラーはこの名譽感の外に更に國家の一つの社會的な緊張緩和をつくり出した。これは以前のドイツ國家の未だ嘗て知らなかつたところのものである。

かうした相似はクラウゼウィッツの著書の一行々々の間のみを見てもあることと云へやう。「巨匠は巨匠のために書く」と云はれてゐるが、まことに至言である。彼は吾々に參考書や、受賣り教科書や、劣等生用の虎の卷のやうなものは一冊も書きのこさなかつた。それ故クラウゼウィッツも引用だけは盛んにされる。引用といふものは常に最も安價な、だがまた最も窮したる立證に用ゐられるものでもある。それだけに彼はまた益々研究されることが少くなつてゐる。詳細な註釋書といふもの却々厄介千萬なものである。彼自身、日々の讀者から洩れて來易いこの種の皮相な反駁を怖れてゐた。そして何もそのためばかりといふのではないが、謙々抑々たる彼は自分の主義主張を徹さうといふ氣は更になく、生前自著の公刊を見合せたのだつた。實際は彼は世間に思はれてゐる以上に偉大だつた。彼は官職にあつたので、單に意見を有つに止るといふやうなことは一度もなかつた。

或る種の批評家は彼の精神的影響のあつたのは大體前大戰の中頃までであるといふ。「一九一七―一八年の第一線の兵士」に就ては彼はもはや何一つ語るべきものを有つてゐな

い。彼等を測るには、クラウゼウィッツの標尺はすべて合はなくなつたといふのである。何といふ出鱈目な話だ！　大戰後半の戰線の兵士が持ちこたへざるを得なかつた地盤こそ歪んでしまつたのである。だが一八一八年以來一九三三年までこの戰爭哲學者の思想的世界にあつた兵士の中核は一直線に直接、單なる空景氣でない英雄的精神と結びついて居り、今日吾々が得て以て喜びとしてゐる民族及び國家は、一九一八年から一九三三年までの期間にこの精神から成立したものである。クラウゼウィッツには、單なる空言——卽ち無分別にハンケチのやうに使用し得るやうな既成概念といふやうなものは、片言隻句も見出されないだらう。それだけにまた後に熟思三省を促し、それ故にまた何も更めて公式みたいなものに現さずとも、行動の指針たり得るやうな刺戟になるものが一層多く發見されるだらう。

就中、司令官といふものは、かのオペリスが與へられた方向を指示して十字街頭に屹立つてゐるやうに、あらゆる公式、あらゆる形式、あらゆる規範、あらゆる主義、原則の上

に立つて縱橫無盡に使し得るものでなければならぬと、クラウゼウィッツは云つてゐる。だがまたこの偉大な思想家は司令官の任務といふものが超人間性に往々關係するものであること、卽ち時代の任務を實現し得るものは、司令官ではなく、兵隊のみであり、一方また天賦の天才的指導者といふのは、國民の運命の如何によつて與へられたり與へられなかつたりする贈物でしかあり得ないといふことをよく承知してゐた。

曩に指摘せるが如く、クラウゼウィッツは軍隊が具體的に同じやうになればなる程、益々その指導といふことが決定的であると考へてゐた。だがまた吾々は今日ではもはや陸海軍の力などは問題でなく、國民の力が互に鬪はされたものであり、軍備のない國民を有效に指導するには、いかなる天才的司令官の力を以てしても及ばないものであるといふことは忘れてはならない。國民こそ（國防軍に非ず）今日及び明日の司令官・機關であり、この意味に於て將來の戰略にもやはり夫々軍事的、經濟的及び文化的形態があるのである。

戰略は今日でもやはり——クラウゼウィッツの書いてゐる如く——戰鬪力行使の學であ

る。然るに戰鬪は戰鬪力の表示の中に示現されんとするものである。然り、更にそれは戰略そのものの如く同時に國家及び國民の力の場に於ける放射物によつて決定されるものである。戰鬪は稍〻戰略とは違つて孤立した性質のものであり、戰爭行爲と稱せさられる大なる行動の部分的行動なのである。クラウゼウィッツはこの戰爭遂行は他の手段を以てせる政治的平和活動の繼續と解すべきものであると云ふのである。私はこの說に贊成である。

そしてその他の異說は、たとひ有力な方面から出たものであらうと、憂鬱な前大戰當時の追憶の復活であると思ふ。然るにみじめな政治のために軍司令官は戰果をあげるに必要な決定的な力強い協力が得られなかつたのであつた。

それ故、あらゆる國防活動は國民の總力を要するといふクラウゼウィッツの要求以上に現代的なものはない。國防政治的活動は經濟を犧牲として營まれるが如き國防軍に集中さるべきものではない。國防政治的活動はまた國防力を損ずるが如き經濟に集中さるべきでも

ない。考へ得べきあらゆる點に於て「國防文化」といふ表現に價するが如き文化的活動のみ行はねばならない。

これら三つの力の場が一つに融合してこそ、始めて軍事的、經濟的、精神的心理的の力が夫々相扶け合ふことが出來るのである。さうしてこそ始めて互に鎬を削ることなく、いかにして調和した協和を招致し得るかといふ問題について互に協心戮力し得るやうになるのである。さうして始めて吾々はクラウゼウィッツ的意味に於て、ドイツ國家、ドイツ國民ドイツ國土の常に當面する非常時局の要求する最高の力を發揮する見透を得るのである。今日の國家が吾々に與へてゐる國家政策的及び教育的條件が國防政治上、ドイツ史上に未曾有の好條件にあるからと云つて、吾々は今日このことを充分に多とすることは出來ない。

今日の事態は、國防政治上のことは餘り知らない專門家の――「そんなことは君になんかには何にも分りはしないんだ」――といふ御注意は通用せず、却つて反對にこちらこそ

專門家として――「いかに相互に意味疎通をはかるか」――素人に話もし、訊いて見なければならないのである。

かういふ風にして吾々は逐次從順な部下から理解ある部下に變つて行くだらう。今日我々を指導してゐる人物が背後に理解ある部下をもつてこそ、クラウゼウィッツの要求するが如き精神が武器をとる人々の間にあつてこそ、はじめて未だにわが祖國を見舞ふやも知れぬあらゆる嵐に對して大丈夫立向ひ得ることとならう。

私の論文はこれで終りである。大方の中にはこの内容の單純なのに驚かれるものもありはしまいかと考へる。だがかうした單純化は大いに喫緊のことであつて、吾々は大戰當時、クラウゼウィッツのそれの如き思想内容が全然極く少數社會の共有財産にすぎなかつたがために、この複雜な考へ方が國民の廣い範圍に理解され得るやう要約すべき萬端の手段をとり得ず、それがために非常に酷い目にあつたものである。少數のクラウゼウィッツ通が

ゐたところで、吾々に何の役にも立たない。

嘗てシュリーフェンが云つたやうに、有力な軍人の全ヂェネレーションがこの大思想家によつて育成されて來たのではあるが、それでも必ずしも充分にとは云へなかつた。何人たるを問はず、ドイツ國民の皆が皆、少くともクラウゼウィッツの著作とクラウゼウィッツに關する最も重要なことを知つてこそ、はじめてクラウゼウィッツの價値は國民的價値となるだらう。普通に云はれ勝なよりは全般に大きな抱擁力の持主である好人物のヒットラーは、クラウゼウィッツが何ういふ人物かよく知つてゐるに違ひない。

總統は彼が吾々に與へ且つ身を以て範を垂れてゐる英雄的精神の根底が、やはりクラウゼウィッツの思想の中にあることを知つてゐるに違ひない。それには何も出來るだけ澤山の言辭をクラウゼウィッツの學問の中から引用しなくともよいことである。『わが闘爭』やローゼンベルクの『神話』の中にクラウゼウィッツといふ言葉が出て來ないことは、成程不思議なことかも知れない。ニュールンベルクの黨大會に於てはじめて總統は再三クラウゼウ

ィッツを引合ひに出したものである。

それにしても吾々が見ると、クラウゼウィッツの見解とわが總統の見解との間に清新な一致が見出される。それはこれらの偉人のかうした調和といふものが全然思想的經緯を異にした全然違つた方法によつて同一の目的地に達してゐること——即ち國民にとつては國民の自由と名譽より至上のものがあつてはならないといふ結論に達してゐるのを指して云ふのである。

日獨文化協會譯

國民社會主義の基本問題

(新) 定價一圓七拾錢

著作權者　日獨文化協會

東京市京橋區銀座西一ノ三
發行者　増田義彦

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷者　肥塚一郎

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　大日本印刷株式會社

配給元　日本出版配給株式會社

東京市京橋區銀座西一ノ三
發行所　實業之日本社
電話京橋(56)五一二一―五
振替東京三二六

昭和十七年四月十五日印刷
昭和十七年四月廿日發行

(杉村製本)